

山 嶽 寮

甲南山岳会通信第 61号

2006年10月

随 想

記録の無い山行き 一昭和11年の鹿島槍東尾根一

AACK人物抄 伊藤 愿

カブール報告

嗚呼 あれはおもろかった

福永隆一さん五十回忌の慰霊集会

故郷（ふるさと）もどき

若 き 日

伊藤文三

平井一正

米山悦朗

芦田匡平

平井吉夫

廣瀬健三

飯田進

紀 行

MYANMAR Kaw Nu Symm Peak トレッキング

タスマニアの贅沢山旅

チロル、怠け者トレッキング

ジョムソンからのダウンヒル

北方龍一

越田和男

福田信三

西濱昌典

追 悼

山口雅也さんを偲ぶ

乾隆也（卯兵衛）君を偲んで

乾先輩を思う

鷲尾 顕

水野正人

西濱昌典

読書案内

田口二郎著「山の生涯」

川見博美

甲南山岳部・甲南山岳会

随 想

記録の無い山行き 一昭和 11 年の鹿島槍東尾根一	伊 藤 文 三	1
AACK 人物抄 伊藤 愿 (イトウ ゲン) (1908 - 1956)	平 井 一 正	6
カブール報告	米 山 悦 朗	13
嗚呼 あれはおもろかった	芦 田 匡 平	14
福永隆一さん五十回忌の慰霊集会	平 井 吉 夫	16
故郷 (ふるさと) もどき	廣 瀬 健 三	17
若 き 日	飯 田 進	18

紀 行

MYANMAR Kaw Nu Symm Peak (3,056m) トレッキング	北 方 龍 一	20
タスマニアの贅沢山旅	越 田 和 男	23
チロル、怠け者トレッキング (2006/08/03~08/16)	福 田 信 三	27
ジョムソンからのダウンヒル	西 濱 昌 典	32

追 悼

山口雅也さんを偲ぶ	鷲 尾 顕	37
乾隆也 (卯兵衛) 君を偲んで	水 野 正 人	40
乾先輩を思う	西 濱 昌 典	43

読 書 案 内

田口二郎 著「山の生涯」	川 見 博 美	45
--------------	---------	----

会 員 短 信

秋の集会 / 総会・慰霊祭への出欠はがきから		48
------------------------	--	----

報 告

定 時 総 会		58
秋 の 集 会 木曽福島		59
慰 霊 祭		60

ホームページから

掲示板書き込みダイジェスト		61
山行とつどい	61	ハインリッヒ・ハラー 84
これも残したい書き込み	86	森本寛之君の世界放浪旅行記 88

甲南山岳会会員名簿

..... 89

－ 随 想 －

記 録 の 無 い 山 行 き

－昭和11年の鹿島槍東尾根－

伊 藤 文 三 （昭15旧制文）

旧制の生き残りも少なくなりました。我々が入学した昭和8年、尋常科1年79名、卒業した昭和15年文理合計64名（7年間落第しなかったストレート組34名）。旧制甲南高校15回生（昭和15年卒業）文理合同クラス会誌『いちご』なるものが毎年12月発行されていましたが、会員

が死亡により減少、1996年25号で停刊となりました。その1988年17号にフクデン（福田泰次君）が『誰にも話さなかった昭和10年初夏の事』なるものを投稿しています。以下再録します。

誰にも話さなかった昭和10年初夏の事

15 理 福田泰次

僕は甲南に入学と同時に山岳部に入り、尋常科三年の夏、戦後井上靖の小説氷壁で有名になった前穂高東壁の第二登に田口先輩 註① のリードの許に成功したのが本格的登山の始まりとなった。その後徐々に山への情熱が深まって行き、四年になった頃にはもはやあらゆる情熱が山に向けられて居た。学校での授業には全く興味が持てず、人は何故このような無味乾燥な事に耐えて行かねばならぬのか、一体人生とは何なのか、結局は苦しみに耐える事のみではなかろうかと悩むようになった。

当時日本の山は殆どのバリエーションルートは既に登られていて、鹿島槍 註② の荒沢のバットレス（奥壁）が僅かに残された大物だった。よしそれでは荒沢のバットレスにぶつかってやろう。例えそれが不成功に終って死ねば死んだで良いではないか、あの美しいアルペンの雪山での死は、天国に昇るが如くアンゲネーム（安楽）なものだと言われている。これからの長い人生を苦しみに耐えて生きて行くより余程良いではないか。或いは成功すればするで、その時は又別の人生が開けるだろう。よしやろうと決意したのが尋常科四年の一学期の中頃だった。それで学業の方は投げ出したままで装備、食料の準備、そしてルート研究等に秘かに取りかかった。勿論以上の決心、準備については誰にも打明けなかった。

ほぼ準備が完了した頃のある日、松タン（青松）の英語の授業の時間で、確か一学期の中間試験だったと思うが、生徒一同で松タンに試験の範囲をまけてくれとの交渉が始まった。大体松タンは僕の大嫌いな教師の一人だったので、あんな奴に女々

しく物事を頼むなんてとんでもないとむかむかして来た。当時僕の席は一番前だったと思うが、突如後を向いて「みっともない、止めろ」と大きな声で怒鳴った。何が何だかわからぬが、授業中に僕が突然怒鳴り出したので、びっくりしたのはむしろ皆に懇願されていい気持ちになっていた松タンだったと思う。授業の終わった後僕に教員室に来いと言う事で、何だかわけの解らぬことをブツブツ言って怒っていたが、僕は黙秘権よろしく一言も答えず教員室を出たように覚えている。

チャンス到来、かねての計画実行の時が来たという次第で、誰にも言わずその日の夜行で秘かに松本へ向った。今で言う蒸発だ。大きなリュックと共に乗り込んだ汽車が本山付近を通過する時、ああ子供の頃から見馴れたこの辺の景色も、もう二度と見る事はないだろう、と車窓からじっと六甲連峰を見つめた事を妙に今でも覚えている。

気の毒だったのは松タンだ。唯でさえ神経質な人だったのに、何の事やらわからないが僕が突然怒鳴り出し、それを注意したら今度は蒸発してしまった。自分に責任があるのではないかと随分悩んだらしい。

松本駅ではいつも行きつけの駅前飯田屋旅館の客引きのオッサンに見つからぬよう、そっと大町行きの電車に乗り換え鹿島村に入る。村では甲南の先輩がいつも世話になっていると聞いていた狩野の家に立寄ったところ、オヤジさんは余りにも大きな荷物なのに驚き（荒沢のバットレスに登れるまで数ヶ月でも頑張るつもりで準備したので、可成りの大荷物になっていた）大川出合いの造林小屋まで荷運びを応援してくれた。

さて根拠地を造林小屋（無人）にして翌日から早速偵察に出た。大川を遡ったが荒沢の出合がどうしても見つからない（後で解ったのだが荒沢は出合付近では僕が思っていたよりは可成り細くなっていた）一、二日偵察を繰り返していたが、所謂梅雨期となって毎日毎日雨が降り続いた。

そうした日が何日か過ぎたある日、そろそろと大勢の人夫衆がやって来た。営林署雇いの人達で所謂造林作業の為に入山して来たのだった。彼等の作業の為に作ってある営林署所属の小屋なのだから、無許可、無料で入り込んでいる僕に当然出て行けと言うべきところを、一言も言わず同居を許してくれたのは、やはり当時のんびりした時代だったのだと思う。

翌日から相変わらず雨が続くので彼等も仕事にならず、毎日小屋の内でごろごろしている。このような時、荒くれ男共の無聊を慰めるのは当然わい談。小生丁度色気づいた年頃だったので、横で素知らぬ顔をして聞き耳を立てていると言う日が続いた。

そうこうしている内にある日、小屋の外で何か人声がする。出て見ると何と先輩の田口氏（前記）と近藤氏 註③ の二人である。「おいこら福田（フクデン）」と言う

わけで連れ出された。かくて荒沢奥壁の初登攀と言う雄図空しく山から引き下されたわけだ。それにしても両先輩は僕が鹿島に入っている事によく気付かれたものだ。尤もこの両先輩、二年前にはこの造林小屋にこもって積雪期の鹿島槍東尾根の初登攀に成功されていたと言う事実もあった。そして僕もその時近藤さんが部内雑誌に書かれた紀行の美文に魅せられ、鹿島にロマンを感じて、この山に引き付けられたと言うのも事実である。

さて甲南ではその時点では既に一学期の試験も終了して夏休みに入っていたが、僕はどうしても神戸へ帰る気になれず、取りあえず両先輩と東京へ出て姉の家に泊まる事になった。

以上のような経過を辿ったが、僕は尚山への情熱を捨て切れず、又甲南へ帰る気にもなれず、松本高校を受けて山に登りたいと考えたが、取りあえず中学は卒業せねばならぬので成城の尋常科の編入試験を受けた。しかし既に甲南へ僕の事の問合せが行って居り、当然編入不許可の結果。仕方なく何所か東京の中学校の編入試験を受けてやろうと勉強を続けていたが、もともと勉強に情熱を失ったのが事の始まり、結局は親類その他多くの人達に説得されて、二学期の始まった甲南へ逆戻りと言うだらしない有様となった。

以上が今まで誰にも話さなかった昭和 10 年初夏、若き日の物語です。親友ノンキにも何となく以上のような話をする気になれず黙っていたので、東京甲南学生会誌の甲南人脈山岳部編に僕が「理科へ進むのがいやで山へ蒸発した」と報ぜられているが、上述の如く理科どころか学問そのものがいやになっていたと言うのが真相である。

このように学問への情熱を失った状況は、結局大学卒業寸前まで続いた。即ちやっと大学の卒業研究の時になって、今まで他人が到達し得なかった未知の分野に自らわけ入って行く事の喜びを初めて知ったのだった。それまでは他人が発見した原理、原則を教えられ、それを無理やり覚える事が学問だと思っていた。だが学問とは未知への探究であり、本当にすばらしく楽しいものだと言う事を、眼の上の鱗が落ちる思いで知ったのだった。そしてその事は学問だけではなく、人生そのものが未知への探究であると言う事も徐々にわかって行くようになった。それを引出して下さったのはやはり卒研の指導教授がすばらしい方であったからだと信じている。（この事については「いちご」13号に大学時代の思い出として書いた）考えてみれば登山の初登攀も未知への挑戦なのだ。それまで何人も足を踏み入れなかった所に自ら足を入れるのである。こんなすばらしい喜びは他にあるだろうかと思う。

それにしてももしあの時田口先輩等に助けられなかったら多分荒沢で死んでいたろうし、又甲南に戻らず松高を受けていたら一、二年浪人して、たとえ入学出来ていたとしても、僕等の次の年度の松高山岳部の連中は、例の前穂の東壁で昭和 15

年春に大きな遭難を起こし、多くの部員を死なせているので、恐らく僕はその中に入っていた事であろう。

人間の一生には何が起こるかわからない。しかしその一つ一つのvariety目を越えて行くのが人生と言うものかも知れない。僕には男の孫が三人いるが、今丁度その頃の僕と同じ年頃なので何を考えているのかが解り、親達が心配する気持ちも解るような気がする。しかし結局はすべて本人が自ら解決して行くべき事だとは思うものの、僕自身の経験からみて、周囲がちょっと方向を転換させてやる努力も必要だと思う。僕の場合で言うと田口、近藤両先輩、僕を説得してくれた親類、卒研指導の教授、そして勿論母親等がそれに当たるような気がする。

最後に近況を一言。小生の山好きは今も変わらず、この夏もパキスタンのガンダーラからカラコルムハイウェイをギルギット、フンザを経てシルクロード、カシュガルに抜ける孫八っあんに教わった天山南路、北路の玄奘三蔵法師の逆コースのツアーに参加すべく張り切っていたのですが、人数が集まらず中止、誠に残念という事になった。9月の始めには米国出張の帰路カナディアンロッキーの山々をのぞいて来ました。10月には年中行事で甲南山岳部OBが乗鞍に集まる予定、その時ノンキ、ワシオさん等に会えるのを楽しみにしています。又私の住んでいる三浦半島にはまだまだ未知な所があり、休み毎に小さな未知を求めてさまよい歩いている今日此の頃です。

註① 田口二郎氏

当時東大学生。戦中ヨーロッパアルプスで多くの初登攀の記録を残し、戦後はマナスルで活躍。最近まで日本山岳会副会長をつとめる。現在鎌倉在住、小生の葉山とすぐ近くなので時々出かけて行って昔の山の話をしている。

註② 鹿島槍荒沢奥壁に関する登攀史

初登攀

北稜、南稜とも昭和10年7月20日（私がアタックせんとした時より一ヶ月後）今西寿雄他。当時浪高山岳部。戦後マナスルの初登攀者。現日本山岳会々長。

積雪期初登攀

北稜。昭和12年3月28日。小谷部全助、森脇芳之。東京商大山岳部。この他北岳バットレス、前穂東壁で活躍した有名なアルピニスト。終戦直後奇しくも兩人時を同じくして肺患の為死亡。

南稜。昭和16年3月26日。伊藤文三、佐谷健吉（浪高出身）当時東大山岳部。我等がノンキの武勇傳。

註③ 近藤実氏

当時岡山医大学生。有名な前穂四峯の甲南ルートの開拓者。既に故人。

さて、フクデン蒸発事件一年後の尋常科4年（今の高校1年）の昭和11年5月、修学旅行な

るものがあつた。何泊かで四国九州に行くという。それだけの日数と金があれば北アルプスに

行けると、どちらが言い出したか、修学旅行をさぼってフクデンと二人で山行を決意。フクデンはお婆さんが死にかけているからと不参加届け（お婆さんが死にかけていると言ってよく学校をさぼったので、担任教師がお婆さんはまだ死なないのかねと言ったとか、言わなかったとか）。私は親が知り合いの県立病院のドクターに電話で診断書を依頼、そういうことなら用意しておくから自宅に取りに來いと。そこで神戸の上筒井のお宅に夜伺う。病名は腸カタルにでもしておきましょうかということで、静養を要すという県立病院の診断書もらって不参加届け（いやはや、ある意味では古きよき時代だった）。

山行の服装で甲南関係者に出会いとまずいと、二人別行動で大阪駅近くにあった好日山荘で落ち合い、着替えて名古屋乗換えで松本一大町へ。

目的は三の沢より東尾根を経ての鹿島槍登攀。昭和8年4月、田口二郎、近藤 実、伊藤新一のパーティが初登したルートを、5月だから北俣本谷は雪なく、三の沢も雪の状態が安定しているだろうから我々でも登れるだろうと、記録を

良く読んだフクデンが判断し、ホイホイと私がついていったというわけ。

大町から鹿島村の狩野さん宅まで歩いて行ったのか、車で行ったのか、何時頃着いたかの記憶なく、ともかく狩野さんのところで一泊。翌早朝出発。大川出合い造林小屋の前を通ったのは何時頃だったか、前年田口、近藤両氏に見つけ出され連れ戻された時の話をフクデン喋ったと思うがどうも思い出さない。

三の沢出合いはかなり雪が積もっており、アンザイレンして尾根筋までコンティニアスで登る。第一岩峰、第二岩峰ともにビレイして登った記憶なく、どうも時間稼ぎもあり本谷側に逃げたのではないかと思う。北峰に立ち握手なんて記憶なく、右股をいっきにグリセードで下る。

現在の記憶は、ここまで。いやはや、いいかげんなもの。

甲南の正規の記録に無いこの山行、記録をよく整理し山行の記憶力抜群のフクデンと、あの世で思い出話をしようと思うこの頃であります。

編者注

この山行の記録は勿論当時の部内雑誌にもないが、鹿島の狩野家の宿帳（現在大町の山岳博物館所蔵）には

昭和十一年五月六日

甲南高等学校山岳部

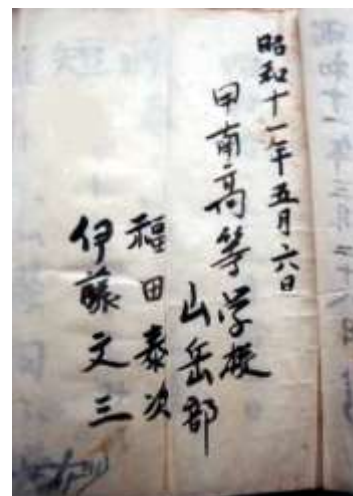
福田泰次

伊藤文三 なる署名が残っている。

赤松二郎「鹿島のお婆ば 狩野きくのさん」

山嶽寮 甲南山岳部創部 75 周年記念号

(2001 年) 参照。



伊 藤 愿 (イトウ ゲン) (1908 - 1956)

平 井 一 正 (名誉会員)

(AACK Newsletter March 2000 より転載)

1973年、AACKがヤルンカンに遠征したとき、伊藤愿さんの遺影を西堀隊長が房子夫人にたのんでもらってきていた。隊長はしみりとして言った。「これをヤルンカンの頂上に埋めてきてほしい」。5月14日松田と上田は小雪まじりの頂上にたった。松田が雪にさしこんだ写真のセルロイドケースを、上田はピッケルのシャフトでコンコンとたたいて埋め込んだ。このエピソードは、いかに伊藤さんのヒマラヤへの大きい思いが、時代をこえて我々に受け継がれているかを物語る。(伊藤愿、ヒマラヤに挑戦して、92年に中公文庫で再発行、ここで上田豊が解説している)



それでは伊藤愿さんはどういう人であった

か、パウル・バウアーの「ヒマラヤに挑戦して」の翻訳者であり、この本に書かれていた遠征費用から、ヒマラヤ行が具体的に動き出したこと、ポーラーメソッドを極地法と訳し、富士山で実践したこと、1936年に、AACKのK2登山の許可交渉のため、インドで交渉を行ったこと(今西：ヒマラヤへの道、中央公論社)などという断片的なことを除いて、ほとんど知らないと言ってもいいだろう。AACKの歴史にも関係する重要な人物であり、その登山活動からも、知的活動からも、また国際人としてもすばらしい登山家であったことが想像できるが、我々の先輩としてもっとよく知る必要がある。そういう動機から、資料を調査し、房子夫人にもお目にかかってお聞きした結果をまとめてここに記す。

(以下敬称略)

I、略歴(文献1)

伊藤は1908年兵庫県香住町の不在地主の長男として生まれた。弟と妹がいたが、妹は小さいときに亡くなっている。弟は三高を出て医者になり、晩年は薬屋をしていたという。同志社中学、旧制甲南高等学校を経て、1932年(昭和7年)京都大学法学部を卒業、大阪朝日新聞社に入ったが、社会部の警察廻りに嫌気をさして退社。昭和8年、高文(高等試験行政科試験)にパス。松方さんや浦松さんが関係していた太平洋問題調査会の研究員として中国へ。北京駐在員として中国経済研究に従事。36年7月から

37年4月までヒマラヤ登山交渉のためインドへ。帰国後再度中国へ。北支の最高経済顧問だった平生鈇三郎（甲南高校創始者）の秘書、興亜院事務官などを経て、終戦のときは青島の領事をしていた。インドに行った期間を除いて、終戦までの生活はほとんど中国であった。帰国して、内閣、経済安定局、外務省、建設省、大蔵省を歴任。1951年、土木事業の行政制度および法規等の調査研究のため、欧米に3ヶ月の出張を命じられ、余暇にスイスアルプスで登山、ミュンヘンでパウアーと歓談。類い希なる人材であったが1956年11月ガンのため没。享年48歳の惜しまれる死であった。

II、甲南高校での登山

旧制甲南高校はいまの甲南大学であるが、伊藤は甲南に来てから登山をはじめ、やがて登山界の第一線におどりだす。高校1年の夏（1926年、大正15年）、はじめて燕、槍が岳を縦走、同年冬、スキーをはじめ。芦屋ロックガーデンで岩登りの腕をみがいた伊藤は、翌年夏、単独で滝谷を登り、続いて小槍の単独登攀に成功する。滝谷は2年前に早稲田隊による初登攀以来の登攀であり、小槍は4年前に慶応が登ったところである。そこを若い高校2年生が単独で登ったということで、当時の岳界に衝撃を与えた。このときの彼の徳本峠からたどったトレースを後述する山歴の表に示したが、まさに驚異的な山行きである。

伊藤の山歴は後に示すが、その中でも特筆すべきは、1928年（昭和3年）5月の槍から立山への縦走である。いくら5月とはいえ、装備、食料など今日とは比べものにならないほど重く、雪中露営の知識も乏しい時代に、積雪期に尾根筋を長期縦走するという形式は、着想といい、

実行力といい、当時としては画期的であった。

興味あるのは伊藤は大島亮吉の遭難に遭遇していることである。同年1928年3月23日に伊藤は人夫今田重太郎と槍に登った。その帰途25日に北尾根を登っていた慶応の大島亮吉が遭難し、それを知った彼は遺体搜索の応援に行っている。余談であるが、今西は大島と面識はないが、大島を登山界の鬼才として最大の尊敬を抱いていた。この両雄が手を組んで仕事をするようなことがあれば、日本の登山史は変わっていただろう。それだけに大島の死は大きい衝撃を与えた。（田口二郎、東西登山史考、岩波、95年）

伊藤は学究の登山家でもあった。山岳気象と雪中露営の問題にとりくんでいて、その成果は「アルペンクリマについての一断片」（甲南高校山岳部報第二号）、「雪中露営の諸問題」（関西学連創刊号）などにみることができる。

伊藤は現在の甲南大学山岳部の先輩でもあり、いま歌われている山岳部部歌も伊藤の作詞である。旧制甲南高校を卒業してAACK会員になっている人は、伊藤のほかに西村格也、喜多豊治などがいる。

III、京都大学での活躍

常に創造的でパイオニアワークを目指していた伊藤が、大学を京大にしたのは当然の帰結であった。よき土壌をえて、伊藤は思う存分力を発揮する。彼が大学3年生のとき、1931年12月、パウル・パウアーのカンチェンジュンガ登山の報告書の和訳「ヒマラヤに挑戦して」を出版する。これはAACKのヒマラヤ熱に火をつける結果になる。（出版社の黒百合社は、日本山岳会の会員中原繁之助さんが営利を度外視して経営に当たっていた - 島田巽：山・人・本、茗溪堂、76年）。さらに同年暮れから正月にかけて、西

堀をリーダーに富士山に極地法を展開し、頂上に3晩過ごす。このときの登山の方法は、我が国ではじめての試みであり、これを伊藤がアサヒスポーツで発表したとき、はじめて極地法という名前を使った（アサヒスポーツ、昭和7年2月）。隊員と荷物の輸送はヒマラヤでも十分通用するものであり、時代を先取りするものであった。今西は言う。「新しい形式が極地法でなくてはならぬことは自分たちにも良くわかっていました。しかし如何に実現するか、これについての具体案を示して実行に移したのは、誰だろう愿だった。自分たちが愿から教えられたところはまことに多い」。伊藤に対する最上級の賞賛であろう。

上記二つのできごとの他に、1931年6月はAACKが結成された年でもある。伊藤はこの結成に事務局長的な働きをした。これらの活動に伊藤はすべてに関わっており、彼がAACKの創設からその後の活動に果たした役割は非常に大きい。

すべてはヒマラヤにそのエネルギーのベクトルが向いていた。そしてそれは1932年のカブル一計画として発展する。しかし満州事変のためにこの計画は挫折する。

房子奥様から聞いた秘話を紹介する。あるとき平吉功が転落し、行方不明になったことがある。すんでのところでは捜索隊がひきあげるところまでいったが、伊藤が最後に逆さまになっている平吉を発見し、危ないところで一命を救った。その場所がはっきりしないが、伊藤が平吉とザイルを組んだ登攀で有名なのは1931年10月の鹿島槍北壁初登攀である。しかしこのときの記録（関西学生山岳連盟報告、第3号、1931年）を読んでも、それらしい記述はないので、多分別の場所と思うが、興味ある話である。

IV、卒業後

伊藤は昭和7年(1932年)京大を卒業後、ずっと中国にいて、白頭山などの遠征には参加していない。一方今西らはK2計画をすすめ、1936年北京の伊藤を呼び戻し、K2の許可を取りにインドに派遣する（文献2,3）。このとき加藤泰安も同行の予定であったが、費用が足らず伊藤ひとりの派遣となる。費用は田中喜左衛門や奥貞雄らのカンパによった（文献4）。現地では岸本商店が助けた。伊藤がヒマラヤンクラブのセクレタリーに会うとき、入室のサイン帳にGen. Ito と書いたことから、「ゼネラル伊藤か」と言って、すっかりゼネラルにされてしまい、歓迎されたという逸話がある。しかし日中戦争勃発のため、伊藤の努力も実らなかった。伊藤のインド派遣に関する資料は乏しく、奥様がきいても多くを語ってくれなかったという。因みにK2のサミッターのひとりに谷博の名があがっていたという（今西武奈太郎談）。当時のAACKの隊員候補で岩登りで有名であったのは谷と伊藤くらいであろう。

終戦のとき、伊藤は中国の青島にいた。敗戦の混乱の中で、彼はひとり奮闘して、青島にいた日本人に、海軍から調達した食料を配給した。知られざる秘話である。しかし彼は麻袋を盗んだというあらぬ濡れ衣で密告され、中国官憲に逮捕され、130日ほど監獄に入れられた。そして昭和21年、最後の便で帰国を果たした。帰りの船で、密告した憲兵と会ったが、疲労していたために追求する元気もなかった。奥様はさきに昭和20年12月に帰国している。

V、戦後の活躍

帰国後、彼は中央官庁でエリートの道をすす

む。1951年に欧米に視察を命じられ、その間、スイスアルプスで遊んだ期間は楽しいものであったに違いない。1951年の夏、訪欧中の松方三郎、島田巽（朝日新聞ロンドン特派員）と伊藤はグリンデルヴァルトで落ち合い、そこで愉快的な3日を過ごした（文献5,6）。平和条約もまだ締結されていない時代、当時のアルプスは日本人にとって夢のような世界であった。松方にとっては25年ぶり、あとの二人にとってははじめてのアルプスであった。彼らと別れてから、伊藤はガイドと共にウェッターボルンに登った。実に20年ぶりの山登りであった。

それに自信をつけた伊藤はマッターホルンに登ることになる（文献7）。予約していたガイドが来ないので、単独で、あそこまで、あそこまでというつもりで登っていったら、頂上についてしまった。もちろんガイドブックでルートを諳んじていたこともあろうが、若いときに岩登りで鍛えた力が十分に発揮されたことと思う。



（1951年夏 ツェルマット郊外にて

マッターホルンをバックに）

ミュンヘン滞在中にパウル・バウアーと面会し、歓談したことも快挙である。当時バウアーは60歳をこえた初老であったが、日独の登山界の話や次のヒマラヤ遠征など話がはずんだ。ババリア隊はカンチとナンガの両方に手をつけているが、どちらかを譲ってもらえないかと切り出した。この次にドイツが行くのはカンチになるだろう、と言われ、それなら日本に帰って山のグループからヒマラヤのどれがいいか意見を求められたら、ナンガをあげていいかと念を押した・・・など報告されている。伊藤がそのときなおヒマラヤに情熱を持っていたことが伺える（文献8）。



（1951年夏グリンデルワルトのブラバンド邸にて

中央左伊藤愿氏、その右松方三郎氏、右側はサミエル・ブラバンド夫婦、左はブラバンド氏の長女エリザベートさんとその夫君、島田巽氏撮影）

伊藤はその岩登りの記録から見ても、AACKでは出色の登山家であり、それだけに、もし伊藤が病に倒れなかったら、必ずや戦後のAACKのヒマラヤ遠征に参加され、我々後輩に大きな刺激

を与えてくれたと思う。その夭折が惜しまれてならない。

VI、山歴（文献1）

伊藤は学生時代から登山界の第一線で活躍している。簡単にその主な山行きを書くと次のようである。

1926 年
4 月 甲南高校入学、山岳部に入部
8 月 燕 - 槍縦走（香月らと）
1927 年
7 月 滝谷、小槍登攀（単独）
徳本峠 - 上高地 - 中尾峠 - 蒲田 - 錫杖 - 蒲田 - 槍平 - 槍 - 南沢 - 槍平 - 滝谷 - 穂高小屋 - 白出沢 - 槍平 - 槍肩の小屋 - 小槍 - 涸沢岩小屋 - 前穂 - 上高地
1928 年
3 月 上高地 - 一ノ俣小屋 - 槍ヶ岳往復 - 横尾 - 北穂、途中大島亮吉の遭難の報に接し、遺体捜索 - 上高地（人夫今田重太郎と）
5 月 常念 - 槍 - 槍平 - 三俣蓮華 - 薬師 - 立山、ツェルトによる。（辻谷、今田ら5人と）
1929 年
3 月 上高地 - 善六沢 - 西穂高（単独）、上高地生活、槍、前穂、西穂（西村、香月らと）
4 月 京大入学
5 月 早月尾根とハツ峰（高橋健治らと）
1930 年
7 月 ジャンダルム飛騨尾根初登攀（田口一郎と）
7 月 北鎌尾根（喜多と）
1931 年
3 月 八方尾根 - 五竜 - 鹿島槍初縦走（工楽、長谷川清三郎と）
10 月 鹿島槍北壁初登攀（藤田、平吉と）
12 月 「ヒマラヤに挑戦して」出版
12 月 富士山を極地法で登る（西堀、今西らと）
1932 年
3 月 京大法学部卒業
1936 年
5 月 K2 許可取得のためインド、カラコルム入りの内諾をとる
1946 年
3 月 中国から帰国
1951 年
7 月～8 月 ヴェターホルン、マッターホルン（単独）
1956 年
1 月 病没

VII、結婚

日高信六郎（元日本山岳会会長）が出張して北京飯店に泊まっていたとき、伊藤が訪ねてきた。「いま結婚を勧められ、自分もその気になっているが、なにぶん先年ヒマラヤ登山を思い立ったとき、成功するまでは結婚しないと仲間同志約束した手前、どうも踏み切れない」と浮かぬ顔である。「そんなことを気にすることがあるものか、戦争などという不可抗力で実現できなかったものが、何で結婚の妨げになろうか、それほど気になるなら、しらみ潰しにその仲間当たってみたまえ、良縁を心から祝福はしても文句を言う奴なんか一人もいないよ」というと、そうでしょうかとまだ気がかりな様子、何とも言えないいい山男だと胸を打たれた（文献9）。

こういう経緯があつて伊藤は昭和 17 年に房子夫人と結婚した。夫人は松方コレクションの松方幸次郎の孫であり、媒酌は松方三郎である。戦争中のことでもあり、明治神宮で簡単な式をすませただけであつた。女三人、男一人の子供に恵まれ、現在長男は日航に勤務されている。

愛妻家であつた。欧米出張中6ヶ月の間、奥様に99通のたよりをよせたそう（文献10）。そのコピーは今も夫人の手元にある。

房子奥様は現在86歳、青梅の慶友病院におられる。若いときはきっと可愛い、美人であられたと思わせる。今もしっかりして記憶力も抜群であり、曾孫にも恵まれた幸せな老後を送っておられる。

VIII、その他

日本山岳会名誉会員織内信彦さんによる伊藤の思い出を紹介する（文献11、文体一部変更）。

伊藤愿さんが、一人で小槍を登った記録と、穂高の滝谷を単独で登り、北穂高へ出て南沢を飛驒側へ下りた、そしてまた白出谷を上って穂高を縦走したという紀行文を読んで、非常に感銘を受けた。「こういう山登りをしてみたい」と思っていたら、一、二年後涸沢の岩小屋に私が滞在していたときに、後から4人ばかりやってきて「まだ入れますか」と言う。「入れますよ」「じゃお邪魔します」と言って入ってきた。岩小屋といっても小さく、中では立って歩けない。座って頭がつかえる位で、横になるだけ。話しているうちにその一人が伊藤愿さんとわかった。そのときは京都大学に行っておられた。

「私も小槍を登ってきました。伊藤さんが打たれた正面のチムニーに入る手前のハーケンを利用して登ってきました。あれがあったので、とても助かりました」というと「あれはもう抜いてきてもらったほうがよかったかも知れない」と言われたことを覚えている。

それから天気が悪くなって一週間ばかり風雨が続いたので穂高小屋へエスケープしたが、私は剣へ行く予定があったため、2日ほどいて下山した。伊藤さんはそのまま残って、結局、そのときに田ロー郎氏と二人でジャンダルムの飛

驒尾根の初登攀をやっている。(後略)

やがて戦争が終わって、お茶の水のクラブルームの屋根裏部屋で「土曜会」があったとき、伊藤さんがひょっこり現れたことがあった。(中略) そのとき「伊藤さんとは、昭和5年に涸沢の岩小屋でしばらく一緒になりました」というと「覚えていますよ」と言われて嬉しかった。(後略)

以上稿を起こすに当たって、甲南大学山岳会越田和男様には数々ご教示賜り、また文献などでたいへんお世話になった。また同平井吉夫様には房子様訪問に際してお世話になった。また梅棹忠夫様にはいろいろと教えていただいた。記して感謝の意を表す。

文 献

- | | | |
|------------|-------------|--------------------------------|
| 1) 越 田 和 男 | 伊藤愿氏山の履歷書 | 山嶽寮 (甲南山岳会) No. 59 2004 |
| 2) 伊 藤 愿 | 滞印日記抄 | 甲南高校山岳部部内雑誌 Vol. VIII - 8 1937 |
| 3) 伊 藤 愿 | 印度から | 日本山岳会会報 60 号 1936 年 |
| 4) 今西錦司 編 | ヒマラヤへの道 | 中央公論社 |
| 5) 越 田 和 男 | 一枚の写真から | 伊藤愿さんのアルプス行 山嶽寮 No. 48 1993 |
| 6) 伊 藤 愿 | アルプス 1951 年 | 岳人 No. 62 1953 |
| 7) 伊 藤 愿 | マッターホルン単独行 | 日本山岳会会報 161 1952 |

- | | | |
|-------------|-----------|----------------------------|
| 8) 伊 藤 愿 | パウアーとの会見記 | 岳人No. 49 1952 |
| 9) 日高信六郎 | 伊藤愿君を悼む | 日本山岳会会報 190 号 1957 年 1 月 |
| 10) 田 口 二 郎 | 伊藤愿さんの思い出 | 山岳 51 年 1958 年 pp106 - 116 |
| 11) 織 内 信 彦 | 山と人と本 | 日本山岳会会報 2002 年 2 月 |

房子夫人をお訪ねして



後列： 平井一正先生 伊藤文三会員 平井吉夫会員 越田和男会員
前列： 伊藤房子様（愿氏夫人） 山岡静三郎会員

慶友病院 平成 16 年 12 月

掲示板 書き込みから

伊藤愿氏のこと — 平井先生が紹介記事 越田和男 '05/04/03 (日)

甲南の大先輩、故伊藤愿氏のことを紹介する平井一正先生ご執筆の記事がAACK(京大学士山岳会) Newsletter の最新号(No.34 March '05)に「AACK人物抄 — 伊 藤 愿 (1908～1956)」として掲載されています。

生立ちから、甲南、京大時代、卒業後のこと、戦後の活躍、人脈などにおよぶ素晴らしい纏めです。

カブール報告

米山悦朗（昭29年新高）

今年になって三回目のカブール訪問から7月末帰ってきた。最近目覚ましい変化を遂げている現地の様子を報告しよう。

最近まず目に付くのは、都心のみならずカブール周辺地域でも開発が進み、飛行場からわれわれNGO事務所付近へのアクセス道路が片側三車線のコンクリート舗装で建設され、泥作りの住宅街に総工費150万ドルのマンションが建ち、一軒20-30万ドルの豪邸が並び、一般人への住宅団地も開発・販売されていることである。近所の食品店には冷えたビールが売られており、数ヶ月留守にすると全く変わってしまった。2-3年前に治安維持軍のPXで買ってきたビールをこそこ陰に隠れて飲んでいたのとは今昔の違いである。

ネットカフェも盛んで50メートルに一軒は街中で見られる。新聞情報では売春も盛んであり、さすがに見かねた政府がアルコールと売春は取り締まりに乗り出したという話である。

一方ではイラク流の無差別テロが横行し、道路わきで爆発があり婦女子が何人か死んだなどという話が毎日報告されているが、市民はさほど驚きもせず、またかといった感じだ。

所属するNGOの活動現場に通じる道路がタリバーンによってブロックされ、もし外国人が通れば爆破するとサイトで通告され、現場に行けなくなりもっぱら現地人スタッフ頼りの状態である。

このところ法律が改正され、NGO登録を更

新することになったが、これがお役所仕事ではかどらない。持っていくたびに新しい資料や訂正を要求され、何度行っても埒が明かない。では申請を取り下げるとするとそれも認めないといい、一体どうしてくれるのかと開き直ると、また明日来いという。要するに袖の下を要求されているわけだが、こちらも意地になりそれを拒否、交渉は半年以上続いている。

一般大衆の生活は、泥と麦藁で作った家に住んでいるが、1画30-50メートル四方を泥塀で囲み、その中に庭から井戸・便所までそろえて一族がまとまって住み、なかなか住み心地がよく、夏涼しく冬は暖かい。この住宅をつなぐ道路は車一台やっと程度の広さで、真ん中に溝川が流れ便所や生活排水はそこにたれ流しである、家庭訪問してこの溝川に足を突っ込まないようにするのが大変だ。アフガニスタンの風土病ともいえるのが、戦争直後の日本と同じで回虫であり、この溝からはこりにまみれて飛び散った卵が入り込む可能性があり、いつも心配しているがまだ感染はしていないようだ。ちなみに日本では回虫は健康保険の対象にならず、また対処できる病院も神奈川県の場合二箇所しか無いそうである。

市民の主食はもっぱら粗引きの小麦粉を使ったナンであり、毎日ナン屋に買いに行くのが子供の仕事だ、不思議とナンは自分のうちでは焼かない。大体肉は一週間に一度程度で、後は油をたっぷり使った豆かジャガイモ、トマトなどのゴツタ煮を食べるか、生の玉ねぎをかじるか、まことに質素である。

人々の娯楽はもっぱら集まってのおしゃべりだが、男たちは金曜日になると天候が許す限り闘犬や闘鶏に集まり金を掛け、日本の野球やサッカーと同じである。地方に行くと、これに加え馬に乗って羊の取りっこをするブズカシが盛んだがカブールでは見られない。

国際援助の結果、大量の国際資金が流入し一般市民の生活は向上して安定してきたといえる。学校もカブール以外の地方でも新設が盛んであり、子女教育も進んでいるが、遅れているのが医療だ。地方ではどの村に行っても、病院はもちろん看護師のいる診療所も無いところが多く、薬屋が学校の校長が病人を診て、バザールで薬を買わせている。出産は産婆がいる所はまだましで大体は家族で面倒を見ている。さらにひど

くなると母親が一人で生んで後始末もするそうである。その衛生知識は全く欠如しており、冬場雪で交通が遮断されると、生まれる子の半分は死亡してしまうと言う話も聞いている。母親の産後の処理も十分ではなく、後遺症に悩まされることも多い。

今後の国際支援は、この方向に進むべきだと思うが、国レベルの支援はもっぱら道路・橋などのインフラや、学校建設など箱ものに限られ遅々として進んでおらず、NGOにとって今後の課題である。NGOとしては、最近話題性も減って資金の流入もほとんど無くなり、箱物は日本政府の草の根資金に頼り、もっぱら手弁当で細々と識字・縫製教室と医療サービスを続けているのが現状である。

嗚呼 あれはおもろかった

芦田 匡平（昭35理）

好天が続くことは、悪天候が続くより結構なことだが、たまには悪天候が続くことで意外な流れの発生を見ることもある。それは山登りとどまらず、あちこちにも有ったようだが。

あれは三年生の夏合宿。剣岳二股合宿を終え、室堂で縦走に控えたが雨が降り出し止らない。晴れ間を見てはストップ練習などするが、また雨、雨だ。テントの中では寿司屋の話ものぼりはじめた。

食料を調べると縦走への兵糧が足りない。やむなく中止、解散と成った。

明るく日も明るく日も雨、雨、雨。八人用のテントが昨日に一つ又一つと減ってゆく。

とうとうテントは一つになった。「明日晴れへんかったら下りる」と二人が言う。そして雨。三人だけが残った。餌が有る限り下りる手は無いと考えている連中のようなだった。

翌朝、なんと快晴。帰ったやつ等の無念はどうでもよいが、ビチャビチャの米を調べるといわゆる黄変米に成りかけも。とにかく日光を信じてシートに撒いて拭ける。

乾いたら混ぜて小屋に売りに行こう。

サラミにチーズにバター。三人ではとても食い切れないアンバランスなヴォリューム。

オーツ（大津君）がそれ等をぶら下げ、物々交換の行脚にテント場の近く遠くを廻っている。

コッシン（越田君）と私は、さほどの期待もせず、とにかく米を干していた。

人は自分の持たない才能を期待以上に目の当たりにすると、驚嘆をもって賞賛するようだが、なんと、有り余ったバターが味噌漬けのビーフステーキに化けて出たのだ。

乾燥野菜を雪で戻して口にするのも感激だが、食堂でビフテキ。思いもよらない快挙に天気ともども晴れ晴れの夕食となった。

サラミやバターの贅肉を荷物から落として、とにかく初志計画通りの縦走に入る。

初日は五色ヶ原。

翌朝、物音にテントの窓から覗くと何処かのパーティーがうごめいている。

XX大学、次はYY大学通過と、又シラフにもぐる。

そろそろ起きよで！朝飯食ってデッパツ。

Two ピッチも行った所で追い抜いてしまう。

薬師のテント場はここやで、ここがええ！だれもまだ来てへん。

晩飯食うて、食器洗うて、ポケーンとして。だーれもおれへん俺達だけの広い山並み、夕日に照ってる。歌でも出るか。

せっかくの雰囲気、ザワザワと敗残兵のような大部隊が現れる。サブと見られる部員が下の方から仁義を切ってくる。側にテントを張してもらっても良いかと。ああ、どうぞ！

荷物の嵩から一年生と見られる部員が尾根から落ちるのを見たが大丈夫だったか。

薬師の朝も、ゆったりと始まった。

次のテント、太郎兵衛平の夜はゴロゴロと雷雲が近付いて来た。且つて北穂のキレットで目

の前がパツとして両腕がガンとしびれたこともあり雷は怖い。

ピッケルにアイゼン、ハーケンにハンマー。それをテントより高く遠くに運ぶが賢明。誰が危険を冒すかとジャンケンするが、とにかく急ぐべしと三人で運び急ぎ逃げ帰る。

まだ餌も在る。太郎兵衛平から黒部に下りてイワナでも食って雲の平に分け入るべしとの思いも膨らむが、コッシンは高校生を引率して入ってくるイーチャン（藤安君）と合流する約束があると言うので有峰に下りることにする。

有峰のことは冬の早月尾根の暇なテントでリュウさん（柳沢さん）から聞いていた。

それをコッシン達に話していたのだが、おかしい。静寂のはずの有峰にダンプカーが走ってる。ダム建設が始まっていたのだ。

コッシンの言うには、有峰の橋の上で三人で部歌を歌ったらしい、しかも剣岳に向って。

合宿は中断したが、組織の行事の締めくくりとして、そして、デカ（福永君）への追悼として歌い上げたようだった。

余談になるが、30年程経って“八甲田山”という映画を見た。単純に山の映画かと思っていたが、なんと、二種類の組織の在り方を見せつける映画だった。

更に付け加えたいのだが、上述登場の大津君は既に亡くなったと聞くが、ロックガーデンの銘板にその名が無い。なんとか、これからの会員銘板作成の折にでも加えて頂けないだろうか。

福永隆一さん五十回忌の慰霊集会

平井吉夫（昭32新高）

福永隆一さん(以下デカプクと呼ばせてもらいます)が小窓尾根で死んだのは1957年3月18日の晩のことです。本年(2006年)の春に迎える五十回忌に先立って、秋色深い2005年10月22日、生前のデカプクと山行を共にした甲南山岳会員17名と武田会長を加えた18名が、馬場島の大岩に設置された慰霊観音像の前に参集し、慰霊と追悼の集会を催しました。

東西から思い思いの車に分乗して、あの懐かしい道を遡上してきた参加者は、そぼ降る雨のなか、午後2時に慰霊碑の前に全員集合、田邊さんの司会で岳友による50年祭がしめやかに行われました。まず当時のリーダー・雨宮さんが、遭難時の状況、故人の追憶、あの事故がわが山岳会の歴史に残したもの、などを簡潔に述べました。

あれから50年、往時の想念が長い歳月と共に各人各様の形をとりながら、それぞれの人生の重要な一齣となっていることを、自分自身の想いと重ね合わせて伺わしてくれる、聞きごたえのある追悼の辞だったと思います。

続いてデカプクの遭難時に同行していた麻島さんによる仏事があり、参加者がひとりひとり想いを籠めて霊前に献花しました。締めくくりは「山の歌」の合唱、そのあと白萩川に沿う道を30分ほど山に向かって歩き、雨にけぶる小窓方面に黙祷してから、その日の宿所に向かいました。

宿は北陸自動車道の立山ICに近い湯神子温泉。デカプクへの献杯で始まった夜宴では、各人の胸にしまいこまれていたデカプクの思い出

がつつぎに披露されました。持ち寄った古い写真をながめながら、平均年齢が古希を超える参加者達は、50年の歳月を一举にさかのぼり、デカプクと共に青年にもどって楽しい一夜を過ごしました。

翌日の朝、雨が上がって剣が全景を現しました。大窓から奥大日のあたりまで、雪をかぶってくっきり浮かぶ壮麗な山容を目にして、参加者の多くがふたたび馬場島に急行し、展望台として近ごろ道が開かれた中山に登り、おそらく日本一と言える景観を存分に楽しみました。



慰霊碑の前で

参加者	小原耕治	柳澤 正	阿部公義
	砂川彰雄	雨宮宏光	麻島重彦
	米山悦朗	田邊 潤	芦田匡平
	伊丹弘忠	鳥居威男	越田和男
	広瀬健三	牧野 宏	平井吉夫
	大関和夫	福永健治	武田会長

故郷（ふるさと）もどき

廣瀬 健三（昭36経）

一昨年から日本山岳会の手頃な山歩きに参加して居ります。それなりに楽しんでいますが、今年1月の「坂越港後背の丘陵歩き」は大変愉快的なハイキングでした。

播州赤穂市の瀬戸内に面したこの小さな町；坂越（さこし）に子供の頃住んだ事が、山登りをはじめ、所謂アウトドアに馴れ親しむキッカケと成ったと思います。

父親がこの地の工場へ転勤となり、坂越に移ったのは太平洋戦争末期です。当時、御影の幼稚園に通っていました。（確かKACの伊藤文三先輩の末弟さんと同じ：ここは幼稚園：）

B-29爆撃機が我がもの顔に上空を飛んでいた神戸と違いこの地は平和そのものと思いきや、終戦間際 予期せぬ数機の米国のグラマン戦闘機の来襲を受け、仰天しました。親父は生きた気がしなったとの事。（戦闘機が工場を低空で飛びまわった。元来紡績工場なれど当時は松やにから航空機燃料を作っていたのでてっきりやられたと思ったらしい。後で知ったが、比較的近くの播磨造船が空爆のターゲットだった由。）

小生は怖いもの知らずで、其の様子をつぶさに見ていました。結局坂越浦に停泊中の軍の輸送船を襲撃し引き揚げたが、輸送船も果敢に応戦、小規模なれど烈しい撃ち合いがあり、對潜水艦用の爆弾が炸裂し、大音響、社宅の窓ガラスが大きく揺れたのを覚えています。一段落したので、遊び仲間と一緒に裏山に登り、メラメラと燃え上がる船を見たわけですが、其の光景が今も映画の1画面の様に目に浮かびます。

今年3月に再訪し、この裏山に登り、小鳥を仕掛けで獲ったり、ウサギを捕まえたりした懐かしの里山歩きを堪能しました。眼下に広がる坂越浦に浮かぶ天然記念物たる「生島」を、ビールを飲みながら眺め、追憶の世界に浸る事暫し。

この生島の探検と座礁した輸送船を見に坂越小学校の腕白ガキと伝馬船を漕いでいった夏の日のチョットした冒険を思い出した訳です。

（昭和22/23年頃）

輸送船：

同じ小学校に通う漁師の子を誘って探検気分での座礁船を見に行った。伝馬船で近づき、大きく傾いている船に乗り移った。

相当傾斜のある甲板は真夏の日差しをもらに受けて裸足の足の裏は焼けつきそう。ヤット船橋に辿りつき、船長室らしき部屋に入り、一面に散らかっていた海図などを記念に持ち帰った。血糊のついた対空機関砲の銃座は印象に残っている。

生島：

天然記念物となっているこの島に分け入ったのも終戦の直ぐあとの昭和22年頃の事。島は原生林いっぱいの密林、ジャングルのように、ヤンチャ坊主の絶好の遊び場所。

蔦につかまり、枝から枝へ、ターザンの様に身軽に飛びうつっては悦にいていた。（無論ターザンなんて当時は知らずも。）

ところが、後にとんだハプニングが発生。小生が地蜂の巣を踏んでしまった。さあ大変慌て

ふためいて、逃げまどうが、蜂の集団が払えども払えども、去らず、頭のとっぺんから顔面にかけてボコボコにやられた。

暗くなって帰宅した時、両親に夜半の帰宅を咎められたものの、ボコボコにやられた顔などの治療のことは全然覚えおらず。当時は、このような事に余り頓着しなかったのだろうか。

赤穂浪士に因んで：

毎年12月14日、赤穂浪士の討ち入り日に、坂越小学校児童全員が、校庭に集合して、夜明け前の寒空の下、歩き始める恒例の遠足的な行事がありました。

“” 時は元禄14年—— “” と黄色い声を精一杯張り上げて千種川堤防沿いに赤穂城まで歩いたのも微笑ましい思い出の一つです。

寒い朝、早起きして暗闇の家を出るのが本当に辛かった。姉（昭和10年生まれ）によると、校庭に整列したのは、朝の4:30頃—5時前だった由。（逆算すると家を出たのは早いときは

4:00前となる。）

今思うとまるで積雪期のアタックのようです。午前0:30頃起きて2:30頃出発と言うのが冬山・春山のアタックの時間帯だったと思います。

昭和25年、5年生の時、西宮市甲東小学校に編入し、昭和26年に甲南中学に入学しました。其の夏、学校計画の乗鞍岳登山〈肩の小屋泊〉、焼岳登山〈上高地泊〉に参加。これが最初の日本アルプス登山でした。KACの同輩；牧野ドングリ、越田コッシンも居ました。乗鞍岳登山は鈴蘭の手前辺りから肩の小屋まで一気に登りました。

翌年中学2年の時、塩田エンタに誘われ山岳部に入部、なんやかんやと言い乍ら、結局大学まで山岳部に御世話に成る事となった次第です。

平成18年8月8日記

若 き 日

飯 田 進（昭38経）

昔大町の女性は綺麗かった。山に入って、何日も雪と岩と髭面とにらめっこしていると、人恋しくてそうなる、と言うと、そうでもないのである。

青春時代とは、性の欲望がマグマとなって体内に溜まり、常に沸騰しているのである。朝起きたラッタタッタ パンツパリパリ、てなことが起きるのもその証である。

女性にはこのことが理解できていないから、

股ぐらの見えそうな短いスカートを履いて胸元も露わにして、さあ覗いて下さいとばかりの姿態で挑発しておいて。それに思わずのった男を、やれセクハラだなんだと、イチャモンを付ける。

だいたい生物界において、雄の役目は種付けとその相手を保有するための縄張り確保である。世の男性はそれを教養と理性で必死になって我慢しているのである。と、ある宴席で、某有名大学の教授夫妻の前で一席ブッタラ、奥方は難

色を示されたが、教授は、その意見大賛成です、と言われた。下司の戯言とは言えないのである。

そんなマグマを沸騰させた男の子が徒党を組んで山に入ったら、山の雌鹿や熊でさえも姿を消してしまう。そこでマグマを発散させる手段の一つが、猥談、である。

外は雨、今日は沈殿、という日。狭いテントの中で、吸い殻を爪楊枝で刺してプカプカふかすくらいしか所在のない一日。上級生が、”あんな、家の近所に二号はんが引っ越してきよってな”。からそんな話が始まる。

”それがな、結構色気あってな、白いブラウスで黄色のフレアースカトはいとってな。旦那が月曜日の晩と金曜日の晩に来よるねん。”居合わせた連中の顔が、スーッと寄ってくる。

”そんでな、こないだの晩にな、節穴からそっと覗いたんや。そしたら、お前、やっとなね。いやほんまやで。全部見えなかったけど、足からんでな、あの格好絶対やっとなる格好や。”

このへんで、うたた寝していた奴も起き出して、話の輪に加わってくる。

話の内容はたわいのない作り事である。上級生が必死になって、乏しい経験、いや殆ど無いに等しい経験と、耳学問を元に作り出した創作を、さも知ってるかのように話すのであるが、聞いている方は、結構真剣である。

こんな合宿を幾度か経験した、ある年の、劔二股合宿。この日珍しく、晴天沈殿となった。入山以来晴天続きで休養となったのである。そこで一日テントでネンネ、となったのだが。

そこは若き青春のマグマが溜まった身体。暇をもてあました。周りには暇をつぶす場所も無ければ、道具も無い。猥談も厭きた。丁度タバコも切れたことだし、数人で池の平の小屋へタバコ買いに行くことになった。タバコを買

って帰り道。抜けるような青空に八ツ峰が、チンネの岩壁が立ちふさがるように聳えていた。そんな景色を楽しみながら、二股へと下って行く、その行く手から数人の登山客がやってきた。その中に二人のうら若き女性が混じっていた。女学生くらいに見えた。そしてすこぶるつきの、ベッピンさん、だった。そのベッピンさんが ”ポンコツさん” と小生に声をかけてきたのである。

トタンにマグマが脳に突き上げてきて、そして大爆発を起こした。アワワワワ、である。

出るべき言葉が出てこない。ただぼけ一つと突っ立っているだけで、返す言葉が出てこないのである。何と悲しいことか、はよなんか言葉を、なんか言葉を、と気は焦れど言葉無し。相手のベッピンサンも間が持てなくなって、軽く会釈して去っていった。

小生それを呆然と見送っているだけだった。 ”あの子誰でんねん” そう言われて我に返ったとき、彼女の姿はずっとさきに行ってしまった。いた。

誰なんだろう、あんな別嬪見たことのないし、会った記憶もない。小生のことを、”ポンコツさん” と呼んだ。こんな渾名、山岳会の連中しか知らない。それもそう呼ぶのはOB連中である。同僚や下級生は ”オジン” と呼んでいる。みんなに冷やかされながら帰る途中、いくら考えても判らなかつた。第一あんなベッピンさん、OBの関係者にいるわけない。といって渾名を知っていることからして、やっぱりOBの縁戚者かしら。そんな考えがテントに帰ってから、そして合宿の間ずっと脳内にまつわりついて離れなかつた。

お陰様で、この合宿で何をしたのか、何処の岩を登ったのか、ぜんぜん憶えていないのであります。そして未だに思い出さないであります。

－ 紀 行 －

MYANMAR Kaw Nu Symm Peak (3,056m) トレッキング

(別名 Nat Ma Tang 英名 Mt. Victoria)

北 方 龍 一 (昭30年新高)

平成17年11月、毎年ボランティアで行っている、ミャンマーツアーも、多少マンネリ化してきたので、今回は、日数を調整して、甲南山岳会の柳澤正先輩(72)と、鳥居威男君(68)を誘って、表題の山に登る事にしました。

10月31日深夜、関空に集合し、バンコック経由、ミャンマーのヤンゴンに着き、1日観光して1泊し、明くる日、国内ラインで遺跡の町バガンに向かいました。ここは上空から眺めても、遥か視界の届く限り、11-13世紀に構築された、煉瓦造の大小パゴダや寺院の遺跡とヤシの木ばかりで人家は見当たりません。1日をこれらの観光にあて、Thiripyiysaya Sakura Hotel に泊まりました。当地では高級なホテルですが、明日からの強行軍を考えて早く床に着きました。

明朝手配していた四駆に乗って南下し、Chaukに至って、Ayeyarwaddy River を渡ります。数年前に完成した鉄骨構造の立派な橋で、これを渡れば石油の町 Seik Phyu です。町中に掘削の櫓が立ち、道路の両側には、新旧のパイプラインが、まるで素人工事のように乱雑に施設されています。

勿論野外は禁煙です、町の入り口には大きな“禁煙”の看板が立っています。ナフサには揮発分が多く、ケロシンやガソリンよりも寧ろ危険とよく言われます。この辺りからは、ぼつぼつ人家の少ない地域に入り、かなりの距離を経て、Saw に至ります。

この町を過ぎればよいよ山岳地帯です。ここに至るまでに、いくつかの大小河川を渡河しました。全く橋が無いので、例え快晴でも、上流地帯で降雨があれば、大井川ではありませんが、何日でも川止めに成るとの事です。

路はいよいよ山間部に入りますが、今日の目的地、Kmpalet (カンパレ) の手前で、山崩れの土砂が、道路を跨いで谷に流れ込み、車の前途を遮りました。

同行のガイドが、近隣の村から15名ほどの若者を呼んで来ましたが、人力では手におえず、車と運転手を此処に残して、徒歩で危険地帯を通過し、16:30 運良く居合わせた、森林局のジープに、金を支払って同乗させてもらうことになりました。之は所謂第二次大戦中の、アーミータイプと称される、小型のジープで、現在でも東南アジアでは、多数使われているのは皆様ご存知の通りです。エンジンはトヨタに換装されていましたが、タイヤは4本とも磨耗してトレッドも無く、流石の運転手も、大勢乗車しての山道走行は無理だと、なかなかOKしません、おまけにスペアも無いとのこと、ガイドが困り果てて、中古のタイヤを買ってやると言ったのですが、何時間も走らなければタイヤの店もありません。仕方なく承諾して、我々3名に、Kampalet 小学校の若い女の先生、それに、運転手と助手の男の子がボンネットの上に乗し、後部に村の男が2名、ぶら下がるようにして、総勢8名で出発しました。

これから先は悪路の連続で、何かあると、ボンネット上の助手が飛び降りて、機敏に対処します。流れでは助手がペットボトルに水を汲んでラジエーターに給水するなど、日本の終戦直後を思い起こすような光景でした。

Kampelet の村は、電話局や教会もあり、そこそこの規模です。村の男 2 人と先生も此処で降り、我々 3 名で更に 30 分、日暮れ前の 17:40 やっとゲストハウスに到着しました。

“MAUNTAIN OASISU RESORT”の看板があり、食堂棟と 9 戸のバンガローからなる大変立派な施設で、バンガローはトゥインベッド、水洗トイレ付き、シャワーは山の水で、気温も 20 度と低く、バケツで湯を運んで貰い、之を頭からかぶって汗を流しました。

食事かなりの物で、ビールやウイスキーも用意されていました。ヤンゴン到着以来、この“グランド ロイヤル セレクト”なるウイスキーは大変美味しく、柳沢先輩も大変な気に入りで、食事の度毎に注文しておりました。案内書にも、英国植民地であった為、ウイスキーはまともだとありますが、感心できるのは、この銘柄だけのように思います。私も久方振りにウイスキー党に戻りました。

明くる 4 日は再びジープで可能な限り悪路を登り、崖崩れで危険な個所を何度も通過して登山口に到着したのが 09:30 です。運転手は車に残り、09:50 よりチン族の若者 2 名を加えて総勢 6 名で出発しました。

登山道はチン族の移動路で、頂上に至るまで、危険な個所は皆無、途中チン族にも出会い鍋釜を背負って、夕食の材料になる鶏を、大事そうに小脇に抱えた集団ともすれ違いました。



2,800m付近 鳥居君

最後まで森林帯で、2,500m付近からは、お花畑もあり、赤松、石楠花、の大きな木が多く、3,056mの頂上にも、赤松の木が存在します。因みに頂上到着は、私が 30 分遅れて 14:30 でした。



3,056m 頂上の 3 名

私の知識では、普通山越えは、峠越えが常識ですが、何故か此処では宗教上の理由か頂上にもパゴダがあり、チン族の通行路も頂上を通過しています。此処では男女 15 名程の集団と出合いました。彼らは 1 週間も掛けて山中を移動するそうです。

昼食（鳥のから揚げ、ジュース、フルーツ）の後 15:00 には帰路につき、走るように飛ばし

て、ジープに 17:40 到着。多少遅くなったので、運転手と助手が心配して、途中まで迎えに来ていました。今回は、高度計と、トランシーバー携帯の必要を痛感しました。



柳沢先輩・鳥居君 帰路 2,900m付近

とつぷり暮れた悪路を、安全運転でゲストハウスに帰り着いたのは 19:00、例の湯浴びの上、夕食は 20:00 となりました。

今回は、出来るだけ日数を短縮する為に、トコトン、車を利用しましたが、案内資料によると、頂上付近で 1 泊するようになっています。

バンガローの連中の話しでは、今年の乾季の入山者は、我々が 3 組目で、2 組目は登頂を断念して引き返して来たとの事、日本人は滅多に来ないと珍しがられました。

明くる 5 日は 07:30 出発、途中標本室なる建物に立ち寄り、Aung Chin (チンの鳥) と呼ばれて、つがいの片方が死ぬと、残った方は岩に

激突して自殺すると言う、Great Hornbill や Orchid 等の標本を見て再び出発、約 20 分後、森林局のジープから、往路に乗り捨てた四駆にのりかえ、Bagan、Meiktila、を経て、実に Mandalay まで 16 時間を要し、24:00 ホテルに到着しました。

今回は、事務局より提供された、英文の資料がかなり正確で、大変助かりました。

因みに、Myanmar の最高峰は、最北端の中国国境に近い、Kachin 州の Hkakabo Razi (5,885 m) で、これが最終目標ですが、4,500m 級で、まだ外国人の登頂記録の無い山が、あるそうなので、今回はこのクラスの登山許可を申請しようと考えています。

明くる朝、マンダレーで、ボランティアの連中と合流し、Pyin Oo Lwin (ピンウーリン) では、私の設計及び監理になる、ゲストハウスに宿泊してもらい、援助している農園を見に行きました。

ヤンゴンでは、ティン エイ エイコ (神戸大学博士課程修了のビルマ族女性) の日本語学校に援助金を届け、日本語の勉強に成るからと、女子学生を全員夕食に招待して楽しいひと時を過ごしました。

食事時、柳沢先輩の、ユーモア溢れるアメリカ仕込みの英語には、ミャンマー人も我々も、全員抱腹絶倒した次第です。

タスマニアの贅沢山旅

越田 和男（昭36理）

頭の中の行きたい所リストには、いろいろと国内外の沢山の地名があり、消化速度よりも増加速度が大きく、この調子では欲求不満のままタイム・アウトとなりそうです。勤めを終えて閑になったら、どんなに気儘にあちこち行けるかと思いきや、体調、体力、懐具合+αと色々あって、旅の頻度はそれほど稼げず。閑だから新たな情報は結構多く、世の中も便利になって、これまでとても行けないと考えていたところが行けそうになったりで、行きたい場所はどんどん増えるばかりです。

オーストラリア大陸の南東にタスマニアという島があり、ニュージーランドとの間がタスマン海、ニュージーランド南島のマウント・クックにはタスマン氷河というのがある。それくらいは若い頃から知ってはいたが、タスマニアなんて簡単に行けるところとは考えてもいなかったし、あまり高い山もないので、詳しく調べたこともなかった。ところが最近になって、といっても80年代の後半あたりからだっただろうか、残された大自然を売り物にした観光ツアーが目につくようになり、そうこうしているうちに、もっと最近になって山小屋泊りの数日間の縦走コースというのを見つけるにおよび、一寸調べてみるとこれがなかなか魅力的で、行きたい行きたい！ということになった訳。

17世紀、アベル・タスマンがこの辺りを最初に探検航海したのはキャプテン・クックよりも一世紀以上も前のことで、彼が英国人ではなくオランダ人だったことなども最近になって知ったこと。オランダが領有宣言しなかったので、

太平洋では遅れをとっていた英国が18世紀に、オーストラリア本土とともにまんまと領有してしまった結果、北海道の8割ほどの面積に英国系の白人中心の47万人が現在優雅に暮らしている。更にその結果、21世紀の今年2月、英国系の妙齡の美女2人が、我々20世紀の敗戦国民一行7名様のガイド兼ポーター兼コックとして山旅をリードしてくれた。

オーバーランド・トラックへ

小生が飛び付いたトレッキング・ツアーは、「タスマニア島原生地域」として世界自然遺産に登録されているというクレイドル・マウンテンとレイク・セント・クレア両国立公園にまたがる海拔1000m前後のOverland Trackの60kmを5泊6日の小屋泊りで縦走するというもの。申し込んでは見えたものの、人数不足でツアー成立せず、3回目でやっと催行となって、打ち合わせに集まってびっくり。客6名と添乗員の一行7名中、男は我一人。家内の他の4名の女性は皆単独参加の旅慣れたおばさんパワー。現地では上記のように女性ガイド2名が加わった結果、実に9名パーティで男一人という贅沢な山旅となった。

山旅は、観光地として有名なCradle Mountain Lodgeから更に車で奥に入ったところの車道のどんづまりWaldheim Hut, 900mから始まる。観光客の多くはロッジに泊ってCradle Mt. National Parkのさわりのところを日帰りトレッキングするらしい。我々ツアーの縦走組みは、だいたい1日10km見当を5～7時間（それ

に脇道にいろいろ立ち寄るのでトータル80km位にはなるが)、最高地点1220m、最低地点720mで アップダウンを繰り返しながら南行し、トレッキング終了点セント・クレア湖畔に至り、ボートで対岸に運ばれてツアー終了となる。

森、湖、溪流と瀑布、平原と湿原、それに岩峰ありの変化に富んだ景観と珍しい野生の動植物が楽しめるのだが、天気が変わりやすく、一年のうち300日雨が降ると云われるくらい雨の多いのが玉に瑕か、われわれもよく降られた。前半3日間はほとんどゴアテックス上下のお世話になった。途中、タスマニアの最高峰 Mt. Ossa (1617m)の 登頂も試みたものの、強風雨に遭い残念ながら断念せざるを得なかった。トレイルはよく管理され、湿地帯は尾瀬のような木道。ただし、入山者数極めて少ない上、トレッカーは原則南行きの一方通行と指導されているので、他パーティとすれ違うことはほとんどない。

高い入山料で入山制限

この Overland Track に夏季シーズン中に入山するには、一般のトレッカーは、寝具なし賄いなしの小屋泊まりかテント泊で、何と1日100豪ドル(8500円)払わせられる(オフシーズンは無料)。我々のようなツアー参加の入山者は宿泊、食事、ガイド料、入山料オール込みの6日間@2350豪ドル(ざっと20万円)である。入山料が去年の11月から10倍に値上げされた結果だそうで、まさに金力による入山規制。金持ちしか行けない自然遺産だと非難轟々らしいが、今後どうなることか。因みに、ニュージーランド南島の Grand Traverse のトレッキング・ツアーはやはり5泊6日で12万

円ほどだった。



Overland Track を行く

正面に Mt. Olympus 1449m

小屋は快適

さて、その小屋泊まりだが、Cradle Mountain Huts というツアー会社の1社独占で、自前の小屋を持って運営している。このシステム開始時に入札コンペで決まったのだという。小屋は寝具付2人部屋5室の定員10名。寝室は狭いがリビング兼食堂は開口部が広くて居心地が良い。5ヶ所泊ったうち4ヶ所は左右逆転を含む全く同じデザインで、ツアー会社の社長自慢の設計だそう。温水シャワー、乾燥室あり。水洗ではないがエコトイレは無臭で快適。水は雨水を貯める巨大タンク(一寸景観をそこねるが、この水結構うまい)。燃料はLPGで自家発。必ずメインルートから数百m離れて建っており、その分岐点には何の標識もなく、まさに隠れ屋となっている。



山小屋一例 Barn Bluff Hut

強く明るいガイド嬢

小屋の常駐者はなく、小麦粉、米、缶詰その他の保存食、ワイン、燃料などはシーズン中何度かヘリ輸送され、ツアー毎の生鮮食品はガイドが担ぐ。一人が先行し、小屋到着時のアフタヌーン・ティーを準備、夕食はワイン付スリー・コース。食い切れない。すべてマニュアル化されているらしく炊事全般ガイドがテキパキとやってくれる。朝の出発はゆっくりなので助かる。昼飯用の食材がテーブルに用意され、各自自分の好きなだけ弁当箱につめる方式。一人が客と一緒に先行出発して、もう一人が後始末、戸締りして後を追う。昼食時も一人が先行して湯を沸かす。相当な重労働だが、ホスピタリティに富んだ若いおねえさんは明るく健康そのものでびくともしない。

ガイドの2人はともに23歳、未婚。リーダーのRowはタスマニアの田舎育ちの野生型。ボーイフレンドと同棲中。帰りの舟が船着場に着く直前に屋根の上に上がったと思うと服のまま湖へドボンと飛び込んだ。結構寒いのに、着たまま乾かすといって日向に座り込みアイス

食べていた。もうひとりのNaidaはニュージーランド人で、日本にも来たことがあるとかで日本語を多少話し、やや都会派か。2人とも働き者で、山のこと、動植物のことは良く勉強していた。

ワイン飲み放題

ワインはタスマニア地元産の上物で、一応2人で一本というのが目安というが、ご婦人方はそんなに飲まないで事実上はほぼ飲み放題。ツアー会社の関係先がワイナリーだとか。白(Pinot Gris)が特に美味しく、帰りに州都のホバートの安売り酒屋で土産に買ったが、一本3,000円位もした。タスマニア・ワインにはもっと安いものも勿論あって、結構うまく、日本ではジャスコに出ています。山小屋ではビールなし。



山小屋の食事

蛇がいました

出遭った生き物で印象的だったのは、小型有袋類のワラビー、人を恐れず人を無視して何やら地中のものを一心に食べ続ける針もぐら、川でなく陸にいた透明なザリガニ Cray fish、そ

れに毒蛇 Tiger snake。前の晩にタスマニアには蛇は居ないのかと聞いたら、いるいる、3種類、みんな毒蛇、要注意と云われていた矢先、翌朝歩き始めてすぐ、蛇だー。黒くて太かった。家内がデジカメで撮り、画面にズーム・アップしたら迫力があつた。ガイドがうれしがつて、他のパーティにまで見せびらかすことに。蛭にも歓迎されたが、どういう訳か、私と家内だけにくっついてきた。多分前夜のワインの量と関係がある。Tasmania devil は絶滅寸前で、帰りに立ち寄ったホバートの野生動物園で拝見した。

花の盛りは過ぎていたが、結構いろいろ咲いており、皆さん撮影に忙しかつたが、相変わらず花音痴なので報告できない。

全体としてゆっくりのんびりのペースだったが、欲を云えば雨の日は小屋でのんびりして、晴れたら歩くというスタイルであれば、もっともっと楽しめたことだろうが、それは大変な贅沢なのだろう。



峠 (Pelion Gap) の休憩。後方に乳頭山 Pelion East 1433m

チロル、怠け者トレッキング (2006/08/03～08/16)

福田 信三 (昭39理)

モーツアルト生誕250年にエキサイトするウィーン、ザルツブルグでの観劇や観光を終えて、チロル地方のゼーフェルトに滞在した。その間、2度のトレッキングを楽しんだ。はじめに、ゼーフェルトの簡単な紹介をしたい。

物の本によると、チロル発祥の地はチロル伯が治めていた現在のイタリア領チロルだそうで、チロル城も残っているとのこと。現在のチロルはオーストリアの西部、インスブルックを州都とするチロル州、更に西にあたるフォアーベルク州、そして、東チロル地方の全体を言う。

チロルを東西に流れるイン川にはアルプスから何本もの支流が流れ込んでいる。これらの川沿いに多くの個性的な町が点在し広範囲なリゾートとなり、世界中のスキーマー、アルピニスト、トレッカーを魅了している。

オーストリアと周辺国ゼーフェルトはインスブルックから列車で40分程度の交通の便利な町である。ハイシーズンはやはりスキーシーズンで、インスブルックでの冬季オリンピックではクロスカントリーの会場となった。人口3,000あまりの小さな町だが、ゴルフ場、カジノ、SPA、ノルディックスキー学校等、リゾート必須設備は全て整っている。そして、旅行者にとって最もありがたい事は、物価がかなり安いということである。自分の経験では、最も高いのはスイスのリゾートだと思う。スマートなスイス人は物価が安くて空いているという理由で、好んでチロルに来るというのが最近の傾向との事である。

地形は2,500～2,600m級の山に囲まれた盆地で、町の中央をイン川が貫いている。

富士山に良く似た三角錐の山、HOHE MUNDE (2,661m) は町のシンボリックな山である。



オーストリアと周辺国



HOHE MUNDE とゼーフェルト

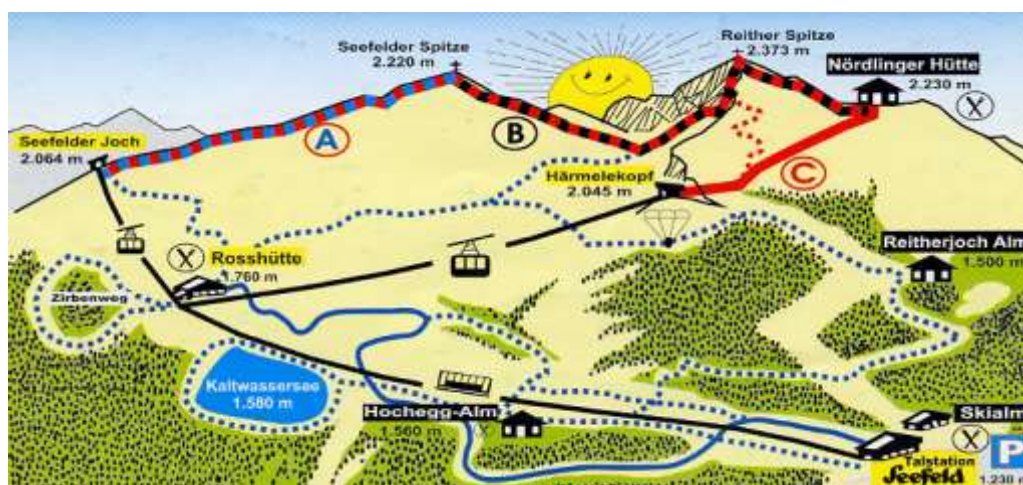
▲▲ トレッキング：その1 ▲▲

やっと晴れそうな早朝、テラスに出ると異常に寒い。気温5度。朝食をたらふく食べて(どうも、バイキングに弱い。貧乏人根性ゆえ食べ過ぎる)ケーブルカー乗場(1230m)へ。ケーブルカーはぐんぐん高度を上げて1,760mのロスヒュッテ駅へ到着。駅の周りには牧草の緑がまばゆい丘陵で、放牧の牛のカウベルの音がのどかさを醸し出している。そこからロープウェイを乗り継いでゼーフェルダーヨッホ駅(2,064m)へ。その駅はほぼ稜線上にあるのでゼーフェルトの北側、つまりドイツ方向を望むことが出来、360度のパノラマが展開し、まだ雪の残るアルプス連峰の眺めは素晴らしい。それらの山々はドイツ、イタリア、スイス国境となっているのであろう。ドイツ最高峰のツークシュピッツェ(2,694m)も槍ヶ岳に良く似た山容を見ることが出来た。勿論、ゼーフェルトのシンボリックなHOHE MUNDE も今日は眼前に明らかに見ること

が出来た。そして、目を下にやれば、三角屋根と切り妻、白壁と木組み、チロル風建築に統一されたゼーフェルトの町並や高い尖塔の教区教会が一望できる。約2時間でゼーフェルトシュピッツェ(2,220m)に達するが、不安定な天気のために断念した。



ゼーフェルト駅



ゼーフェルト周辺のトレッキング地図

▲▲ トレッキング：その2 ▲▲

ロスヒュッテ駅から別のロープウェイに乗り換えて、ヘルメレコプフ(2,045m)へ。



ヘルメレコプフへのロープウェイ

そこから、1時間程度のトレッキング。路は這い松を縫って登っていく。小石の多いガレ場のような道で滑りやすく歩きにくい。岩の露出した箇所には鋼製ロープが張られている。登山者はまちまちで、3, 4歳の子供から80超の老人まで。また、完全装備からスニーカーにGパンまで。30分ほどで這い松が消え、青、黄、白、色とりどりの高山植物が咲き乱れている。

良く知られるアルペンローゼやエーデルバイスは時期ではないようだったが、立山雷鳥沢でよく見かけるチングルマと同じものが群生していたのには驚いた。

チングルマ



汗をかきかけた頃目的のネルドリンゲルヒュッテ(2,230m)に着いた。ヒュッテの前はテラスになっていて、元気な年寄り爺さんがビール瓶を並べて、気炎を上げていた。傍にはセルフサービスの水タンクとグラスが置いてあり、感謝。中にも、50人以上は入れるレストラン、宿泊用の個室が完備され清潔にされていた。レストランのメニューはイタメシから地元料理が揃っていて、家族連れで賑わっていた。



ネルドリンゲルヒュッテよりゼーフェルド
ヒュッテの裏の稜線からはドイツ、イタリア

国境の山々が遠望できた。そして、目の会った登山者が説明してくれる会話の中に、ドイツのピークシュピッツェを聞き取ることが出来た。



ドイツ国境を望む

余談ではあるが、この山、帰路のインスブルック空港を飛び立って間もなく、左窓から間近に見ることが出来た。アルプスには80 くらいの4000m 級峰があるが、モンブラン(4,807m)のあるモンブラン山域、ユングフラウ(4,158m) ネルドリンゲルヒュッテよりゼーフェルドのあるオーバーラント山域、マッターホルン(4,478m)のあるヴァリス山域に集中している。チロルあたりはその殆どが3000m 弱である。

ヒュッテを離れる前に、興味があつたので、トイレを観察。ヒュッテとは別棟になっていて、木造の前室付(多分雪などを払い落とすため?)で、洋式。水洗では無いが便座式。臭気は殆ど無い。ものの落ちる音から、タンク式であろう。水の入ったジョウロとタワシが置いてあり、必要ならば水洗いをする。表には雨水を貯めた手洗い用のたらいがあり、全体として非常に清潔

だと感じた。ネパールのそれとは大違いで、国民性の違いを感じた。小屋への物資輸送は、ロープで麓から荷を運ぶトロッコで引き上げている。多分、下りには汚物やごみを積み込んでいるのだろう。

＝余談：初めて知ったオーストリアあれこれ＝

- ・ オーストリア人は英語が非常に流暢。特に、若い人はイングリッシュスピーカーと間違えるくらい上手いし早い。旅行者はドイツ語を全く話せなくとも心配なし。
- ・ 喫煙者天国。3週間ほどの滞在で喫煙席を見たことが無かった。どこのホテル、レストランでも全てのテーブルに灰皿があつた。かといって、くわえタバコは殆ど見なかった。
- ・ 物価が安い。特に、高級リゾート地といわれるチロルでも安い。スイス人が物価の非常に高いスイスを逃れて、オーストリアへ来るそうだ。特に夏のスイスは、大混雑で、登山電車やロープウェイ行列は当たり前とか。
- ・ ホテル料金。ハイシーズンとローシーズンの差は2倍以上。特に、クリスマス、年末年始はそれ以上。日本ではスキー人口が減っているとか聞いているけど、ヨーロッパでは根強い人気。カジノ、スパなどのアフタースキーが充実しているため、誰もが楽しめる場となっているのだろう。
- ・ イタリアからの観光客が非常に多い。インスブルック⇄ミラノ、列車で僅か3時間半。

家族連れが殆どで、芝生でもレストランでもしゃべりまくっている。

- スポーツジムのサウナ、スパでは男女混浴。北欧のように何もつけてはいけないというのではなく、水着、バスタオルの着用は黙認されている。中には丸裸の女性もいるので、当

初はかなり緊張する。どこが？

- 現在のチロル地方とは？ヨーロッパアルプスの東側の地域一帯で、かなり広範囲です。国名で言うと、スイス、オーストリア、ドイツ、イタリアにまたがっており、ドイツ語が通じる地域を言う。

山岳共済保険（ご参考）

社団法人日本山岳協会の山岳共済制度。（山岳保険）

年会費（保険料）6,200 円で、万一の時・後遺障害 200 万円 搜索費用 200 万円 個人賠償責任 1 億円の内容です。

一般のスポーツ傷害保険との違いは搜索費用の有無です。加入隨時ですが途中加入でも1年分の会費がかかります。4月-3月が年度区切り、来年春先が切り替えの時期になります。

上記は一例でほかにもタイプがあります。手続きは兵庫県山岳連盟経由、連盟役員の福田会員が取りまとめているので「チロル、急げ者トレッキング」の空きスペースでお知らせしました。

ジョムソンからのダウンヒル

西濱昌典（平4理）

1. はじめに

ネパールに来て色んな山があることを知りました。

エベレスト等の高所登山で知られるヒマラヤ遠征登山、山岳部の我々が目指す「より高き、より困難を！」の山。

そして、限りなく続く白い峰々の麓に点々と散りばめられた村々、その村々を訪ね歩き人々の生活に触れるトレッキング。

その山深い谷間を川と共に流れて行くラフティング。

その川の上100mに掛かる山と山を結ぶ吊橋から飛び降りるバンジージャンプ。

そして、マウンテンバイクで峰々を駆け巡る山。



私はカトマンズに引っ越して以来、通勤手段としてマウンテンバイクを選び、毎日片道10km、標高差100mの通勤路を往復しています。

ここカトマンズの通勤にマウンテンバイク

（以下、MTB）は最適で、首都でありながら舗装道路ですら未舗装道路のような状態です。

そして、MTB を乗るようになると、現地ネパールでのMTB 事情が見えてくるようになり、結構MTB が盛んであると知るようになりました。

そして、MTB レースに参加したりするうちにネパールで有数のMTB コースが西の方にあると知るようになるのでした。

ネパールで長距離ライディングで有名なコースと言えばチベットのラサからカトマンズまでの約10日間のコース。

丸一日、上り坂の日もあるロングライドを満喫できる行程。

そして、もう一つが今回行って来たジョムソンーベニのダウンヒルのルート。

ネパール人友人から事ある毎に、「おい、今度いっしょにジョムソンのダウンヒルしようぜ！」と誘われ続けていたのですが、如何せん遠い！世界強風三大名所のジョムソンは飛行機の欠航が多発する所。

欠航が無くても、カトマンズから直線距離でたった200kmにも満たないのに最低2日間かかるのです。

どう見積もってもカトマンズから出て帰ってくるまで4日間は掛かる。

欠航の事、予備日の事を考えると6日は欲しい。

本社へ「自転車旅行へ行くから1週間休みとります」とは口が裂けても言えない。

と、結局ジョムソンダウンヒルを知ってから今回の正月休みを利用して実行に至るまで2年

以上月日が経ってしまいました。

ただ、ジョムソンーベニ間は通常2－3日掛けて行く所。それを休みの都合から1日で走破しなければならない事もあり、ちょっと気合を入れなければならない行程でもありました。

この日の為にカードローンで購入した前後サスペンション/ディスクブレーキの自転車、ジェーミス ダカル1. 3 (定価約20万円) が私を後押しします。

機は熟した！今しか無い！無理かも知れないが行ってしまえっ！

ここで、ジョムソンーベニ間のルートについて説明をしておきます。

1. ルート情報

ここで本ルートに最適な地図があります。

アンナプルナ周回自転車マップ「Biking around ANNAPURNA」なるものが大変有効です。

タメルの大手本屋にて約800Rsにて販売されています。私、これを買うのに3日間ほど悩みました。

高過ぎです！

2. コース概要

で、コース全体は3つのパートに分けられると考えます。

この地図ではもっと詳細が記されていて自転車を降りて押す区間とか、担ぐ区間とかが明記されていますが、実際に走った後の実感としては3区間に大きく分けられます。

1. Jomoson－Kalopani 間の川原主体コース

ほとんど乗りっぱなし

2. Kalopani－Tiplyang 間の村々を抜けるコース

乗り押し担ぎの複合技。キツイ！

3. Tiplyang－Beni 間の車の通る林道。

後半は車の通る林道。

疲れが無ければ爽快！

3. コース間の施設

警察や軍チェックポストは、事前情報では毛派の影響で無いと聞いていたが、ジョムソン空港内とLete村、Ghasa村の先の吊橋右岸（ここは国軍）があります。

Lete村の警察チェックポストは石畳の直線道路に面してあって、スピードを出していると見過ごすかもしれません。

吊橋右岸のチェックポストも、直前にある簡易柵を気にせずに通過すると、チェックポストを通過せずに吊橋に入るかも知れません。

ただ、空港内のチェックは避けることが出来ない為、ACAP入域料2000Rsと自転車持ち込み料5\$/日は事前に取得する事をお勧めします。ジョムソンでも取得可能だそうですが、2倍の金額を請求します。

宿泊場所としては、Tatopaniがお勧めでしょう。温泉で有名です、ココ！

Jomoson－Beni間全行程約80Km中このTatopaniはJomosonから約55km。

55kmはちょっとキツイかもしれませんが、宿泊地に温泉は重要な要素です。

因みに私はこの温泉、時間の都合上見る事できませんでした。またこの村は比較的宿も整っているように見えました。

また、ここにたどり着けなくても、道中10km每位には宿泊できそうな村が点在しています。

医療関係施設は確認しませんでした。事故らないよう無茶は禁物ですね。



4. 走行記録

レイクサイドのゲストハウスを 05:30 出発。出発時間が 7 時、チェックインが 6 時と切符に記されている為ポカラ空港朝 6 時着となるが空港建物がまだ開いていない為、空港敷地内に待つ。6 時半に航空会社職員がやってきてチェックイン開始。

過去に一度エベレスト方面の玄関ロクラへ自転車を持っていったのだが、飛行機に自転車を積むときに私の指示通り積み込みをしてくれなかった為に、後輪ギアの取り付けられるテール部分が曲がり、またディレーラのセッティングが変わってしまったりして、エライ目に会ったので今回は警備担当の兵士の制止も聞かずに駐機場へ進み、積み込むところから扉を閉める処まで自分の目で確認してから待合室に戻った。今回はチェックインカウンターで指示した通りの積み方をしてくれて助かった。

チェックイン時の自転車荷造りは、タイヤの空気を抜くだけで、別に輪行バッグに入れなくても良かった。また、サスペンションの空気は抜かなくても問題なかった。

以前から Jomoson 行きフライトは現地の風の状態に大きく左右され、Pokhara が晴れていて

も数日間フライトキャンセルになるとの話を聞いていた。

私の場合、休みの都合上この日一日しか無いので祈るような思いでチェックインしたが、あつけなく 07:30 出発となる。

ヒマラヤの景色を堪能するなら右側の席を取るべし！

Jomoson までのフライト時間は 20 分も掛からず、アッチゅう間のフライト。

予定では Jomoson から Beni まで自転車でするのに 9 時間を想定している為、飛行機の効率のよさに感服、谷間をすり抜けて行き目的地に近づくにつれ草木が無くなって行く目まぐるしい景色の変化を楽しめるこのフライト。

これで 60 \$ 余りは安いでしょう！

07:50 なんの問題もなく jomoson 着。気温は低く陽も当たらない為寒く感じるが、実際の気温はゼロ度くらいと思われる。

駐機場に直に置かれた荷物を自分で回収、その場で自転車を組み立てる。ポカラの暖かさの余韻が瞬間に抜けて行き重ね着をする。荷物も再パッキングして駐機場から自転車にまたがり飛行場外へと抜ける。空港建物を自転車に乗ったまま抜けた瞬間にチェックポイント。

そこを抜けて Jomoson 村を貫く石畳の道を左に進路を取る。村はずれのレストランにてお茶とアップルパイ 1 ヶを注文、朝食とする。出発前最後の装備点検と地図確認を済ませて 09:00 出発する。



走行を始めると思った以上に暖かく、カトマンズの冬用衣類にウィンドブレーカー一着を重ね着する程度で十分暖かかった(暑いかも・・・)それでも、小川や水溜りは凍結して未舗装路も凍っているが乾いた大地の為滑る事はない。

Jomoson を抜けると車道幅の明確な未舗装路(1車線幅)が続く。10分位で本流右岸を沿いながら上りとなり右へ屈曲した後下って支流上流へと向かう。

※この道が上り坂になる手前で本流沿いの川原道を進んでも問題無いと思われる。

事実、歩行者や家畜は川原に歩みを進めていた。

左手の川の流れが進行方向と逆向きになった為本流から外れて支流に入ったと確認できる。

よって、支流沿いに踏み跡を下りながら本流川原に出る。左手に本流の流れを見ながら橋一本をやり過ごす。その後は広大な川原に付けられたトラクターの轍を頼りに爽快に飛ばす。

途中、トラクターの道が本流を幾度と無く渡渉する。濡れる覚悟で行けば問題無い水量と流速なのだが、この寒さで濡れるのは嫌。

もうこの辺りは左岸に近いのだが遠く右岸側

遠方に橋がありそうに見える。

私はココで途中追い抜かした軍用トラクターに拾ってもらい、4回分位の渡渉を逃げた。

※この辺りでも地図上では右岸沿いに道があるとなっている。



川原内を蛇行しながら日本では体験できないような景色の中を爽快に飛ばす。

Sokung 辺りで川原コースと分かれる。トラクター道は引き続き川原内を進んでいる模様。ココは左岸の明確な登山道にルートを取る。この辺りから Kalopani に到着するまでに初めての降車と押しを体験する。ルートファインディングで難しいのはココまで。

ココまではだだっ広い(幅1kmはあろうかと思われる)河原を進んでいく為不安にかられる。Kalopani に至ればもうルートファインディングに悩むことは無い。

ひたすら明瞭な道を追い掛けるだけであるが、ココから先までは押しや担ぎや激坂下りの連続で体力の消耗戦に持ち込まれる。

そして、この時ちょうど毛派の運動中で各村から活動要員として徴集された村民がポカラやカトマンズに送り出されたようで、御年寄りしか見られない村がいくつかあった。

温泉で有名なタトパニ村には13:00 着。

Tiplyang 手前には最後の関門があり、吊り橋の両側が急峻な山肌で、吊り橋へ下る道も担ぎ、吊り橋を経ても担ぎと疲れた体には応えるところである。



Tiplyang を過ぎると、爽快な自動車の通れる未舗装道路がひたすら続きます。最高速度は60 km超。ベニに近づくにつれ傾斜も淡くなり上りが要所要所に出てくる。

18:00 ベニ到着。話に聞いていた6時初ポカラ行きのバスが毛派問題が出てきてから廃止になったとの事。事実、この周辺は20時を超えると外出禁止令が発令されて動きが取れないようでした。そこで、タクシー運転手を捕まえて値段交渉をしながらここで初の暖かい食事ラーメンを取る。

ポカラまで1500ルピー、3時間の旅となる。ベニからは更に数十キロの未舗装路が続くので、余裕があれば自転車に乗って下る事も可能であった。

ポカラ9時着。お祭りの最中でとても賑やかであった。死ぬほどすきつ腹に食べ物詰め込んで、翌朝7時のバスに乗り込むまでひたすら眠り込んだ。

そして、半年後・・・・・・・・・・

韓国人の友人が私の話に触発されてジョムソンへ行って来たとの報告があった。

彼曰く、ジョムソンの醍醐味は空港より上のムクティナートにありとの事。ムクティナートはムスタン王国の下辺でチベット文化を色濃く残す地域。地面から噴出する天然ガスの炎を御神体と祭るお寺がある所である。

事実、彼の写真を見ると僻地を絵に画いたような風景。

ああ、もう一度行かなくては・・・・・・・・

さらにもう一件、

ジョムソンの下には世界最大級のアンモナイトの化石が道端に転がっているそうです。

転がっていると言っても小型乗用車のサイズだとか・・・・・・・・



－ 追 悼 －

山 口 雅 也 さ ん を 偲 ぶ

鷲 尾 顕 （昭15旧制文）

2月18日、伊藤文三君より電話がありガーヤン（旧制13回卒、山口雅也さん、2年先輩に当るが、以下甲南時代から親しまれていた呼名を書くことにお許し頂きたい。）の訃報を聞く。2月19日成城の教会でのお別れのミサには伊藤文三君と越田和男君が参列した。

昨年12月早々、年賀欠礼の挨拶状が届きお悔みの葉書を差し上げた処、折返し丁重な手紙を頂き「独り暮しで淋しい生活をしておりますが隣にいる息子の一家が何かと面倒をみてくれてまづまづです。今年になり急に足腰が弱り、今や杖をついてヨボヨボ歩く有様云々」とありご容態を案じていた。其の後、偶々行きつけの床屋で武田六郎さん（旧制13回卒、同じ甲南小学校出身）に会い「無精になりガーヤンにはすっかりご無沙汰しているので、君から宜敷しく伝えてくれ」との伝言あり連絡せねばと思いつつの矢先、悲しみの極みに眩れる。

東京在住のため、お会いする機会も殆んどなく、年賀状による文通、時折、甲南山岳会のこと等電話をすることもあった。一昨年3月26日、高輪プリンスホテルで福田泰次君を偲ぶ会の際、久し振りにお目にかかったのが最後となった。その折「足腰が弱って来た。」と言われていたが、四方山話したことが蘇っ

てくる。

ガーヤンは1937年のチーフリーダー、山口三兄弟、省太郎さん（故旧制10回卒）良夫さん（故旧制11回卒）の末弟。

甲南時代、山岳部を通じ、折につけ数々のご指導を受け、お世話になったことを想起し心から感謝を捧げたい。今から考えると、随分迷惑をかけたことを思うと慙愧に耐えない。甲南山岳部気風の典型とも云うべきか、大らかな常に余裕ある人柄を追慕し哀惜の念一入なり。

毎週末のロックガーデン等、休暇毎の夏山、冬山、春山にパーティを組み、山登りを楽しんだが、薄れゆく記憶を辿り、今も尚強く印象に残る山行について書き留め、追悼のよすがとしたい。

1935年夏、劔二股合宿の際のビワークは忘れることが出来ない。八ツ峰への日帰りツアーだった。長次郎雪溪に沿って登り、尾根に取付き激しいブッシュ漕ぎをして上部に辿りつくとは八ツ峰ではなくマイナーピークだったため引き返す中に、夕闇となりツエルトなしのビワークをする破目となる。満天星空の下、這松に潜って一夜を明かした。疲れ果てとも

すれば落伍しそうになるのを、ガーヤンから励まされたことを思い出す。初めての本格的夏山での貴重な体験だった。

1936年2月入学試験休暇を利用して御岳登頂も強く記憶に残るツアー。ガーヤンをリーダーとして総勢6名、湯川孝夫さん(故旧制6回卒)を始め年長者ばかりのパーティ。山麓の道に沿って朱と金に彩られた霊神像が異様な形で林立し、遠くに読経の声が聞え、お山の雰囲気が出ていた。夏には講の人々で賑う御岳も厳冬期には登山者は全く見られない。中小屋に泊り翌早朝、頂上を目指し出発したが案内人は「今日は風が強いから御岳には登れない」との助言あるも、上空に雲一つない好天気には引き返す手はないと行ける処迄行くことになる。3,063米の高山であり、一本立であるだけに強い風が吹き、途中スキーのシールが外れ遅れ気味となり、気が焦ったが、8合目からスキーをデポしアイゼンに履きかえ、9合目あたりからコルに出ると、激しい風に前進するのも覚束なく、消耗し切って風に吹き飛ばされそうになる。ガイドに肩を組んで貰って漸く頂上に達した。厳しい風の中、頂上からの眺めは素晴らしいものであった。

1928年香月慶太さん等による白峰三山以来、甲南山岳部として顧みられなかった南アルプス縦走が1936年夏、ガーヤンをリーダーとして緻密な計画に基き行われた。参加者6名。北沢長衛小屋から仙丈岳、北岳、間岳、北俣岳、塩見岳、三伏小屋を経て鹿塩温泉に

至る延べ11日間。当時、槍、穂高縦走は夏のシーズンに入ると盛況を呈していたが、この南アルプス縦走では他のパーティに出会ったのは北岳だけだったと記憶する。宿泊可能な山小屋は少く、縦走中殆んど毎日テントを張り一夜を明かした。それだけに荷物も多く、歩荷を兼ねたガイド2名を帯同する贅沢な縦走だった。酷暑の中、時折夕立のような通り雨に降られ、炊飯の際、薪の火付けに苦労したことを思い出す。

チーフリーダーとして白亜城事件後の山岳部再建のため、部内雑誌、1937年Ⅷ-1に「部指導精神確立のために」と題し10頁に亘り山岳部の在るべき姿を諄々と述べられているので、追悼を込めて紹介したい。

エクスペディション、アルピニズムを徹底的に批判し「登山者であるよりは寧ろ高校生が学問を放棄し、教養を無視して登山しようとする態度はとるべきでない。職業登山家となるため生死を賭するのは、果して山に対する心からの愛着だつたらうか。」と疑問を投げかけ「山岳部の生活は高校生として最も豊醇なものでなければならない。スポーツアルピニズムの旗の下、部員は登山者としての技術より一步高い人間としての教養が要求されている。山岳部の友は人生の伴侶であり、友情が大きな役割を果す。」と結んでいる。

昨今、海外登山も普及し昭和一桁時代の大仰なエクスペディションという言葉も使われ

なくなった。ガーヤンのスポーツアルピニズムは、スポーツとしての登山の純粋な貴さと共に、登山を通じて相互に信じ合う友を持つことが出来、その結果人生は豊かなものとなり、又登山により美しいものを尊ぶ心が自然に身につくと説いている。

真善美を探究する高校生として進むべき道を示した真摯な論説に在りし日を偲び深い感慨が甦る。

過ぎ去りし日々に渺茫たる思い。追憶は果しなく尽きない。

静穏な眠りを心から祈りたい。

('06. 5. 30 記)

追 記

物故者慰霊祭について

1992 年、会員の協力により物故者レリーフが完成し、その 5 月にご遺族を招き、ロックガーデン、ブラックで慰霊祭が行われ、以降引続き今日に至る。

世話役諸兄の献身的尽力によるものと心から敬意を表したい。卒直に言って、当初、その運営に一抹の不安を抱いていたが、既に今年で 14 回を数え、その不安は杞憂となり KAC の年中行事として定着したことは喜ばしい限り。

重ねてその労を多とし、願わくば、慰霊祭が今後とも末永く途絶えることなく続くことを切望する。

4 月の総会の際、言い忘れたので一筆する次第。



乾隆也（卯兵衛）君を偲んで

水野正人（友人 昭37 新高・昭41 経）

「えっ?何やて?」 乾隆也（卯兵衛）君の突然の訃報に呆然としました。若い頃から持っていた腰痛の治療に意欲的に取り組んでいて聞いていただけに腰が抜けるほど驚きました。

本日は乾君のご葬儀に何が何でも駆けつけなければならぬところですが、東京でオリンピック関係の拠所ない所があり、お悔やみの言葉を西君に託します。

甲南中学の一年生から一緒やったね。人なつこく、いつも人に優しく、周りが明るくなる人柄に50年間、何年経っても変わらない親しい友人を失って言葉ありません。

山登りが好きな君とは中学一年から妙高高原に学校のスキーも一緒に行き、皆で元気に滑りまわっていたね。いつもモタモタした友達の手助けを率先してやっていた君を「ほんとに乾は優しい奴や」と皆で高く評価していました。

私が冬休みにアメリカから帰って来ているときに宝塚の家でクリスマス・パーティをしたよね。君にはたくさんの友達がいたから、甲南の仲間が集まってワイワイ騒いで本当に忘れ得ない楽しいひと時でした。

結婚した翌年のお正月にワイフと二人で宝塚のお宅に挨拶に行ったとき、君のお母さん

に「お正月にはお屠蘇を頂くものですよ」と無理やり飲まされ真っ赤になったよ。車で宝塚の駅前に出たら警官が立っていたのでつい焦って顔を隠して、行き先も確かめずに、どこでもいいからと走っていたら有馬に行ってしまった愉快的思い出もあったよね。いつも君に「乾のお母さんにはえらい目に合わされた」と言って笑いあっていました。

スバル 360 のホロを巻き上げて走り回っていた君でしたが、いつからかフランス車の波板で作ったようなシトロエンのドゥシュボーに乗っていました。私もこの車にあこがれてワイフが気に入ったら買おうと思って、君に借りてワイフを乗せて走ったら「こんな車を買ったったら離婚する」と言われてションボリ諦めたことを報告したら「やっぱり、アカンかった?」とニヤニヤ笑っていたことも今になっては懐かしい思い出やね。

人生には多くの楽しみやつらい事もありますね。君も私も人生について話し合う事があるけれど、君が本当に自分の心に素直だったことに感心しました。楽しい時には本当に楽しそう、つらい時には正直につらいと言い、でもそれを克服しようと手を尽くしていましたね。君も慢性の腰痛、私もヘルニアで手術をしたのでお互いに同病を哀れみあって情報

交換をしていました。諦めることなく甲南の仲間に相談してベストを尽していたのでこの訃報に驚きました。

5月28日は甲南高等学校の同窓会で私はご指名を頂いて「甲南スポーツの飛躍にむけて」という話をしました。その席に次のスケジュールが詰まっているにも拘らず君も来てくれていた事を後で知りました。君はぎりぎりまで私の話を聞いてくれて時間になって、そっと抜けて行くと西君から話を聞いて君の優しさに少し涙が出ました。その時に少しでも話をしていたらと悔やまれてなりません。

それにしても早すぎるよ。でも今は腰痛から開放されて天国で車に乗って走り回っていると思います。何年か後、甲南の仲間や私も

そちらに行ったときにはシトロエンで迎えに来てくれや。

永い間の友達やから、言葉がぞんざいになってしまってすみません。甲南の仲間と共に謹んでご冥福をお祈りいたします。どうぞ安らかに休みください。 合掌

2005年6月11日

告別式にご友人 水野正人様から寄せられた弔辞を掲載いたしました。
同氏は物故会員 水野健次郎氏
(昭8旧制理)のご子息です。

編集

ホームページに寄せられたメッセージ

乾兄弟の早世を悼む

越 田 和 男

乾兄弟といえば私が大学山岳部の頃、可愛い高校山岳部員でロックガーデンなどで顔を合わせた記憶があります。兄さんの卯太彦君が亡くなった後、弟の卯兵衛君が山岳会の集まりによく出て来てくれていました。

昨年の6月、新制熟年OBの奥飛驒の集まりに出て来て、中尾集落の外れの、笠が岳の稜線を仰ぎ見る景勝の地に山荘を建てる計画などを

熱っぽく語り、現地まで案内してくれました。

私事ですが乾家は家内の遠縁にあたり、父上ご存命の頃一度ご挨拶の機会がありました。ご冥福を祈ります。

ご冥福をお祈りします

柏 敏 明

乾君のお通夜に行って来ました。山岳総会で会った時、別荘が出来たら是非来てくれよと言っていたのに、余りにも突然の事でした。病氣

療養のため行っていた北海道の温泉先で倒れたそうです。

彼とは、一緒に山には行った事はなかったのですが、家族で彼の家へオールドローズを見せて貰いに行ったり、山以外の所で色々とありました。突然、電話してきて、引き合わせたい人がいるので、30歳前後の男性を知らないかとか、少し、突飛な所もありましたが、気のいい、夢を追っている人でした。

通夜の後、南里君、大森君、川野君、それにドイツ留学中に乾兄弟と親しかった高校時代からの友人、多田さん達と西宮北口の居酒屋で、彼を偲んで献杯をしました。ご冥福をお祈りします。

ご冥福を祈ります

廣瀬 健三

驚いています。

乾両兄弟との本格的な登山の記憶は殆ど有りませんが、御両人とは、小生独立後、仕事上でかなり接点がありました。そんな訳で、御互い事務所を行き来した次第です。1996年当時、当方の最重要の香港の取引先が来阪した時、ご夫妻と共に昼食を共にした時の写真が手元に有ります。

御揃いでの良い写りです。

合掌

ご冥福をお祈りいたします

西濱 昌典

ネパールから西濱です。

乾先輩の悲報、今このサイトで知りました。私が甲南大学卒業後、山行を兼ねネパールを放浪していた時に声を掛けて頂き世話して頂いたのも乾先輩でした。

そして、放浪癖の私を見かねて先輩の会社へ招き入れても頂きました。

お世話になりっぱなしなのに、お葬式にも出ることの出来なかった事。

悔いるばかりです。残念です。

心からご冥福をお祈りいたします。

2005年(平成17年)6月7日、61歳の若さで乾卯兵衛会員が急逝されました。

1979年当時の留学生山岳部員ラルフ・プチャルスキー君を、その後も山岳部員池内友宏君をご自宅に寄宿させ、恵美子夫人とご一緒に親身になってお世話をしてくださいました。

また、「乾さんがいつもエッセンで頑張っておられ、一緒に食料の買出しに行ったことを思い出します」(川村静治会員)、乾さんのエッセンに、「山でいつもこんなうまいものが食べられるのなら、と入部を決めました」(南里章二会員談)など、高校時代の乾さんのエッセンには定評がありました。

一時期趣味にしておられたオフロードバイクを多数保有するに及び、搬送用のトレーラーを特注、牽引用の四輪駆動車もエンジンを高出力に換装されるなどの凝り性は、その後もバラ園作りに発揮しておられました。

どうぞお安らかにとご冥福をお祈りします。

編集

乾先輩を思う

西濱昌典（平4理）

「私の20代は乾先輩を抜きには語ることは出来ない！」と言っても良いほど、私は乾先輩と密に関わりを持たせて頂きながら過ごしてきました。私の今の充足したネパールでの生活も20代の過ごし方が礎となり、その20代の過ごし方に影響を与えてくださったのは紛れもなく乾先輩でした。

ただ、先輩の思惑にはあらぬ所に現在の私は位置し、先輩の思わぬ方向に私は進んでいます。それでも、ココまでこれたのは乾先輩の影響があったからこそであり、心より感謝をし、心より哀悼の意を表します。

乾先輩、有難うございました。

私が乾先輩と出会ったのは確か卒業後のケニヤ・ネパール遠征時でした。勿論、それ以前にお会っていますが、深くお付き合いさせて頂くようになったのはこの時からです。

乾先輩は遠征終了後も頻繁にお会いして下さり、この遠征で得た私の思い「遠征を楽しむにはコミュニケーション力を高めなければならない、その為には英語を習得しなければ」「その為には英語圏で1年間生活をしてから次回の遠征に挑みたい」との考えに同調してくださり、この思いを成す為に軍資金を提供して下さいました。

この軍資金で私はその年から1年間カナダでの建築ボランティア活動に従事することが出来、その足で第2回目のネパール・ヒマラヤ遠征へと向かう事が出来ました。

残念ながら、その遠征の結果は惨憺たるもの

でした。帰国後その結果報告を乾先輩にするべく先輩宅へ出向くのですが、その時に「私の根無し草的行動」を憂い、先輩の会社への就職を促され、3回目のヒマラヤ遠征後就職する事になりました。

ですが、この3回目の遠征でも私の根無し草志向が炸裂し、ネパールにて現地の娘を見初めテイクアウトする始末。根無し草を止めさせる為に厚遇で就職先まで斡旋して頂いたのに、現地娘を連れて帰りそのまま結婚まで至ると言う後先考えない私の行動を戒める意味もあったのでしょうか、6ヶ月で解雇となりました。

その後、就職の面では多くの方々からの支援を頂き転職を重ねてきました。そして今日に至るまで私の事を気遣いネパールにまで電話を幾度と無く下さいました。

とまあ、ざっと軽く乾先輩との関わりを記してみたのですが、コレだけでは私の人生に大きく影響したとは大袈裟に感ずることでしょう。実は紙面には書けない・・・否、書けるかも知れませんが・・・書かない逸話がヒマラヤ山系の如く山積しています。本当はこの書かない部分が乾先輩と私の関わりを語る上で重要なのですが、この書かない部分が乾先輩の個性的なところであり、私の人生において強烈なアクセントを醸し出しています。

乾先輩の前に突然「海外遠征」と言う形で現れた私と言う不安定な存在が先輩を刺激してしまい、その時の目に余る生活様式に先輩は居ても立っても居られなくなったのでしょうか。先輩

はネパールの根無し草の私を憂い日本的な安定した生活を先達として指導されました。

ただ、その指導方法が前述の「書けない逸話」（前述なのに「書けない」とはなんとも変な話ですが・・・）となり多く残っているのですが、今改めてその逸話を思い返すと実は乾先輩も私と同類だったのではないかと思います。

結局、私の今に至る経緯を振り返ると乾先輩の存在が強烈に光り、先輩の思い出が（先輩が一番忌み嫌うであろう）スパイスのたっぷり効いた私の愛するネパールのカレーのように鮮烈な刺激となって残っています。

私はよく友人知人から「日本的規格外」と揶揄されるのですが、私の思い出の中での乾先輩は通例からかけ離れた「規格外」であり、きっと、先輩の中で私の存在もまた通例からかけ離

れた「規格外」であったのでしょう。

そう思うと、乾先輩も私を日本的に戻させようと努力して居ながら実は内心、規格外のまま突き進む事を望んでいたのかもしれない。

そう考えると、私は今の「規格外」のまま突き進んで充足した人生を送る事が乾先輩への恩返しになるのではと思いを新たにします。

乾先輩、有難うございました。

先輩の恩に報いる為にも悔いの無い生活を送っていきます。



－ 読 書 案 内 －

田口二郎 著「山の生涯」

川 見 博 美

(日本山岳会・京都支部「支部だより」No. 60 (2000. 9. 15) より転載)

田口二郎著 『山の生涯 － 来し方行く末 (上/下)』 茗溪堂

1999 年 9 月・12 月刊 各 8,500 円

待望の書である。戦前戦中、アルプスでの登攀で名を馳せ、その岩と雪の技術を請われて戦後のマナスル遠征に参加。ボニントン著『現代の冒険』の山岳部門を翻訳、洛陽の紙価を高からしめた不朽の名著『東西登山史考』を遺して、98 年死去した著者の文字通り「山の生涯」の浩瀚な書である。副題の「来し方 行く末」の古語は JAC 本流を歩んだエリート時代の終焉を物語るものとして実に感慨深い。

著者に関してはひとつ気にかかることがあった。楨有恒の衣鉢を継いだアルプス登攀の記録はグロースシュレックホルン北東壁初登攀、メンヒ北壁ラウパー・ルートの第 3 登など卓越したものであり、1938 年（昭和 13 年）に初登されただけのアイガー北壁第 2 登さえも目論んでいたが、1939 年に第二次世界大戦が始まり、時局は戦中のさなかである。45 年 8 月、日本降伏。満州、樺太ではソ連軍進攻による阿鼻叫喚の悲劇が発生しているまさにその折、高木正孝とヴェッターホルン北壁を登り（1965 年刊『挑戦者』の記録とはルートが異なるようだ）、前述のアイガー北壁を計画しているのだが、そのときの著者の心情、心理を知りたいというのが日教組教育を受けた筆者の思いであった。

「1 銭 5 厘でお前たちの代わりはいくらでもある」と馬以下に扱われ、兵役免除の障害者は肩身の狭い思いをするという、猖獗を極めたファシズムが跳梁跋扈した時代に、如何なる経緯でスイスに滞在していたのか、あるいは帰国のすべはなかったのか。山崎安治著『日本登山史』、安川茂雄著『近代日本登山史』の 2 冊とも、アルプス登山の記録的記述だけでその背景には触れられていないのである。パートナーの高木正孝が著す『パタゴニア探検記』（岩波新書）も、比較心理学の目で描かれた人間ドラマが興味深い、パタゴニアの記録だけで自身の過去を語ることはない。

それを本書で、著者のアルプス時代の胸中を吐露した原稿を見つけたのである。それは著者のほとぼしる絶叫が電光の如く筆者の心魂に徹して、目眩がする思いの文章であった。上巻の最後、「IV 山の本」にある『スイス山案内人の手帳より』（ベースボール・マガジン社／1987 年刊）の図書紹介（この本の所蔵もこれで筆者にとって価値あるものとなった）の原稿のあと、田口二郎が著者の岡澤祐吉に宛てた手紙にその心情が書かれているのである。

「洋行登山家と呼ばれた、日本が世界から隔絶していた時代の、登山の一系譜を映したもので、日本の山登りの歴史の重要な一断面を切り取った労作として位置づけられる仕事でしょう。自分が遠い過去から戻ってきた人間だ、というある種の哀切感なしで、よめませんでした。一読後思わず目をつむり、しばらくの間、深い断層をはさんでぷつぷり切れている昔のある時代に身をおいて、ぼう然としてしまいました」

「戦中、外人はいないので、アルプスは少数のスイス人だけだった。世界中が血にまみれている。ボクの同胞もだ。それにボク一人が、まるで 19 世紀中葉のアルプスの静寂の中で、攀じている。そのときの心の底の罪の意識というか、激しい山の喜びに浸ったそういうものが、今でも、ボクの胸の深い処にある。貴君の本は、遠い過去の喜びと悲しみを、木魂のように老いたボクの心にひびかせた。こんなことを、かつて誰にも話したことはないし、書いたこともない。そういう意味で、貴君の本は、遠い過去がボクに送り届けた使者だった」

やはり、そうだったのか、という思いである。日本は人口の 1 割近い 600 万人もの同胞を海外に置き去りにして戦争を始めた。イギリスに留学中の著者は帰国できなくなり、余儀なくスイスに滞在、朝日新聞記者としての生活を送ることになる。故国に見捨てられたという鬱積と戦争に苦しむ同胞への後ろめたい思いに、アルプスに登れる喜びが綯い交ぜになって複雑な心境にあることは想像に難くない。著者はアルプス時代から 40 年後に重い口を開いたのだが、それは筆者にとって十分な理解と納得のできるものであった。

未完の遺稿となった「アイガー北壁五十年」ではナチス・ドイツのクライマーに対するスイス人のドイツ嫌いが描かれている。これを読むとハラー著の『白いクモ』に描かれるドイツ人クライマーの遭難の救助活動が、地元のガイドにとって物理的な負担以上に、不吉な闖入者に対する怨恨の対象であったことが分かる。本稿ではハラーについては好意的に触れられているが、原稿は 1990 年に書かれたもの。そのハラーが書いた世界的ベストセラー『チベットの七年』（白水社）が原作から 45 年後の 1997 年に『セブン・イヤーズ・イン・チベット』というタイトルで映画化されたのを機に、当のハラーがナチ親衛隊隊員であったことが暴露された。この辺りの内情はヘディン及び中央アジア史研究の大家、金子民雄が書く『文明の中の辺境』（北宋社／1998 年刊）に詳しいので一読を薦める。

「Ⅰ 青春の山」は旧制甲南高校時代に書いた山行報告文などで、文中にドイツ語、英語が原語のまま書かれているのが、ペダンチックな旧制高校生の片鱗が伺えて微笑ましい。

「Ⅱ スイスの山」と「Ⅴ マナスル」の稿を読むと、パリエーションルートを競り合った現代とは異なる、海外登山初期のアルプス・ヒマラヤ登山の映像が紙背に伺われ、旧きよき時代に身を委ねて陶醉する我が身に気づく。

『山岳』『山』のほかに『甲南高校山岳部報告』などの一般に目の通らない原稿や、未発表の原稿など、60 余年に及ぶ書き物をまとめて刊行された本書は、大きな現代的意義をもつ。決して読み流せる本ではない。行間に学殖の香りが立ちのぼり、珠玉のような知見の

連なりは読書の興奮を我々に与えてくれる。

これだけの内容の書籍が、茗溪堂の坂本社長に何うと発行部数はたったの 300 部で、茗溪堂の店頭では平積みが多数。月報で広告が掲載されているように売れ残りがまだ数多くあるようだ。部数が少ないから価格が上がったとはいえ、JAC 会員の 5% 足らずしか読めないことにいささかの危機感を覚えずにはいられない。かつて本を読むことと山を登ることは同義語であった。筆者の JAC 入会は 1981 年だが、学術的論稿とヒマラヤの記録が併録された気品ある編集の『山岳』が読みたくて第 60 年版から購読している。今、この年報をどれほどの会員が確実に読んでいるのだろうか考えるのは筆者の驕りだろうか。百名山とガイドブックばかりが売れて、そのほかの山の情報が切り捨てられるようでは登山文化は廃れ、JAC も底の浅いただの遊びの集団としての認知しか世に受け入れられなくなる。田口二郎が亡くなった今、善きにつけ悪しきにつけ、貴族趣味的体質を伝統とする日本山岳会の組織が変わりつつある時代なのかもしれない。

田口二郎著「山の生涯」についての各誌の書評・紹介記事は下記の通りです。

- ① 日本山岳会・月報「山」1999年11月号 渡辺兵力
- ② 「読書人」1999年11/12月号 近藤信行
- ③ 「山と本」30号(1999年) 遠藤甲太
- ④ 「山と溪谷」1999年12月号 池田常道
- ⑤ 「岳人」1999年12月号
- ⑥ 「岳人」2000年3月号 福島功夫
- ⑦ 日本山岳会・年報「山岳」第95年(2000年) 村木潤次郎
- ⑧ 日本山岳会京都支部「支部便り」No.60(2000年9月) 川見博美

①～⑥は「山嶽寮」55号(2000年)にコピーが出ています。⑧は発行部数も少なく、あまり目に付かずこれまで見落としていました。渡辺兵力氏を始め上記の評者の方々が生前の田口さんと交遊関係にあったのに対して、川見博美氏は多分田口さんとは面識はなかったと思われ、仲間内では一寸書きづらいところも一読者としてさりと述べておられます。

ぜひ甲南の仲間にも読んでもらいたいと思い、川見氏に直接お願いして転載の承諾をいただいたものです。

(越田和男)

－ 会 員 短 信 －

名誉会員・顧問

山本 三郎（名誉会員）

傘寿を越して急に足が怠けるようになって、エスカレーター・エレベーターを探すことが多くなりました。テレビでアルプスの山々を見ると、若いとき皆さんに助けて貰って歩いたことを思い出しています。「継続は力也」と聞きますが、皆さまは続けるよう努めて下さい。盛会をお祈りします。

昨年11月5日～13日(9日間)パリから世界遺産モロッコを訪ねるツアーに参加。アラビアンナイトの世界を感じさせるイスラムの世界を眺めてきました。モロッコ最大のモスク、フェイズの巨大迷路 珍しいことばかりでした。凱旋門の螺旋階段を登り、屋上からパリ市街の展望も良い思いでとなりました。旅を続けられるようにと健康に気をつけるこの頃です。幹事いつもご苦労さんです。皆さまの顔を見るために参加させて貰います。

平井 一正（名誉会員）

いつもご連絡いただきありがとうございます。最近では低い山を歩いて、体力を保持していますが、一日一日 年をとることが脅威になっています。皆様にどうかよろしく。

まことに残念ですが、当日先約があり（甲南大にはいますが）出席できません。皆様にお会いしたかったのですが、また次回にします。私は家内が不調のため、現在どこにも行けません。鳴かず飛ばずです。

神戸 謙司（中高山岳部顧問）

いつもお世話になっております。この夏の中高の山岳部の合宿は、剣岳・仙人池までの遠足でした。大学の神澤君がサポートしてく

れ、非常に助かりました。木曽駒の集会、勤務等で残念ながら出席できませんが、盛会であることを祈念いたします。総会や慰霊山行ではいつもお世話になりまして、ありがとうございます。

高校3年生であった長宅・村上・池上が卒業し、甲南大学に進学しました。新高1年生の田中 僚君一人となってしまうしましたが、この春よりまた、一步一步やっていきたいと思います。山岳会の皆様には、いつも心に掛けていただきありがとうございます。よろしく願いいたします。

鈴木 敬吾（特別会員）

楽しみにしていたのですが、JACの100周年の準備で参加できません。

スケジュール調整をしていて遅くなりました。翌週、父の一周忌がありますので残念ながら出席できません。

2005（平成 17）年秋「木曽福島集会出欠」と 2006（平成 18）年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

旧制高校

関 集三（昭10旧制理）

体調不十分の為、残念ながら欠席いたします。山岳部入部以来77年となり、在学時代の憶出は山であふれております。同窓生は佐野さんだけです。阪大(理)に43年お世話になり日本学士院会員生活21年目、この6月90才のお祝いに「祝九十初度之会」を全員からお祝いいただきました。いつも御連絡ありがとうございます。

昨年5月満90歳を向かえ、6月に日本学士院会員生活21年目で、学士院会員全員の署名入りの「祝九十初度之辰」の賀帖と記念品を戴き「老人組」になりました。夏には阪大NOWの名誉教授リレー随想-東風西風に『理学部入学の頃と長岡總長の額「勿嘗糟粕」と題して、昭和10年頃の思い出を記しました。何かと健康維持に努力しています。

佐野 源一（昭10旧制文）

6月7日満90歳になりました。膀胱がんの方は今の所小康を保っていますが、相不変腰痛で週3回リハビリに通っています。老化現象で直らないそうですが、リハビリ治療を受けると少しはよくなりますので、無駄かも知れませんが通っています。膀胱の方は一寸無理すると再発しますし、腰痛もあって残念ながら欠席します。

前々からの腰痛で、週3～4日リハビリに通っています。膀胱がん再発のおそれもあり、大阪・神戸へも行くのを自重しています。特に夜分は無理なので残念ながら欠席します。山口 雅やんが亡くなったそうで、特に3年も4年も年下の方が亡くなると寂しくなります。ご冥福を祈ります。山もスキーも遠い存在になって情けないです。

山岡 静三郎（昭11旧制理）

今春4月、同名(よみうりランド慶友病院)の病院がより都心に近い当地に開院しましたので転院いたしました。この度のご案内もこちらに戴いています。ご出席の皆様方によろしく。

ご案内有難う御座います。有名な「田口一郎・二郎・三郎・七郎」の4兄弟の三郎君は私と同期でしたが山岳部とは無縁でした。数学の専門家で東大(理学部)数学科を出て中央政府機関と大学で活躍しましたが昨年末亡くなりました。ご出席の皆様によろしく。

奥山 正雄（昭12旧制文）

元気です。同期の國府氏も元気で独り者の私にご夫妻で、つき合っていており感謝しております。岳友小川氏から続 平生鈆三郎伝を頂き拝読しました。平生さんの進歩的な政治活動を浮き彫りにした傑作です。

元気です。山口 雅也君は私の1年下ですが一番良くパーティーを組んだ山仲間でしたが、亡くなった報に驚き深い悲しみを覚えました。ご冥福を祈ります。

武田 六郎（昭13旧制理）

腰痛の為欠席します。

山口 雅也（昭13旧制理）

老衰のため、不整脈も起こり遠出は無理ですので残念ながら欠席いたします。皆様によろしく。

山口雅也氏は平成18年2月逝去されました。

ご冥福をお祈りし謹んでお知らせ申し上げます。

赤松 二郎（昭14旧制理）

私も87才となり来信には訃を報ずるものがふえてきました。次第に私が取り残される感あり淋しい限りなれど時の流れに任せるのみ。歩くのに杖が手放せぬようになりましたが、未だ元気と云うておきます。

鷲尾 顕 (昭 15 旧制文)

幹事役のご尽力を感謝します。加齢により体力衰え参加できず残念です。出席の諸兄によりしくお伝え下さい。

ご案内有難く拝見。体調不安定のため慰霊祭参加できず残念の至りです。

伊藤 文三 (昭 15 旧制文)

なんとか生きているという感じ。

もっぱら Arm chair Mountaineering です。毎年 10 月 10 日ころ墓参りと称して (Kobe Jazz Street) 神戸に行きますので欠席させていただきます。出席の諸兄によりしくお伝え下さい。

旧制もだんだん寂しくなってきました。ガーヤン (山口 雅也-旧制文 13) のための慰霊祭参加したいのですが、その元気ありません。(成城のカトリック教会でのお葬式には、越田君と参列しました。)

小川 守正 (昭 17 旧制理)

山口 ガーヤン先輩、若い乾君の死去悲しい限りです。小生元気ですと言いたいところ、不整脈と腰痛でロックガーデンは欠席不甲斐ない限りです。甲南病院の経営大幅改善したとたんに小泉政府の医療費大幅切り下げで元の木阿弥、腹立たしい限りです。

福井 實 (昭 17 旧制理)

ホーム・ページ掲示板にも「関東の桜花見の会」の参否欄に書いておきました様な調子です。4 月 22 日 (土) 総会後の「セミナーハウスの宿泊」の御手配お願いします。慰霊祭は膝の調子を見て行きたいと思いますが (未定)

津田 昌男 (昭 18 旧制理)

ご案内ありがとうございます。主人は、只今腹部腫瘍手術をして、入院中でございます。手術の経過は良いようですが、パーキンソン病も患っておりますので外出は無理と存じます。今後残された人生を有意義に過ごしたいと存じます。

茂木 光隆 (昭 18 旧制理)

秋の集会にお集まりの諸兄のご健勝を祈ります。私は体調不良のため、山は遠くから眺めるだけの生活になってしまいました。またいつの日か山に御一緒できる日を心待ちにしています。(代筆)

國府 三郎 (昭 18 旧制理)

甲南同期の 津山 直一 君 (東大医学部名誉教授 若い一時期甲南山岳部員でもあった) が他界しました。次々尊敬申し上げる諸兄とのお別れは、さびしい限りです。ご冥福をお祈り申し上げます。

横浜から吹田に移ります。お世話になります。

岡橋 節三 (昭 19 旧制文)

なかなか長旅は出来なくなりました。皆様に呉々もよろしくお伝え下さい。

小泉 省三 (昭 19 旧制理)

西宮市丸橋町より下記に転居致しました。

徳末 省三 (昭 21 旧制理)

色々御世話様になっております。5 年以上入院生活を送っておりますが、今の所比較的安定した状態で、他事乍ら御休心下さいませ。(妻 悦子)

丸山 照夫 (昭 25 旧制文)

体調不良でとても行けません。あしからず。

いつも欠席で申し訳ございません。静かに老を養う日常です。

伊藤 五介 (昭 26 旧制文修)

年並みに元気です。皆様によりしく。ガーヤンさんのですから行きたかったのですが…

新 制 高 校

中井 久夫 (昭 27 新高)

甲南大学の勤めは昨春無事に終え、人間科学研究の客員研究員という肩書きが残りました。「甲南 today」裏表紙の小文はしばらく残りますが・・・神戸製鋼の跡地に県こころのケアセンターが昨春発足し、非常勤のセンター長という一寸微妙なポジションを与えられました。

中尾 佐助 著作集を愛読しています。私は「秘境ブータン」以来の先生のファンですが、ついにその地に足を踏み入れずに終わるでしょう。ネパールの美女を夫人にしてカトマンズに居を構えている後輩の話には感嘆絶句しました。

米山 悦朗 (昭 29 新高)

アフガンに行き帰る時期不明、多分ぎりぎり間に合うかも、その時は別途連絡します。

アフガンに行っている予定です。

北方 龍一 (昭 30 新高)

昨年 1 1 月柳澤 正先輩・鳥居 威男君と 3 名でミャンマーのチェ州にあるマウント・ヴィクトリア (3,056m) にトレッキングしました。多分今年 1 1 月もボンカンラジーに行きたいと思っています。

平井 吉夫 (昭 32 新高)

JAC の 100 周年記念図書展の用事で参加できません。皆様によろしく。あれこれと忙しく、今年は海外山行もあきらめました。本当はタトラ山系(ポーランド・スロバキア国境)に行くつもりでした。

山岡 静三郎 先輩から、昭和 4 年 5 月に本館玄関前で撮った当時の山岳部員の集合写真をあずかっています。この時退任した伏見先生のお別れ記念と思われ、高等科 3 年の香月さん、田口 一郎さん、近藤 実さん、伊藤 収二さん(尋常科 1 年)などが、少年そのものの顔で出ています。どのよう

に扱えばよいのか、ご相談したいと思っています。

竹原 祐爾 (昭 33 新高)

皆様によろしくお伝え下さい。

山城 國輝 (昭 36 新高)

当日学会出席のため欠席させていただきます。

皆様によろしくお伝え下さい。

永島 孝男 (昭 37 新高)

東京で商用の為欠席させていただきます。

川村 静治 (昭 40 新高)

5 月の連休にグランドキャニオン・モニュメントバレー・ブライスカニオン・ザイオンと車で回りました。夏休みは佐渡島を車で一周、信州の蓼科山を 7 合目まで車で行って後、頂上まで登りました。

乾さんがいつもエッセンで頑張っておられ、一緒に食料の買出しに行ったことを思い出します。ご冥福をお祈りします。

福田 裕久 (昭 45 新高)

最近 1 年ほどの間に、犬を 2 匹飼うことになり毎朝・晩のワンコ達との散歩を楽しんでいます。丹波近辺の山歩きも最近はさっぱりといった所です。

別にありませんが、年令を考えてゆったりとした野歩きでも思っております。

八木 利幸 (昭 52 新高)

24 年振りに転勤で神戸に帰って参りました。

松下 弘幸 (昭 54 新高)

カリフォルニアに元気しております。皆様によろしくお伝え下さい。

白川 浩平 (平 2 新高)

今年の夏は、家族で小川山にキャンプに出掛けました。子供連れのキャンプは色々勝手が違うこともあり、失敗もありましたが 5 才長女と 1 才半の長男ともにエンジョイしてい

ました。また、最近 六甲 保塁岩での早朝クライミングにはまっています。パートナーがいないので、ロープをフィックスしてユマールを動かしながらフリーで登っています。朝一の静けさの中での岩登りはさすがにいいものです。皆様によろしくお伝えください。

今年1月に、サーフィン旅行でポルトガル領の島マディク島へ行ってきました。切り立った崖が海に向かって切れ落ちている様な地形のところばかりなので、クライミングシューズをしのばせて行きましたが、どこもボロボロの岩で、岩登りはしませんでした。波の方は大満足でした。

瀬戸 貴正 (平8 新高)

昨年は参加させて頂きましたが、今年は都合がつかそうにないので不参加とさせて頂きます。皆様お元気でお過ごしでしょうか？来年は是非参加したいと思っています。

2005 (平成 17) 年秋「木曽福島集会出欠」と 2006 (平成 18) 年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

大 学

阿部 純一 (昭31 経)

お世話になります。秋の木曽駒楽しみにしています。

いつもお世話になります。六甲山もこの冬は何回か雪が積もりました。寒さにまけず時々山歩きをしています。今回は他の用件と重なって欠席。皆様によろしく。

小原 耕治 (昭31 経)

暑い夏が続いていますが元気に過ごしています。会員諸兄に逢うのを楽しみにしています。それから、毎度御苦勞をおかけしますが宜しく。

元気です。毎日2時間ほど散歩を続けております。阪神タイガースも好調の模様なので開幕をわくわくして待っております。毎度の事乍ら幹事役ご苦勞様です。感謝!!

砂川 彰雄 (昭32 経)

元気です。秋の集会のお世話ご苦勞様です。感謝

総会へは随分のご無沙汰になってしまいました。申し訳なく思っています。昨年12月初めの思わぬ雪で大慌てで撤収以来、早や又春が巡ってきました。4月初めには、田舎暮らしに戻ろうかと考えています。

柳沢 正 (昭32 経)

幹事役を永らく勤めて戴き感謝して居ります。小生、鳴かず飛ばず乍ら、日々元気に過ごして居ります。7月の下旬に旧制の先輩(山岳部に非ず)と八方尾根・白馬大雪溪へ散歩に行きました。皆様との再会を楽しみにして居ります。

幹事役ご苦勞さま、深謝して居ります。小生、幸い元気に過ごして居ります。しかし加齢とともに、物忘れが多くなりこれはボチボチ惚けてきたかなと思う日々です。皆様との再会を楽しみにしております。

鈴木 頼正 (昭33 経)

今回は会社の都合で残念ながら欠席です。9月27日より森本全彦さん等に屋久島(宮之浦岳)と開聞岳につれてもらう予定です。ゴルフはハンディーが Up したおかげでクラブ競技で入賞しました。秋になればハイキングに出掛けようと思っています。誘ってください。皆様のご健勝をお祈りします。

山岳会総会お世話かけます。慰霊祭も参加する予定です。皆様に会えるのを楽しみにしています。

田辺 潤 (昭 34 経)

いつものことながら幹事さんご苦労様です。感謝しております。土日に空きができれば高遠の本宅通いが日常です。草取り・草刈・花作りとウィークデーよりハードな労働ですが楽しんでおります。おかげで鮎釣りにも行けませんでした。皆様に会えるのを楽しみにしております。

幹事にはいつも大変お世話になり有難うございます。お返事が遅れ申し訳ありません。掲示板で催促されるまで、失念しておりました。いつも行こうか、行くまいかで迷うためにお返事が遅くなってしまうのです。お許してください。

伊丹 弘忠 (昭 35 経)

元気にしておりますが、他の旅行とかち合いましたので欠席します。

元気にしておりますが、昨年 6 月藤原岳を下山中膝を痛め苦労しております。

鳥居 威男 (昭 35 経)

元気に過ごしております。スケッチにハイキングに伊丹君と適当に遊んでおります。今回都合により欠席となります。皆様によろしくお伝え下さい。盛会を祈念します。

毎日元気に過ごしております。月に 2～3 回は六甲山系を中心に歩いています。しかし体力の衰えを感じる此の頃です。皆様とお会い出来る事を楽しみにしております。

美田 靖夫 (昭 35 経)

5 月に細野の丸山 忠明から突然遊びに来ないかと電話があり、猿倉の小屋まで空いているか、途中のバリケードまで送るからの事。後から来た 3 人は自転車でやって来て追いついて行き、小屋の下でシールとアイゼンを着けているのに追いつきました。白馬鑓温

泉まで 4 時間で行くとの事。細野は温泉だらけ他あまりの変わりに驚いた。

まだ本調子でなく、白馬へ行ったりビルマに行ったりした人の話を聞くばかり。早く登山をしたものだ。

牧野 宏 (昭 36 経)

1986 年に始まった秋の集會も、早や今年で 20 回を迎えました。いつまでも続けたいものです。

藤安 賢一 (昭 36 経)

最近保久良神社から六甲山への途をも取らず、住吉川の堤を海まで往復して、健康維持に努めています。段々と夏の高温の日数が増え、熱中症(旧くは熱射病と言った)の患者も増えている様子。皆さんもお気をつけて下さい。

去る 1 月 23 日胃癌にて手術をしました。胃が小さくなった分食事が少なくなりました。身体にも力が入りません。皆さんにお目に掛かるのが楽しみです。

越田 和男 (昭 36 理)

当日、丸の内の「丸善」で開催中の日本山岳会創立 100 周年記念山岳図書展の世話役としての仕事があり、残念ながら今秋は欠席です。ご盛会を祈ります。

2 月にタスマニアに行きました。中央高地にオーバーランド・トラックという 5 泊 6 日のトレッキングコースがあり少々ぜいたくな山旅を楽しみました。二人部屋の個室、定員 10 名の山小屋で、ガイドの作るワイン付コースディナー。こういう選択肢もある山歩きが出来て有難いです。

廣瀬 健三 (昭 36 経)

KAC の(インターネット上の)掲示板を見て諸先輩・同僚・後輩の活動を楽しんでいます。これも塩崎将美 兄のご尽力に依るものと感謝しています。

御世話になります。低山ハイキングを楽しんでいます。JACの計画で手頃なものだけに参加しています。テニスの御蔭か足が強くなった気がします。

大関 和夫（昭37 経）

暑い夏です。山荘暮らしも身についてきて山の生活を送っています。妙高高原も大型ホテルは経営が難しくなり、静かなものです。温泉もすいていて、のんびり出来ます。

東京組は、越田さん他今年も車で出かけたいと思っています。スキーは益々盛んになり年をとっても楽しいものです。

飯田 進（昭38 経）

今回残念ながら出席できません。ご盛会をお祈り申し上げます。

岡田 英輝（昭38 経）

元気以外なにも無し。皆様によろしくお伝え下さい。

二谷 和成（昭38 経）

年々、膝や腰が弱っていますが、年 2～3回は信州方面へ、月 2～3日は近くの山に出掛けるようにしています。皆様に会えるのが楽しみです。

いつもお世話になりありがとうございます。毎日少しでも歩くよう心掛け、月 2～3回近郊の低山へ出掛けています。昨秋は、西穂高へ登りましたが、そろそろ体力の限界を感じています。今秋は表銀座へ行く予定です。

福田 信三（昭39 理）

あいにく 13 日よりアリゾナ・ユタ州を巡る旅に出るため準備で参加できません。皆のご活躍等HP（ホームページ）で楽しませていただいております。皆さんの様な本格的な山行は出来ませんが、山を含めて自然志向の旅を楽しんでおります。ではいつか御会いする日まで

先日、ラルー ミーティングで久しぶりに小人数の方と出会えました。年一回では無く季節毎の開催を希望します。もっぱら登山より見て歩きの劣等山岳会員を自負しています。

武田 雄三（昭39 経）

幹事様、ご案内有難う。いつもお世話になります。宜しく願いいたします。

世話役の皆さんに多謝。

森本 全彦（昭39 法）

元気でやっております。浪川君について行くのも今年で終わりかも。体力はめっきり落ちてきたようです。来年又遍路の続きで愛媛県をと・・・今回都合悪く欠席です。幹事の方々、ご苦勞様です。

事務局の方々、御苦勞様です。今年は仕事の関係でスキーも行けず、残念でしたが楽しい写真で満足か。4月末ぐらいから遍路の続き愛媛に。山登り続けておりますので、計画あったら誘って下さい。

伊丹 德行（昭40 法）

「秘密の宿場」の住所は長野県飯田市太平宿内 ①宿場の中に一軒だけ民宿「丸三荘」があります。水洗トイレ・ウォシュレット・便座は暖かいです。夕食は季節の肉（猪・熊・鹿・羊など）や無農薬の野菜がつかます。②近くに公衆電話があり飯田市のタクシーが呼べます。③五平餅の発祥の地です。④近くの川で魚が釣れます。入漁料は 800 円です。⑤毎日旅行が 11 月に宿泊を計画中です。連絡先（丸三荘）0567-24-1158

正月に北海道内をバスで旅行しました。稚内で雪をかぶった利尻富士が見えるか期待して行きましたが吹雪で見られず残念でした。

鵜木 洋（昭40 文）

前週、県北の那岐山の沢登りに行っていました。65 才の誕生日から 3 週連続で山に行っ

て来ました。他に芸は無く高校の後輩と登っています。

元気です。

水渡 清夫 (昭40 営)

この夏、井本・柏・竹中他のメンバーで剣岳・二股(仙人 H・仙人ダム)へ行って来ました。現役の時より剣岳が大きく見え、三の窓の雪渓も急傾斜に見えました。40 年(42 年)ぶりに訪れなつかしい気持ちでいっぱいでした。

安井 正 (昭40 経)

退職して1年。今のところ元気に暮らしています。

藤原 邦彦 (昭40 経)

元気にやっています。

柏 敏明 (昭41 経)

幹事の皆様、何時もお世話を頂き有難うございます。今もって仕事から離れられずにいます。スキーを再開しましたが楽しいですね。雪が積もったら下手は下手なりに楽しもうと思っています。最近ルアーの海釣りを始めましたが難しくまだ一匹も釣れません。山・遡行・スキー・ヨット・釣り etc 機会があれば、是非お声を掛けてください。

お蔭様で、やっと昨年暮れに完全フリーとなりました。これから楽しみにしていたことを次々とやっていきたいと思っています。今年はスキーにはまっており、今年になって18日間滑っています。何でも結構です声を掛けてください。いつも幹事様にはお世話をさせていただいて感謝しております。3月23日

井上 徹 (昭41 営)

25年のブランクをとりもどすべく、ほぼ毎日 Golf の状態です。65 才でのシニアクラブチャンピオンを秘かに目指しています。すべてをこの目標にむけて・・・そんな近況は下

記 URL で www.39izu.com

河津桜も、早 葉桜となり、次は伊豆高原の桜並木の満開を待つ今日この頃です。小生あいかわらずゴルフ漬けの毎日で、スッカリ足腰がきたえられ、この春には伊豆の最高峰 遠笠山に登ってみたいと思っております。伊豆方面へお越しの際はぜひ声をかけてください。

八島 弘明 (昭42 経)

メールアドレス変わりました。

森岡 宏光 (昭43 営理)

いつもお世話になっております。9月1日より又会社勤務に変更しました。(自営業の方は仕事が無い為)

いつもご苦勞様です。皆様によりしくお願い致します。

國分 廣昭 (昭43 経)

元気でやっておりますが、都合で参加できません。残念ですが、来年またよろしくお願い致します。

元気でやっております。よろしく願いいたします。

頼富 信輔 (昭43 法)

御案内ありがとうございます。今回も出席できず残念ですが皆様によりしくお伝え下さい。山とのつきあいは毎月1回のペースで近郊の山を楽しんでいます。四国の山へもおこし下さい。

今年も残念ながら出席できませんが、皆様によりしくお伝え下さい。小生、今年で満61歳になりましたが、先輩諸兄に負けぬよう、ジムに通い、飲みすぎないように努力しながら、月1回のペースで四国の山を楽しんでいます。昨年5月には愛媛の東赤石山登山口で、偶然にもお元気な鶴木先輩にお会いしました。四国登山の計画があれば、是非ご一報下さい。

赤田 友則 (昭 44 理)

当日、行事と重なり出席難しいです。1 月で定年になりましたが続けて勤務しています。

石原 浩二 (昭 44 理)

いつもご苦勞様です。出席したくぎりぎり迄調整しましたが無理でした。数年後は毎日でも出席できる様になります。皆様に宜しくお伝え下さい。

お役の方々、毎回ご苦勞様です。都合の許す限り参加させて頂く予定であります。盛会を心より祈念しつつ…

岸田 昌雄 (昭 44 文)

只今、減量中頑張っています。

南里 章二 (昭 45 理)

お役目御苦勞様です。学校行事 etc で参加出来ませんが、盛会をお祈りしています。

お役目ご苦勞様です。両日とも出席させていただきます。3 月末から 4 月初めにかけて、またベトナムに出かける予定です。

矢吹 操 (昭 45 理)

ご連絡いつも有難うございます。休日で天気・体の状態がよければ武庫川沿いを 10km ジョギングして体力維持に努めています。

3 月 1 2 日柵原星の里マラソン(ハーフ)大会に参加しました。制限時間内(2 時間 3 0 分)にゴールできました。山の方はごぶさたしています。

平井 幹男 (昭 50 文)

前略、案内ありがとうございます。残念ですが仕事多忙につき出席できません。何とかひまを作って、山岳会のお手伝い等出来る様がんばります。

前略、最近もう一度山に登りたくなくて体力作りに頑張っています。8 年続けた空手は高校生に齒が立たなくあきらめました。そこでジムに通って今トレーニングを始め出しました。

朝倉 満 (昭 50 法)

病氣治療中です。

早川 榮二 (昭 50 経)

ご無沙汰しています。8 月初旬、母の追悼山行を兄弟夫婦 5 人で、常念岳より蝶ヶ岳～長堀尾根～上高地の縦走をして来ました。20 年ぶりの槍・穂高連峰を眺めて来ました。5 月頃より山歩きを始めています。月一回程度でも続けようと思っています。

昨年 5 月より月一回程度関東の低山歩きを始めました。今年も続けようと思っています。皆様に宜しくお伝え下さい。

高橋 けい子 (昭 50 文)

ご無沙汰ばかりで申し訳ありません。この春、村田夫妻の呼びかけで、早川君が久々に関西に戻ってきたので同期が集まり花見(?)をしました。懐かしく楽しかった事は言うまでもありませんが、30 年前と体型の変わらぬ彼らに本当にびっくりしました!

西村 清 (昭 51 経)

最近は何の為か、右膝が使いものにならなくなりました。ゴルフをするのもカート(乗用)が必須条件です。ハイキングも今年是一回も行っていない。ましてスキーなど……

大柳 香代子 (昭 51 法)

いつもお世話をありがとうございます。日常の雑事に追われる日々です。

ご連絡いつもありがとうございます。

大森 雅宏 (昭 53 文)

この夏 50 歳になりました。春には個人情報保護法に振り回されました。新しいことがずっとアタマに入りにくくなり、嫌になりました。10 年経ったら還暦です。まだまだのようなもうすぐなような。きっとすぐなんでしょう。

鳥井 陽子 (昭 54 文)

いつもご案内をいただきありがとうございます。
転居しましたので連絡致します。

今井 啓介 (昭 56 経)

4 月に福岡に転勤になりました。九州に来るのは初めてなのですが、どこに行っても景色が良く、海山の食べ物も旨く又、姉ちゃんもきれいで、毎日楽しんでます。

川野 幸彦 (昭 56 理)

皆様お元気ですか？いつも御案内ありがとうございます。秋の集会は参加できません。出張です。沢登り・きのこ狩りなど楽しみにしていましたが残念です。皆様によりしくお伝え下さい。

大阪に単身赴任してから 1 年半が過ぎました。都会の生活にも慣れました。先日、大森さん・要さん・住友さんと飲みに行きました楽しかったです。何か集まりがありましたらお誘いください。いつも連絡頂きありがとうございます。

山本 恵昭 (昭 56 理)

10 月 10 日(月)に朝から一仕事入ってしまいましたので、今回欠席させていただきます。最近忙しく近場の日帰り沢登りぐらいしか行けません。じっくり焚き火を囲んでキャンプなどしたいものです。

青木 雅夫 (昭 57 経)

いつもご案内ありがとうございます。

八木 健 (昭 58 経)

毎回ご案内ありがとうございます。すっかりご無沙汰し申し訳ありません。腰痛が中々治らず、少々焦り気味です。皆様のご健勝と盛会を祈念しております。

返事が遅くなり申し訳ありません。土・日 都合がつかず欠席させて頂きます。盛会を祈念してお

ります。皆様によりしくお伝え下さい。

西名 俊英 (昭 61 理)

会社の再編もあり、バタバタしています。娘も 1 才 7 ヶ月で育児に手がかかっております。そんな訳で山の方は、筑波山・大室山でお茶を濁しているこの頃です。

いつもご案内を頂きありがとうございます。
2006 年 1 月に次女が誕生し、なかなか外出も思うように出来ない日々です。

阿部 康彦 (平 6 法)

子供 4 人目が誕生し忙しい日々です。7 月に帰省中の松成君と御影上の西山谷を歩いてきました。改めて甲南大学の立地の良さ(山歩き)を知り、自分の家の近くでも良いところないかと思いを募らせ、阪急山本の裏山に分けるとボルダリングできる小さな岩場を見つける事ができました。早起きして仕事前に時々運動しています。

藤井 琢也 (平 6 経)

毎回ご案内戴き、有難うございます。下記住所へ引越ししております。

毎年、案内していただきありがとうございます。

松成 健 (平 8 文)

転職しました。アストラゼネカ 株式会社
住所は変わらずです。山は近郊の山をぼちぼち登っています。

池内 友宏

今年から出席できるはずだったのですが、子供を見なければならなくなりました。来年は参加します。

2005 (平成 17) 年秋「木曽福島集會出欠」と 2006 (平成 18) 年春「総會出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

－ 報 告 －

定 時 総 会

日 時 平成18年4月22日 (土)

場 所 平生記念セミナーハウス

出席者 山本三郎 神戸謙司 (名誉会員・顧問)
國府雄次郎 奥山正雄 鷲尾 顕 小川守正 福井 實 國府三郎 (旧制高校)
北方龍一 池上弘倫 村上恭央 (新制高校)
小原耕治 宮本 侑 木全 実 柳澤 正 鈴木頼正 雨宮宏光 鳥居威男 芦田匡平
伊丹弘忠 牧野 宏 廣瀬健三 越田和男 藤安賢一 大関和男 二谷和成 武田雄三
村上與利一 福田信三 安井 正 鶴木 洋 伊丹徳行 浪川純吉 石原浩二 南里章二
井上知三 平井幹男 大森雅宏 要 浩晶 山本恵昭 川野幸彦 (大学)
谷 勇輝 (現役)

- 議 事 1 会長挨拶
- 2 17年度事業報告
慰 霊 祭
山 嶽 寮
木曾福島集会
中高活動報告
- 3 17年度会計報告 (別記)
- 4 18年度事業計画
慰 霊 祭
山 嶽 寮
木曾福島集会

議事に続いて懇親会

会計報告

平成17年度

会計 山 本 恵 昭

平成18年3月31日 単位 円

秋の集会 木曾福島

平成17年10月9日(日)～10日(月)

木曾駒文化公園施設「駒王」にて開催された秋の集会。旧制の大先輩、赤松会員をお迎えして旧交を温め、夜の更けるのを忘れました。



山本恵 大森
村上 井上 浪川 山本真 大関 武田 二谷 牧野 伊丹徳 安井 塩崎
阿部純 砂川 宮本 柳澤 赤松 小原 雨宮 田邊 鶴木



テラスで「久しぶり」



二谷さんと大関さん



赤松タイショウと阿部さん

慰 霊 祭

平成18年4月23日(日)

銘板取付

故 山口雅也氏

故 乾卯兵衛氏

参 加 者

神戸謙司 (中高顧問)

柳澤 正 雨宮宏光 鈴木頼正 越田和男

廣瀬健三 大関和夫 二谷和成 鶴木 洋

武田雄三 村上與利一 伊丹徳行 安井 正

柏 敏明 塩崎将美 浪川純吉 國分廣昭

石原浩二 南里章二 山本真博 松下哲夫

大森雅宏 (大学)

お 客 様

乾恵美子様 本田依子様 横山加壽子様 横山紀子様



ー 掲示板書き込みダイジェスト ー

山行とつどい 2005.4～2006.3

ホームページ掲示板の書き込みから。一部「山行」「つどい」以外のものも含まれます。

亀山へ

山本恵昭 '05/04/02 (土)

今日は竜野の亀山(きのやま)458mに行ってきました。山城跡だけあって周囲は急峻な地形ですが、北西はなだらかな台地となっていて美しい山上池が3つ有り、のんびりと落ち着く所でした。

何か見覚えがあるところに出たと思ったら、以前日本ハムのバーベキュー食べ放題につられて子供と参加した植樹会の場所でした。もちろんそのとき植えた木は鹿の餌食にならず無事生きていました。娘の書いたプレートも健在でなつかしかったです。

下山したらズボンにダニが2匹。獣の多い山はいつもダニちゃんやヒル君とご対面。一応風呂に入ってから帰りました。

兵庫県も六甲と氷ノ山だけではなく、いろいろな面白い山がありますね。ちなみにこの辺り新竜アルプスと言うそうです。

関東在住者花見の会

越田和男 '05/04/03 (日)

昨日、恒例の海老名の大関宅のガーデンパーティーは、遠路武田会長の参加もありにぎやかでした。桜の開花にはちょっと早く、肌寒い一日でしたが、遅くまで焚き火を囲み楽しみました。

参加者は伊藤文三、福井實、砂川、米山、平井吉夫、越田、大関、飯田、武田雄三、水渡、森岡 それにJACの田村俊介、鈴木敬吾の諸氏。

いつもながら、準備から後片付けまで全て大関におんぶにだっこ。あらためて御礼申し上げます。

近況

田邊 潤 '05/04/11 (月)

総会の返答を出し遅れたため幹事さんに謝りのことばかり書いたのと、総会には出れませんので近況

報告します。

先日車で富山へ行くことがあり、ついでに馬場島へ行ってやろうと上市でコンビニ弁当を買い釈泉寺、蓬沢、伊折と車を進めました。釈泉寺から上はまだかなり雪が残っており、多い時には2mくらいも積もっていたのだらうかと思わせる状態でした。春霞ではありましたが快晴の日和で伊折橋のたもとの工事現場に車を寄せて家内と二人で剣の絶景を眺めながらコンビニ弁当をいただきました。早月川は昨夜来の雨で濁りが入っていました。伊折の部落は新しい酒屋を除いて誰も居ない廃村になっていることを、「通行止め」のバリケードで止まらざるを得なかったもので知りました。一軒だけ学生時代の当時に宿泊させてもらったとおぼしき古い家が残っておりました。酒屋の女将さんに馬場島まで行けるのかと聞いたところ、道には雪はなくて行けるよとのこと、行っても良いかと聞くと、良いとは自分の口からは言えん、とのことだったが、なんとなく良いとの感じがしたのでバリケードをどけて上りました。しかしものの1kmも行くと鉄門扉があり閉鎖されておりました。開けようとしたのですがだめでした。普通、錠前は下り側についてるものですが、ここは山側についており一見開けられそうに見えただけのことでした。何故山側の人が錠前をかけるのか、首をかしげる門扉ですがいたしかたありません。道から早月川へ少し下って写真でも撮ってやろうと恐る恐る斜面を下っておりましたら、ものの見事にシュルンドに首まではまり往生しました。剣の西面は上高地に勝るとも劣らぬ景観があるのに殆ど人の居ない静けさはまさに岳人の宝の聖域でしょう。デカや古市の落ちた小窓尾根や、わが青春の最も印象深い冬山だった早月尾根などを家内に語りつつ春の一日を楽しんできました。

フンザ短訪

越田和男 '05/04/19 (火)

甲南の連中が足繁く通っていた頃はまだ現役で働いており、指くわえているばかりでした。今般フンザ5連泊というツアーを見つけて一行6名のグループで行ってきました。

天気にも恵まれず期待したスカルドへのフライトも欠航、フンザ滞在中も青空なく、山見遊山としては消化不良気味なるも、丁度フンザ名物杏の花は満開でそれは見事でした。フンザのフレンドリーな人々、特に可愛い子供たちの眼が印象的でしたが、長谷川記念学校で全校生の前で挨拶させられたのには閉口しました。

もうひとつの名物カラコルムハイウェイの土砂崩れの洗礼はばっちり、往路にひっかかったダスーチラス間の岩雪崩は帰途も復旧せず、崩落箇所は徒歩通過には緊張させられました。ギルギットは治安悪くホテルに缶詰、チャタール高原付近もずっとパトカーの護衛つきでした。

ラワルピンディに帰りつきイスラマバードの督永さんのところに電話を入れたら、丁度米山バブさんが来られており、ビールつき昼食をご馳走になりました。バブさんはスカルド行きのフライト待ちで予定が立たずうかめ顔つきでした。

大山登山

森本寛之 '05/05/01 (日)

29、30日と新入生2名を連れて大山へ行ってきました。

天候にも恵まれ(山頂はあいにくガスってしまいましたが)とても快適に登ることができました。

お車では武田会長に、現地では塩崎さんの別荘に、と二氏には大変お世話になりました。この BBS をお借りして心から感謝の意を表します。これからも新入生共々どうぞよろしくお願いします。

現役の HP に今回の写真を掲載しておりますのでご覧ください。

<http://www.club.konan-u.ac.jp/~alpine>

総会と剣岳敗退

川野幸彦 '05/05/01 (日)

先日の総会では色々ありがとうございました。小川さんのお話には感激しました。また広瀬さん！お声を掛けて頂きありがとうございました。ただ二次会は時間が短くて残念でした。また宴会やりたいですね。



ところで先程剣岳から帰ってきました。結果は長次郎のコルまでで頂上には届きませんでした。以下報告です。

4/29(金)

ミズレ+強風+ガス 室堂 8:40⇒剣山荘 14:30

扇沢 6:30 発のトロリーバスに乗り室堂まで。連休初日で物凄い人である。室堂はミズレでガスのため視界 10m前後。おまけに風も強い。最悪の天気であった。新品のゴアテックスの雨具を付け出発。これは具合が良く雨は弾き蒸れも殆どない。雷鳥沢まではポールとトレースがあり問題無かった。雷鳥沢から御前まではトレースが一本伸びているだけひたすら登った。相変わらず横なぐりのミズレで嫌になる。二時間程で御前小屋に到着(ここは20年ぶりである。S56年冬にはここで5日間沈殿した。あの時は参った。)。ここで泊まるか迷ったが「剣沢小屋までポールが立っている。」と聞き先に進むことにした。20分で剣沢小屋。ここから剣山荘まではトレースもなく進むかどうか迷ったが「トラバースすると30分で行ける。また古いトレースもある。」と聞き先に進んだ。しかしガスで視界 10m。トレースも怪しいのが何本か交差していて現在地が全く判らず、結局自分で付けたトレースを剣沢小屋に戻った。1時間半のロス。疲れた。小屋で

休んでいると「たった今、剣山荘までトレースを付けた。」と聞き再び出発。こうなるともう意地である。何としても剣山荘に行くことにする。なおこのトレースは私が辿ったものより相当上部に付けられていた。バテバテで到着。小屋の中別世界で快適。部屋も一人りで個室。客は単独の方が独り(後にこの人は関学のキヨセさんであると知った。)とガイド連れの7人パーティのみであった。疲れた。早々と夕食を取り就寝は18:30。なお就寝前に外を見ると、先程私が迷いウロウロしていた所は小屋から5〜60m位下であった。山の恐ろしさを改めた知った。

4/30(土)快晴

剣山荘 6:15⇒長次郎のコル 11:20⇒御前 16:00⇒雷鳥山荘 17:10(泊)

昨日とうって変わって快晴である。アイゼンを付け長次郎谷出合までシリコも交え快適に下った。スキーヤーが脇をすり抜けて行く。この日長次郎谷から剣を目指したのは、私以外に社会人山岳会が2パーティ(8人と5人)。単独のスキーヤーが1人。出合から2Pはアイゼンが良く効いたが、熊の岩を過ぎた頃から雪が緩み始め膝までのラッセルとなる。当初私も先頭に立ちラッセルしていたが直ぐにバテて交代。この時単独での限界を感じた。何とか長次郎のコルまで這い上がったが、先行パーティは目の前の雪壁で緩んだ雪に苦勞してなかなか前に進まない。自分の技術と体力・現在の時間を考えてここで引き返すことにした。ここまで登ってきて残念であったが来年は、大森さんと山本少年とまた来るぞ！と勝手な事を考えながら下った。シリコも交え30分程で出合。途中、昨日剣山荘で一緒だった単独の方と会った。話が進むにつれ関学OBのキヨセさんであると知った。昨夜は向き合って夕食を食べたのに言葉も交わさなかった(自己紹介は重要である。)。キヨセさんは源次郎上部(I・IIのコルから)から本峰。池ノ谷のコルまで行かれたそう。凄い!!!大森さんや住友さんの事を懐かしく話されていた。「皆さんによろしく！」との事。出合からはバテバテで御前まで登り、シリコで雷鳥沢を下り、最後の力を振り絞って雷鳥沢山荘まで。11時間行動は堪えた。温泉に入りビールを飲みボタンキュー。疲れた!!!爆睡。

5/1(日)曇り 雷鳥山荘⇒室堂⇒扇沢

天気は下り坂。昨日の快晴は幸運であった。

* 雪山での単独は限界がありました。先行パーティがいたから長次郎のコルまで登れましたが、あれが無かったらもっと手前で引き返していました。来年は皆さんと一緒に剣岳を目指しましょう。

追 加

川野幸彦 '05/05/02 (月)

昨日の報告の続きです。最後のメールを送付し爆睡でした。以下感想等です。

アルパインクライマーは少なくて殆どがスキーまたはボーダーでした。20年前とは逆ですね。当時はスキーヤーを余り見かけなかったような気がします。剣沢はスキーのトレースだらけでした。八ツ峰には数パーティが取り付いていましたがまだ連休2日目なのでV・VIのコルより上部に達している人はいませんでした。帰りに長次郎谷で関学OBキヨセさんと立ち話中に、右叉をスコップを使ってシリコをする単独の兄ちゃんから「八ツ峰I・IIのコルはどこですか?」と聞かれました。キヨセさんによるとこの兄ちゃんは1日で昨日の悪天の中、小窓尾根を登りこれから八ツ峰に向かうのだそうです。キヨセさんは途中凄い勢いで登ってくる姿を見たそうです。なかなか頼もしい兄ちゃんです。あのシリコ用スコップを使って雪洞を掘るのでしょうか。源次郎尾根には誰も見かけませんでした。4人パーティが長次郎谷側のルンゼから取り付いていましたが稜線手前で引き返してました。このルートはI峰の下部を大きくカット出来るのでインチキではないかと思います。やはり末端から登るのが正規のルートでしょう。平蔵谷は帰りに覗きましたら3人が下りてました。動きが鈍かったので多分登山者だと思います。

テントは雷鳥沢に一杯(数え切れません。100張以上です。)。剣沢に20張程度でした。以前は適当に好きな所に張って散在していましたが、今は縄で囲ってある狭い所に集められているような感じでした。窮屈ですね。

山小屋は剣山荘・雷鳥山荘ともに1泊2食付8400円。但し食事の内容は剣山荘が昔からの山小屋のメニューに対し、雷鳥荘は刺身に一人用鍋でした。これに

温泉付きで割安感があります。でも混み方は半端ではありません。

最後に関学 OB キョセさんのことです(漢字が判りません。またお名前を聞き間違えたのかも知れません)。現在関学 OB 会は殆ど活動していないようです。先日の総会の話等をしましたら「甲南が羨ましい。」とおっしゃっていました。キョセさんは豆田さんと同期です。話の中では、大森さん・住友さんのお名前が出てました。私も多分現役の時に会っているのかもしれませんが、お互い記憶にありません。なおこの HP をご覧になるようにお伝えしました。歩くスピードも早くて元気一杯の頼もしい方でした。山は広いようで狭いですね。

大森雅宏

川野君が剣山荘で出会った清瀬君。関学は私たちの頃は太浦さん・林さんが上級生で同年に継松君がいて、清瀬君・百々君・帽田君・少し離れて芦田君なんて名前が出てきます。

真砂の水場の下級生友の会や蓬莱峡のトレーニングで関学とはよく会いました。ピクニックセンターのコンパでコンタクトを落とした奴がいたことやら他大学のGさんが大暴れしたり、色々思い出します。

源次郎上部から本峰、池ノ谷の科尔ですか。ずっと山登り続けておられたんですか。

甲南高校の神戸先生は清瀬君の後輩、いろんなつながりがあります。このホームページござらんでしたら、何かコメントをお願いします。

大日岳～奥大日岳～立山川 山スキー

山本恵昭 '05/05/01 (日)

浪川さん、大森さんと、大日岳から奥大日岳へラウンドし、立山川を滑り降りて、今朝、帰ってきました。

29 日(金)小又川に荷物を下ろして馬場島に駐車し、自転車で小又川へ戻る。私のスキーを降ろし忘れて、流れ止めで担いで自転車に乗るハプニング。天気予報に反して雨も降り、さえない入山 8:00。堰堤をいくつか越えて、コト谷出合に 10:00。ここから、スキーを履いてひたすら登り科尔に 12:00。数年前に来た時は雪が少なく、尾根上は藪漕ぎであったが、今

回はスキーで快適に登れる。ただし、横殴りの雨、視界 20m、早乙女岳で行動終了 15:00。雪洞を掘る時間が惜しいので、斜面を掘り下げブロックを積んで、ツエルト2張り、もう1つのツエルトをフライ代わりに張って、今宵の宿に。濡れを我慢して、明日の好天を期待するのみ。

30 日(土)快晴の中、クラストした雪にクレーを効かせて出発 5:30。大日岳 8:20 着。雪も緩み、滑ったり担いだりしながら、最低科尔へ。途中、両側が切れ落ちている雪稜の下りがあり、念のため補助ロープでビレイ。科尔から急登でやっと奥大日岳着 12:30。剣の展望が抜群。



いくつかピークを越えて、室堂乗越 14:30。横山さんケルンのすぐ左の急斜面を滑るが、雪が腐り、滑る足元から雪ダンゴが転がり落ちる。カガミ谷に入ると、あちこちに雪崩れた跡がある。昨日の雨で落ちるだけ落ちた様子でかえって安心。傾斜の落ちた広い谷を快調に滑ると、あっという間に東大谷出合。見上げる剣が凛々しい。毛勝谷出合からは谷幅もせまくなり、慎重にコースを選んで下るとやっと安全地帯の取水口へ 16:10。少し下るとパワーシャベルの林道工事現場に出て、スキー終了。林道をトボトボ歩き、おばちゃん登山家の拍手を受けて馬場島到着 17:00。

温泉で汗を流し、浪川さんのリクエストで「とろー」(浪川さんが憧れの山スキーヤー早川さんお薦めの店)を探し、うなぎ蒸籠、刺身盛り合わせ、ご馳走様！

雨の入山、翌日は 11 時間半の行動。「現役やない

っちゅうねん！」

でも、雪稜、急斜面や広い緩斜面のスキー滑降、デブリだらけのゴルジュ通過、雄大な展望、本当に変化に富んだ山行に大満足でした。

DONNKICHI

大森、山本君大変お世話になりました。今から考えると今回のコースは現役のバリバリメンバーが行くルートだと痛感しました。しかしナイフリッジ下降時の恐怖感、立山川への滑降爽快感等々山スキーの醍醐味堪能しました。横山さんのケルンも豪雪に負けずに立ってました。全員黙祷の後ケルンの横から立山川にエントリーしました。

川野君来年は剣岳一緒行きましょう。

大森雅宏

大日・奥大日・室堂乗越・立山川、鉄人どん吉さんとプロフェッサー山本について行ってきました。

1日目

雨の入山、雷鳥沢から剣山荘の川野君も大変だったようですが・・・私はびっしょんこ。25年前のゴアテックスは水を弾きません。そろそろ新しいのを買わなくては。

2日目

立山川は30年近くムカシのロングラン以来。下から詰めると東大谷の出会いを過ぎて谷が開けて雪渓をなんとなくちょいちょいと登ったら稜線に、という印象だったのですが、1/3世紀近く前の記憶は実にいい加減でした。横山さんのケルンの斜面は結構な角度で落ちています。適当に緩んだ雪に助けられて、息を切らせて谷底に。傾斜が落ちてからは滑りも少し楽しくなり周りを見渡すゆとりも出ました。天気はいいし、ルートは山本君が取ってくれるし、いい感じ。特に途中の谷筋の奥に聳える岩峰が素晴らしい風景でした。

プロフェッサー山本のトレースを追うこと2時間足らずで下降が終了。あー楽しかった。

もっともこの日の前半、大日・奥大日のアップ

ダウンはおっちゃんには結構辛いものでした。靴が合わないのか足が痛くて、登りに苦労。体力不足も大きな要素ですがだんだん気持ちと行動が釣り合わなくなってきました。

もう少しがんばれる筈、とか、これくらいなら何とかなるぞというのが思うようにゆきません。解っているつもりだったんですが、実際にそんな目に遭うとすこしショックです。

頑張ってますね

廣瀬健三 '05/05/02 (月)

若手OBの大日、剣登山そして現役の大山行きに元気を貰います。

当方、4/28日快晴に誘われて、鈴木先輩、二谷さんと共に、高槻の奥の釈迦岳 — ポンポン山にハイキングに行ってきた。静寂の善峯寺もこれまた良かったです。

山菜の季節

山本恵昭 '05/05/04 (水)

嫁さんと下の娘とで、ハチ北のキャンプ場へ行ってきました。

「林道が今年の台風で崩れたので閉鎖中、水も出ないけど、それでも良かったら寝るぐらいいはご自由にどうぞ」とのことでした、何とか車も通過できたので行ってみると、森の中の良い雰囲気のカンパ場でした。完全貸切状態で、バーベキューの後、枯れ枝を集めて夜遅くまで焚き火。周りに何もないので、星がとっても綺麗でした。

朝、アオゲラの声で目覚め、周辺を散歩し山菜採り。後は昼頃まで、八重桜の花吹雪を浴びながら、ハンモックでダラダラ過ごしました。タラノメ、フキノトウ、カンゾウ、コゴミ、最後に沢筋にワサビの白い花を見つけ、葉ワサビを収穫。大山のうまい酒はありませんが、今夜は山菜のてんぷらとお浸しを肴に一杯飲んで、春の恵みを楽しみました。

遍路旅

kannroku '05/05/05 (木)

仕事が暇になったのを機会に遍路旅を計画する。徳島 1 番～23 番(166.5km) 高知 24 番～39 番

(424.5km) 愛媛 40 番～65 番(370.5 km) 香川 66 番～88 番(216.5 km) 88 番約 1,100～1,200km が全行程となるが、区切り打ちとして高知 39 番迄歩き遍路としテント持参の野宿。

4/13 出発 徳島 JR 坂東駅 13 時着(高速バス・JR)これより歩き遍路と 1 番霊山寺山門前にて遍路用品購入 身支度整えて山門をくぐり本堂・大師堂にて納経後札所にて出発の挨拶をして納経書に朱印をいただき次の2番へ。1 日当たり 30 km を目標に、1 番霊山寺～39 番延光寺迄、約 600 km をちょうど 20 日で一日も休まず歩き続けて、一番つらかったのは足に靴づれが出来て最後まで治らなかったことか。4/13～5/3 迄の遍路旅であったが、山と違った旅で多くの見知らぬ人達と言葉を交わし、地元の人達のもてなし・励ましをうけたりと人との触れ合いを知った旅であった。さあこれから山登りでもと考えて高知を後に。

福田信三

カンロクさん、すごいですね、600km をほぼ 20 日は早いんですね。車と違って目線が低いから、地のことが良くわかり人の親切にも触れるのでしょう。父親の朱印帳を引っ張り出しました。昭和 6 年 7 月～7 年 3 月 14 日 となっていました。何故か、88 番大窪寺の次に 3 月 21 日 45 番岩屋寺でここはダブっていました。いまどき、テント持参とは、まれでしょう。

カトリックでも、世界中で巡礼コースがあって、もっとも有名なのはピレネー山脈を通してサンチアゴコンポステーラまでの約 1000km です。6 月にコンポステーラに 3 日滞在しますが、少し歩くだけです。是非仕上げてください。

川野幸彦

森本さん！やりましたね。30km/日の歩行とは恐れ入りました。しかも全てテントとは…。ゆっくりお休み下さい。機会がありましたらお話お聞かせ下さい。

私はこれから大阪へ戻ります。明日、鳥取に遊びに行きます。休みボケで来週から仕事にすんなり戻れるか不安です。

廣瀬健三

先ずは森本カンロク兄の健闘に祝盃を！

次は北海道、稚内から鹿児島までの日本縦断 3,000km への挑戦に期待。これはチト酷かなア。

浪川ドンキチ兄と如何、ごくごく部分的に付き合いますよ。

当該 3,000 km 歩行は植村直巳が 52 日目にゴールの鹿児島に辿り着いた。1971 年 S46 年 10 月、(北海道 稚内発 8 月)

鶴木兄によるとカンロクの所持金も略同じの由、(植村はテント持たず、民家等に泊まった?)

余談ながら、彼とカンロクは略同い年の筈、どちらも短軀ガッチリ型、KAC OB 老齡の星の貴兄なれば不可能でない筈。

五月山

神戸謙司 '05/05/05 (木)

中高山岳部の神戸です。

先日(の)総会と慰霊登山は大変お世話になりました。高校生たちも色々な方々に声をかけていただき、楽しく登ることができたようです。ありがとうございました。

五月の連休、皆様の色々な山の報告で、山岳会の山行の幅広さを感じております。この連休中、中高山岳部も大峰の山上が岳へ行ってきました。レンゲ辻から山上が岳、尾根道下山で、中学生にはちょっと長かったようですが、よく歩きました。途中、大山合宿に参加している大学の神澤君から、高校生にメールが届きました。大峰にいながら、大山に思いをめぐらせることができ、たいへんよい雰囲気でした。

川野さん、大森さんのやり取りで、関学OBの清瀬さんをご紹介いただきましたが、私が現役大学山岳部の時、やはり五月の岳沢でお会いしました。もう 10 年以上昔のことで恐縮ですが、あの折は、林さんとお二人で、コブ尾根に登られたと思います。清瀬さんとは、それ以来ですが、山歩きをされているとのことで、嬉しく思いました。

まだ 山スキー？

Donnkichi & kannroku

‘05/05/15 (日)

打ち上げスキー？今シーズン締め括りと称して Donnkichi 君に誘われ 白山に。

5/13 20:30 大津発 24:00 別当出合下駐車場 車中泊。

5/14 5:00 出発 11:50 御前峰 12:30 御前峰下 2650mより滑降 14:10 1500mあたりにてスキー終了 15:00 駐車場

山スキーもいよいよ終わりに近づいて来たのをさったのか、多くの入山者がいつも遠くから見ている白山、やっと登れた感激ひとしお。Donnkichi は休むことを知らず一気に滑っていき、ついていくこちらのしんどい事このうえなし。まだ遍路旅の疲れ残っているようで、今まで以上に 疲れ多き山行でした。

帰って HP 見れば山本恵君の山スキーの計画、これは行かねばなるまいと。彼や大森君等と行くと何の心配もなく安心して同行できる。飯田さんの忠告は僕等への戒めの言葉と思って気を付けて行ってきました。



飯田 進

白山の写真懐かしく拝見しました。

昭和25年7月 小生真夏に雪の残っている山に初めて登りました。日の翳った山頂で寒くて震えていたのを思い出しました。

それから11年後の11月。コッシン イーチャン オケイと四人で一之瀬から白山を目指して。

という計画で出かけました。夕方一之瀬到着、雨。河原に建つ掘っ立て小屋に湧く温泉に。湯は限りなく水に近い温湯。入ったのはいいが出るに出不れずあんな寒い温泉初めてでした。翌日は雪。白山危ないので、コッシンの発案で、杉峠越へ鳩ヶ湯へ。地図に温泉マークがあったので、行くことに。杉峠は先般関学のワンゲルが騒ぎを起こした山のすぐ東側の峠、とその時コッシンが後日の話題を見越していたのか。鳩ヶ湯は温泉がすでに枯渇していたのか消滅していて、古びた民宿で一泊。この夜ノミが出て、なぜかそ奴がコッシンだけに集中攻撃。辛い夜を過ごされたとか。懐かしい白山行の思い出でした。

毛勝山東又谷 山スキー

山本恵昭 ‘05/05/29 (日)

今日無事に毛勝から帰ってきました。

28 日片貝山荘上の橋から 500m ほどで林道は雪でストップ。出発準備中、カンさんは雪溪の上にクマを目撃！5:30 発。スキーを担いで林道を。6:15 最終堰堤着。ここから上は雪が続いている。程よく締まっているのでスキーは履かず、アイゼンで。快調なペースで行くが三又付近から傾斜も急になり、はるか上に見える稜線になかなか近づかない。急斜面の中、数ヶ所の割れ目には次々登ってくる人が休憩に集まる。11:00 やつとの思いで稜線のコルへ到着すると、剣北方稜線と後立山のパノラマが飛び込んでくる。言葉を失うほどの絶景！20 数年前の軌跡を思い出しながら目で追う。

毛勝山 11:20 着スキーを履き 12:10 発。北面はかなり高度感のある広い急斜面。慎重に北西尾根 2151m ピークとのコルまで滑り、そこから東又谷方面へ。狭くなった谷は 1800m ほどまで落石が転がった急斜面が続く。そこから下は傾斜も落ち、広くなった谷を快適に滑ることが出来た。1250m 付近で所々雪が割れ、スキーを脱いだり履いたり、慎重にルートを探して進む。三階棚滝は左岸のフィックスロープを頼りに高巻き 14:00。また、すぐに雪割れ。右岸を高巻き、傾斜の落ちた雪面 1050m に出る。左岸を進み、最初の堰堤上 960m 付近で渡渉を迫られるが、運良く川

面に倒れかかった直径 15cm ほどの木を発見。猿のように枝をつかんで濡れずに対岸へ渡ることが出来た。堰堤は右岸に鉄の足場があり難なく越える。デブリとガレを越えて取水口到着 15:45。ここからははっきりした林道があるが、まだまだ雪で覆われている部分がある。片貝山荘上の橋着 17:00。広場にキャンプすることに決めて、車回収。夕食は豚肉お鍋。焚き火を囲みビールとワイン！

29 日計画の猫又山はまたの機会にし、のんびり朝食。コゴミお浸しとコゴミラーメン。カンさん浪川さんは山菜取り、大森さんはのんびり、私はイワナ釣り(2匹のみ)。北山鉱泉¥500 で垢を落とし、魚津駅前で昼食を食べて、魚津インターへ。

期待通り、毛勝山は原始の雰囲気が残るすばらしい山でした。特に東又谷は、広大斜面のスキー、滝場、デブリのトラバース、藪漕ぎ、山菜、イワナ。マタギの世界のような山登りを楽しんでできました。また、大森さんと学生時代の思い出をたどる山行にもなりました。

カンさん浪川さん、お疲れ様でした。これに懲りずにまたご同伴ください。そろそろ、沢ですかね！



DONNKICHI

28～29 日 毛勝谷～毛勝山～東又谷へ行きました。毛勝谷では標高差 1500m のボッカ訓練、頂上から東又谷へ快適な滑降、東又谷では三階棚滝の高捲き(スキー担いで岩登り)渡渉等の沢降り、山菜取りと、1 度で 4 度楽しい山行でした。相変わらず、大森、山本両君には、大

変お世話に成りました。カンさんの年齢にしては、異常に強い体力に敬服。

川野君ぼちぼち遡行のシーズン到来ですね。

kannroku

楽しくも、過酷な山行。アイゼンを付けての登行 1500m の高低差をもくもくと登る。6 時間の登りではあるが 3 人の気づかいを感じ、励まされ辿り着いた北方稜線。180 度に渡る後立山連峰登った者の特権でもあるか。

頂上からのスキー、各々自分なりの力量に合わせ雪面を滑る。こけても起き上がり又滑る。スノーブリッジを先行者の後を渡る。64 歳の初老へのいたわり気づかいを感じた山行であった。donnkichi・大森・恵昭君等にありがとう。

大森雅宏

KANN さん DONKICHI さん、ガイド山本君、お礼が遅くなりました。毛勝、いい天気でよかったです。頂上からの眺めも価値千金。下りの急斜面はびびりましたが、怪我なく下りたらこっちのもの。

あの急斜面が、北方稜線の記録に出てくる「天国への坂道」ですか。あの斜面、下りも下りですが登りはもったいやでしょうね。雪によったら雪崩の恐怖も。

ガイド山本は 2 年の冬に北方稜線を剣岳までトレースしています。私は同じく 2 年の冬山で片貝第四発電所から大明神尾根を経て猫又まで。難易度は僧が岳から剣のほうがはるかに「うえ」ですが、どちらも思い出の山でした。

話は戻って、下りのルート。

KANN さんも DONNKICHI さんも、きれいに滑られますね。あやかりたいです。

滑り終わりの滝のあたりの雪の割れ具合は上部から予想できないもので、リーダー山本へのプレッシャーは大きかったと思います。私らついて行くだけですが、先頭の苦労お察します。いつも有難う。なにになに、礼より少しはスキー上手くなれって。それとこれとは別のハナシ。

山本恵昭

カンさんの体力にビックリ。

日曜日はのんびりキャンプだったにもかかわらず、月曜火曜と体がだるいです。今回の毛勝山は、40代の私にも結構ハードなコースでした。私より20歳ほど年上のカンさんが走破されたのは、考えてみるとすごいですね。私が20年後、カンさんのように動くだけの体力気力があるか自信がありません。さすがお遍路で鍛えられただけのことはありますね。

実は、今回のコースはかなりプレッシャーがありました。降りてから滝場が通過できないと登り返すのはあまりに大変。山頂にいたツアーのプロガイドも僧が岳から雪が割れているのが見えたので止めた方が良いというし、記録によると、渡渉もかなり危険らしい。偵察に行くと滑り出しの斜面は高度感がすごい。登ってきた毛勝谷を下るべきか山頂で迷っていました。そんな時、カンさんの「計画通り行こう」という心強いお言葉で決心がつけました。

大森さん、私の2年の冬合宿は、毛勝北西尾根から剣だったように思います。こういう記録に詳しいのは川野ですが、どうだったでしょうか？

飯田 進

毛勝岳。思い出の山。

今から30数年前のゴールデンウィーク。7名のOBで毛勝沢に登っていきました。あとワンピッチで頂上、というところで沢の真中で大休止。昼飯を食らっていたところ、上部でドーンという雪崩の音がしました。しばらく警戒して様子を窺っていましたが、何事もなく、さあ行こか、と立ち上がったのを見計らったように、上部の隠れたルンゼから雪崩が襲ってきました。あわてて逃げる我々に、ガウーッとばかり襲いかかってきました。まさに危機一髪目の前をすごい勢いで通過していきました。あと100メートルも下にいたら、沢一杯に広がった雪崩に飲み込まれていただいでしょう。その時のメンバーは今でも皆様ご健在です。悪運の強い方々ですこと。

月 山

越田和男 '05/06/25 (土)

6月23日、山形の月山に行ってきました。同行はJACの酒飲み仲間の大橋晋(国学院OB)、田村俊介(大阪外大OB)の熟年両氏。

土砂降りの東京を抜け出して福島あたりまで行くとやがて青空も出て、梅雨時分は北へ走るに限るなと思いました。

今年は特別だそうです、月山の雪の多さにはびっくりしました。姥沢リフトを降りると雪の世界、夏スキーを楽しむ若者達を横目に黙々とアイゼンで登るといのはあまり様にならないのですが、夏道の出た静かな稜線ではエーデルワイスを含む高山植物が結構咲き乱れ、オッサン三人は大満足。全行程の半分は雪上で二時間半で誰も居ない頂上着。例によって赤ワインで祝杯。

小生の6本爪の簡易アイゼンは下りでダンゴになってダメ、12本爪の仲間は全くダンゴ無しで差をつけられました。

宿泊は志津温泉・五色亭@7500円 お勧め。
湯殿山ホテル@9000円まあまあ。

三谷溪谷

山本恵昭 '05/07/16 (土)

三谷溪谷に行つて来ました。結局、大森さんと私の2人。駐車場9:40、山頂 12:10、駐車場 13:30。

ナメ状の雌滝20m、シャワークライムの雄滝 30mを含め、直登できる5〜6mほどの滝が数え切れないくらいあって、なかなか楽しい沢でした。千が峰山頂からの下りでは、最近のダレた生活を反映してひざがミシン踏みっぱなしでした。

久しぶりに冷たい水を頭からかぶると、仕事で溜まったモヤモヤがいつきに飛んでいきました。今度はもう少し早い目に計画を立てますので、ご参加ください。

二股へ行って来ました。

柏 敏明 '05/07/27 (水)

劔岳二股に行ってきました。アーバンライフの廣瀬さんと山本さん、三菱商事の森女子、竹中親子、井本親娘、水渡君、関学山岳部 OB の小西さん、そ

れに小生の計10名の大部隊でした。

7月22日の夜、富山地鉄ホテルに東京、大阪から集合。翌日、ホテルの前から直行バスで一気に室堂へ。

みくりが池温泉で昼食後、雷鳥沢、劔御前を経て予想より早く15時過ぎに劔沢小屋に着く。程なくシャワーですよとの声。それも40度前後の熱い湯。汗を流した後で、劔、源次郎尾根を見ながら飲むビールの旨いこと、日本酒「立山」の旨いこと、ワインの旨いこと。もう最高でした。

24日、6時20分に出発。大雪渓に入り軽アイゼンをつける。高巻きをしない分、時間を稼ぎ、真砂沢小屋を経て、二股に10時前に着く。40数年ぶりの二股である。近藤岩は直ぐに判ったが、岩小屋のあるBC跡がどうしても見つからなかった。小西君も関学のBC跡を探し、大体あの辺だっただろうとの目星をつける。三ノ窓の雪渓を見上げながら昼食。残念ながら上部はガスって見えなかった。



仙人池への急登に取付き、例年通り少し遅れて仙人池ヒュッテに14時過ぎに着く。女性達がいないので聞くと、目下入浴中との事。それも3人が一度に入れるヒノキ風呂。大窓、小窓や仙人池に映る裏劔・立山を見ながら、又、又風呂上りのビヤパーティー。たまりませんでした。

25日、裏劔のモルゲンロートを期待するも残念な

がら見えず。予定を早めて出発。途中、数箇所が高巻きを強いられる。初めての本格的な山だろうと思うが、根も上げずに井本朝子さんは必死に付いて行っている。後で聞くとやはりしんどいよりも怖かったそうである。その点、竹中勇一郎さんは、建設現場で鍛えられているせいか、余裕たっぷりであった。気持ちの良い、礼儀正しい近頃では珍しい素晴らしい二人です。6時間かけて11時30分、仙人ダムに到着。文明の利器の恩恵に預かって宇奈月まで一気に下る。タクシーでJR黒部駅まで出て、ここで来年の再会を約して解散となる。皆さん色々とお世話になり有り難うございました。来年も宜しくお願いいたします。



カトマンズで西浜君に会いました

南里章二 '05/08/01 (月)

山岳会の皆様方のお元気な御活躍ぶりをいつもこの掲示板で拝見させていただいています。さて私、先月の14日よりカトマンズ経由でチベットに入り、カイラス山の巡礼(まねごと)をしてまいりました。カトマンズ帰着時には当地在住の西浜君にお会いすることが出来、彼とネパール人の奥さんミナさんとの間に生まれた良織チャン(丁度満一歳)ともども、元気そうに過ごされ、これから作り上げていこうとする生活の夢を見させていただきました。山岳会の皆様方にはくれぐれも宜しくとのことでした。私、明後日より西オーストラリア、ダーウィンからパースまでの縦断旅行にでかけますので今月末に帰国後、大急ぎで原稿をまとめ山岳寮で詳しいご報告をさせていただきたいと思っています。

ヨセミテの印象

越田和男 '05/08/07 (日)

7月中旬ヨセミテ3泊+キングス・キャニオン+セコイヤ2泊というハイキングツアーに参加した。天気恵まれ過ぎて、丁度カリフォルニアの Central Valley を中心とした40度C超の熱波に遭い、暑くて往生した。ただし、サンフランシスコなど海岸部は20度を切る寒さ。この時期要注意です。

それでも Glacier Point から Yosemite Valley への標高差 1000m の下りハイクを60歳を越える老人達が炎天下熱射病にもならず嬉々としてやってのけるあたり、日本人も遊び強くなったものです。

冬にドカ雪が降ったせいか、ヨセミテ売り物の滝々は水量が80年ぶりの多さとかで、それは豪快でした。

フリー・クライミングの聖地エル・キャピタンの岩壁基部から垂直 1000m を越える壁を登攀中のクライマーを双眼鏡で追っかけるも首が痛く数分でギヴ・アップ。こんなところに何日もぶら下がりて登り続けるなんて、山岳部時代でも想像外で、チンネやジャンなどに登って嬉しがっていたなんて口にも出せませんでした。

前鬼川

山本恵昭 '05/08/08 (月)

大峰前鬼川に行って来ました。メンバーは、森さん、浪川さん、大森さん、私の4人。夜 10 時に出発、JR 芦屋駅で森さん合流後、西名阪香芝経由で前鬼駐車場へ3時着。雨宮さんテントを張って仮眠。

7日 6:30、駐車場所からガレ場を降り黒谷を下って、前鬼川出合へ。前鬼川は、明るく開けた谷で、水もコバルト色。10m2段の滝の迫力と、その上の120m川幅一杯のナメがすばらしい。三重滝からの支流の合流点では、いくつもの滝が周囲を取り囲み、不思議な風景。

8:00 に水垢離に到着、ここで修験道と合流。行者が垢を落としたという淵で1時間ほど水泳大会。時間も早いので、もう少し上まで行くことにする。すぐに廊下状になり深い滝壺を持つ滝を越えて 9:30 二俣。どちらの谷も滝になっていて、その間を登り左俣へ入

る。20mの滝はザイルを出して直登。その上は枯れ谷になってしばらく単調。杖谷出合は広々して良い所である 10:00。杖谷に入ると小滝をいくつか越えて、途中から左のガレた谷を上る。尾根上の獣道をたどり、左に少し下りると釈迦が岳からの登山道に合流した 12:00。良く整備された道を前鬼宿坊へ 12:40。大森さんのお知り合いで、代々宿坊を守る五鬼助さんよりジュースをいただく。駐車場所 13:30 着。帰りの渋滞が気になるので、温泉はパスし、富田林経由で神戸 6:00。

カンさん、浪川さん、絶好調。私はつき指、大森さんはハチ刺され。でも大事には及ばず、冷たい水の感触を楽しみました。



オレゴン・カスケードの山々

越田和男 '05/08/10 (水)

あまり知られていない山を紹介します。先月ヨセミテのツアーに参加の後、一行と別れてサンフランシスコからレンタカーで西海岸を北上し、昔2年間で過ごしたオレゴン州を旅して来ました。

北米大陸にはロッキーと平行して、ロッキーと太平洋岸との中間辺りを南北に走るもう一つの山脈があり、北部のワシントン州、オレゴン州ではカスケード山脈、南のカリフォルニアではシエラ・ネバダ山脈となっています。

カスケードの山々は火山で、標高はロッキー程ではありませんが、こじんまりと氷河・万年雪を持ち、登

山の対象としてこの地方の人々に親しまれています。30数年前私が籍をおいたオレゴン大学にも当時 Alpine Club があり、山登りが盛んでした。

夏合宿無事下山しました

森本 寛之 '05/08/14 (日)

現役夏合宿無事帰阪しました。

悪天候により予備日発動し、予定より一日遅い12日夜、全員無事帰宅しています。

馬場島から早月小屋を経て剣岳まで向かいましたが、10日午前4時、天気予報と小屋のご主人のアドバイスで、午前中の天候は大丈夫との情報に少雨のなか早月小屋でテントを撤収しました。しかしピーク目前の高度約2850mあたり(午前7時半ごろ)で天気が急変し、激しい落雷と豪雨に見舞われ、頂上付近の鎖場に差し掛かっており非常に危険な状態と判断しやむをえず撤退となりました。

早月尾根の頂上付近の雷は非常に近く、味わったことのない豪雨に一生忘れないほどの恐怖を感じました。

下山途中の登山道もあたかも沢ようになっており、困難を極めました。

午前10時45分、(軽い切り傷等はありませんでしたが)無事早月小屋まで戻り、小屋に非難させてもらい小屋のご主人(田制さん)には大変お世話になりました。予想外の天候の悪化で甲南山岳部が剣へ向かっていることを心配し、レスキューに報告して下さっていたそうです。

白馬でも大規模土砂崩れが起きたと報道されていたことを下山後知りましたが、当日から翌日(11日)にかけて、立山、白馬界限ではまれにみる悪天候だったそうです。

翌、11日午前は天候もいったん落ち着いたので、午前2時半に起床し悪化しないうちに剣を超え、別山乗越に向かいしました。昼ごろまでは晴れ間も出るほどでしたが、前日の大雨で地盤がゆるみ、剣頂上から下る道中、沢のほうで土砂崩れの轟音と、人間の悲鳴のような叫び声、そしてその後レスキューのヘリが飛びまわっていました。当時濃い霧の為詳細は不明ですが、その他にも目の前でヘリで救助される方がいるなど、白馬大雪渓以外にも事故が相次い

でいました。

翌日も悪天候の予想だったことと、予備日発動により万が一の事態の時の食料に不安があったため雄山は経由せず、雷鳥沢にテントを張り、12日無事室堂より下山しました。

余談ですが、早月尾根の田制さんは、かなり昔から早月小屋の守をされているそうで、昔頻繁に早月尾根から登っていたころの甲南山岳部を大変なつかしんでおられました。

生野近くの段が峰 倉谷川遡行

大森雅宏 '05/08/21 (日)

8月20日倉谷で半日遊んできました。

メンバーは、久しぶり塩崎さんと山本・大森の3名。

9時前に生野で合流、生野高原CCを抜けて林道へ。簡易水道ゲート近くから入溪。9時半頃。

途中ルート間違い、20分ほどのロス。先行パーティの足跡を見ながら「あの人達本谷に入るのかなあ」などと枝沢に入った私らが間違えてました。気づいて途中から引き返し、成り行きで林道をお不動さんの滝まで。行場とお堂のある滝を右の歩道で。上流の川床は赤っぽい岩でナメ。

ここからきれいな川床を楽しみにしていましたが、今年の台風被害か倒木・落石(落岩)で荒れていました。とはいえ大きな滝は倒木も関係なく圧巻。

二ノ滝は高度感もばっちりで、こんなときの話題は、「ナミ川さんやったら滝身を登りたがるでしょうねー」。しばらく眺めてから左の乾いた岩、ムカシのグレードで3級下くらい。登ってみるとナカナカ高度感がありましたがザイル出すほどではなし。30m。11時。

小滝・中滝をいくつか越えて、まっすぐ進むほうが自然な分岐の左側に三ノ滝。15m。滝の右側の、岩か草付きかはっきりしないあたりをいい加減に登って、林道のコンクリ擁壁に。うまい具合に開いている水路の中をぐりぬけ、小滝を越えて大休止。11時40分。塩崎さんは、夕方から飲み会予定。「ここで帰るわ。君ら藪漕ぎしておいで」。

頂上まで高度差200m。残る二人で沢を詰める。小滝中滝をぼこぼこ越えて、結構楽しく進むうち、スズメバチの出迎え。巣が近いので警告しているのでは、と生物学科。刺されると困るので沢から外れて大きく

巻く。そうこうする内に膝丈の笹原の急斜面に。なかなか稜線に。12時半頃。左に進んで頂上。

下山は千町峠から。峠の悠友山荘前から旗谷に降りようと道を進むと「おーい」と声。見ると思いがけず塩崎さんが。時間もありませんので迎えに来たよ、とのことで感謝感謝。有難うございます。

林道を下山途中塩崎さんは「一雨来た」そうですが、曇り時々青空で過ごしやすい一日でした。

車のデポまで送っていただいて、塩崎さんはお酒の待つ神戸へ。残りは生野銀山から東へ進んで黒川温泉へ。流行の自治体系の施設みたいで600円。汗を流して青垣から中町西脇市経由で西神戸へ。途中アマゴの養殖屋さんで1キロ3000円のお土産を半分こ。

近場の実動半日沢登り、楽しく過ごせて塩崎さんとリーダー山本に感謝。



塩崎将美

久しぶりに水遊びをして来ました。ナメをピチャピチャ、高度感ある滝登り、楽しく過ごしました。やはり沢登りは良いものです。何時ものことながら大森/山本両君には感謝です。

大森君撮影の写真をアルバムにUPしました。久しぶりの参加と言う事でカメラマンのお気遣いでモデルが私ばかり恐縮です。

後山

塩崎将美 '05/09/19 (月)

9月18日、兵庫県と岡山県の県境に位置する岡山

県の最高峰後山に登ってきました。

メンバー

塩崎将美(S41)、山本真博(S48)、松下哲夫(S52)

千種高原スキー場の直ぐ下の駒の尾登山口から標高1,100mの稜線に登り、駒の尾山(標高1,280m)、鍋谷山(1,257m)、船木山(1,334m)を縦走し後山(1,345m)頂上到着。後山は兵庫県側では板馬見山と言うようです。頂上からは氷ノ山はじめ周りの山が見えるはずがガスで視界悪く何も見えませんでした。その上ハチが纏わり付くので早々の退散、船木山まで戻り昼食、同じ稜線を下りました。登り2時間20分、下り2時間、良い汗をながしてきました。

お奨めは新緑か紅葉の頃に車2台で板馬見溪谷から登り千種高原までのラウンドと思います。

温泉は千種高原に在ります、入浴料300円。

北鎌は遠かった

Donnkichi & kannroku

'05/09/20 (火)

これで2回目の北鎌尾根計画となるが今回も断念の憂き目となる。

9/16 金 夜行ちくま9:38にて大阪出発。

9/17 土 穂高駅5時

バスにて中房温泉6:20~これより燕山荘~大天井ヒュッテ 15:00の表銀座を燕山荘まで標準歩行時間4時間を30分の延長で着。どん吉先生よりレッドカード。これにて北鎌計画中止の憂き目。ヒュッテに着いてみれば30人程の北鎌狙いの人達がいるとの話。湯股からの人々とで50名以上の方が北鎌に登るのではと、我等シルバー組ではビバークの覚悟が、これでは断念せざるを。

近年北鎌尾根は大天井ヒュッテ~貧乏沢下降~天井沢~北鎌沢出合~北鎌沢右股登行~北鎌の科尔~これから北鎌尾根~槍ヶ岳へと一般ルートになっている由。10時間前後が一つの目安となっているようだ。なぜこれほどまでに登る人がいるのかは分からない。それにしても驚きの一言。それに乗るとどん吉・カンロクもおかしいのでは。

9/18 日 大天井ヒュッテ~槍ヶ岳山荘~飛騨沢~槍平小屋。

貧乏沢の降り口を確認。横手に北鎌尾根を見なが

ら東鎌尾根を歩く。今ごろわんさか北鎌に取り付いている姿を思いつつ。

9/19 月 檜平小屋～新穂高温泉郷

曇り空の中を一目散温泉郷に。無料一番風呂に入って反省会。若い人達との登行を。どん吉は再度の挑戦をカンロクはサポートをと。

(7/15 金～7/19 月の間兩名は餓鬼岳～檜岳を目指したが途中で頓挫し燕山荘より中房温泉に下山した。その時も北鎌尾根の偵察を目的としていたが?)

屋久島

鈴木頼正 '05/10/03 (月)

9月27日夕方、森本リーダーと淀川登山口から小屋迄40分、翌朝6時30分昨夜の三日月、星の輝きは何処へやら、曇り模様の中、出発、一気の急坂、1500m迄来ると周りの風景がガラリと変わる。灌木、白骨樹林、さらに登る花之江河に着く、高層湿原、黒味岳は見えない。雨が激しく降り出した。又登りが続く、苔がきれい、清水がコンコンと湧き出ている。翁岳を過ぎれば宮之浦岳頂上だ、永田岳、海も雲の中、何も見えない。平石岩屋、坊主岩、第二展望台、第一展望台も過ぎ、やっと新高塚小屋に着く、15時30分、先客2名。夕方は13名にふくれる。翌28日6時30分燃料空のため、ビスケットと水で出発、高塚小屋で休憩、縄文杉、夫婦杉、大王杉、ウィルソン杉、翁杉やットロッコ軌道、大株歩道、三代杉、を経て楠川分れ、そこで又雨が降りしきる山の中へ入る、もう力が尽きた、リーダーが心配そうに時々たちどまってくれる。辻峠に着く。40分ばかりかけて天狗岩往復、白谷雲水峡に向かう。もののけ姫の森、七本杉、を過ぎ白谷山荘に着く、苔が雨に洗われ見事、シャクナゲも群生している、くぐり杉を横目に見てさつき吊橋を渡り、白妙の滝を過ぎると、幅 10mを越す激流の中に道が消えていた、ものすごい音をたてて激流が流れる中、リーダーの指導と体を抱きかかえるようにしてやっとの思いで渉る事ができた。下流の滝を見てぞっとした。やっ和白谷入り口に向かう。越田、大関両君が車で迎にきてくれた、有難かった、民宿で五右衛門風呂に入り、大関料理長の手づくりでビールが凄くうまかった。翌日は海水温泉に入ったりして島めぐりさせてもらった。10月1日鹿児島開聞町に

宿をとり、7時45分から薩摩富士、開聞岳に登った。下山12時。これで百名山99、100を登った。

森本、越田、大関三君には大変御世話になり、厚く御礼申しあげます。

パキスタン大地震

米山悦朗 '05/10/10 (月)

甲南山岳会の皆様へ
シムシャル峠に九月後半に入り久しぶりでミングリックサルをふもとから見てきました。

本来なら今頃帰ってくるはずでしたが、体調を崩したのといささかガイドに頭にくたのと天気が悪く温度も下がり零下の日が続いたので予定を切り上げて先週帰国しました。

幸運にも地震を避けて帰ることができましたが、まさに震源地の上を通って帰ってきたわけです。

現在死者二万人と言われていますがまだまだ奥地の状況は不明で被害者は拡大するものと思われる、カラコルムハイウエーも寸断され現在交通通信断絶の状態だそうで、状況はまったくわかっていません。

さて、日ごろお世話になっているニッパのトクナガさんがこの一年ほど北方辺境州向け支援のためのNGO ニッパウェルフェアアソシエーションを立ち上げていますが、このNGOが地震救援のための活動を開始しました。それに絡んで寄付金の募集をお願いしています。

詳細は

<http://www.pat.hi-ho.ne.jp/nippagrp/pakistan.htm>
を参照していただきたいのですが皆様のご支援をいただければ幸いです。ご協力をお願いします。

高山 高原川 沢上谷(そうれだに) 沢登り

大森雅宏 '05/10/11 (火)

駒王の秋の集会に引っ掛けて、沢登り友の会で沢上谷に出かけました。

田辺さんと武田さんと塩崎さん・ナミカワさん・山本恵組が集合の 10/8 昼間は雨模様。田舎の県道からの偵察では随分な水量だったとみんなの話。テント泊など論外で民宿をあたっていただくとすべて満室、結局道の駅で「駅沈」。夜中 2 時頃に大森も合流。雨は

ようやく上がってきました。

10/9 7:20 武田さんの見送りの中入溪。水量は前日比で驚くほど少なくなったとのこと。沢上谷は滑(ナメ)が特徴。川床一面つながった岩で、基本的に段がない、継ぎ目がない。シームレス。不思議な造形美。本谷から枝沢の五郎七郎の滝を見物に寄ったり、沢ぐるみの実を拾ったり。別の枝沢、オーバーハングの落ち口から霧のような流れの落ちる岩洞滝を見上げたり、水辺のハイキング。立派なカモシカも見ました。

もどった本流をつめて 9:30 蓑谷大滝。50 か 60m くらいの一塊の岩盤の滝。ここも継ぎ目なし。左岸を大きく巻いて高度を稼ぎ、上部のトラバスのザイル 40m 足らずを FIX。トラバスの終了点近くで 1m あまりのクライミングダウンがこの日一番の難所。菜箸くらいの太さのブッシュ 3 本ほどずつを左右の手でつかんで、泥壁に微妙なスタンスを探す。かぶり気味で足元が見えない。抜けんといて！と握り締めた菜箸 3 本は結構丈夫で、どうにかクリア。でもそのうち抜けます、きつと。10:45。

核心部の上はまたシームレスの川床。悪場を過ぎてメンバーにこやか。光も差すようになって川床散歩。



10m あまりの滝や小滝・中滝・滑を進むうち谷も流れが細くなり空は大きく開けて林道に行き当たる。しばらく林道沿いの沢を進んで、そろそろ終了と岸に上がる。終了点 11:15。武田さんのお迎えの車で県道を下り車デポに。

地学の実習みたいな面もありましたが、ニコニコ歩くなかで適当に緊張して、蓑谷大滝の高巻きでは結構真剣になって、好印象の 4 時間あまりでした。

平湯で蕎麦をご馳走になりまして、ガチャさん有難うございました。ご馳走になったから申し上げるのではアリマセンが、ガチャさんお元気ですね。又来年もお付き合いください。それまでのスキーもお楽しみ。

グランドキャニオン

福田信三 '05/10/19 (水)

グランドキャニオンにいます。3 度目で初めての雨、雨合間を縫って 2 つのポイントからキャニオンの眺望。1400m 下のコロラド川の濃緑色の流れ。息を呑む景観、何度来ても新鮮。地球の生い立ちを感じさせる浸食による渓谷。これは美しいというより、人のチップケさを思い知らされるし、こんな景観を神は創造されたのかと思わざるを得ない。晩秋の冷風に凜として聳える赤茶けた岩山。明日はノースリムに向かいます。

念願のスイス周辺の三山を巡ってきました

井上 徹 '05/11/04 (金)

スッカリご無沙汰しております。昨年、ヤット若い人をお願いし引退し、伊豆の山中に夫婦二人で隠遁生活をしており、ゴルフと釣りとり山歩きはの仙人生活の毎日です。

先月、結婚 40 周年(正確には 39 年ですが・・・)記念として家内と二人で念願のスイス周辺の例の三山を巡ってきました

皆さんのように身体に鞭打っての山歩きではなく電車やロープウェイをお願いしての軟弱なものでしたが・・・

写真家として約 800 点近い写真を撮ってきました全てを見ていただくことは出来ませんがその一部を塩崎君にお送りさせていただきましたのでご覧いただければ幸甚です



高野山も紅葉が映えてました

廣瀬健三 '05/11/06 (日)

過日、剣岳西面 中山(1,255m)頂上から見た初雪の小窓尾根は素晴らしく目に焼き付いてますが、昨日の快晴下の高野山のモミジもハットするぐらい綺麗でした。今年はモミジが綺麗なようです。

JAC関西支部の設立 70 周年記念の集い(JAC創立 100 周年を機に)で高野山の宿坊、遍照光院に泊まりました。

金井健二氏、宗實二郎氏に山獄寮が届いてましたので喜んでおられましたよ。

ついでに甲南高同期の笹谷君の話が出ました。京大山岳部OB仲間では ベベ なる愛称の由。相変わらず海外を歩き回って元気です。

キノコ&かにツアー

kannroku '05/11/20 (日)

キノコ取りの扇ノ山は雪の中。この雪の中では我等素人では無理と諦め扇ノ山に登る事に。現役森本・神澤両君のラッセルに助けられ、浪川・井上・森本無事頂上に。50cm程の積雪。

さすがに登っている人には出会わず、久しぶりの積雪登山。夏山とは違う山登りをして来ました。現役の皆さんありがとうございました。

企画をしていただいた山本恵昭さん、キノコ・焼き蟹等おいしかったです。また次回も参加しますのでよろしく。

森本寛之

久しぶりの投稿です。今回カニキノコツアー

に参加させていただいた、現役の森本寛之です。

まず、武田会長、いつも現役の為にお車ありがとうございます。おかげさまで大変助かっております。

キノコ狩りでは想定範囲外の雪に装備が全く追いついていませんでした。がしかし、一足早く冬の訪れを感じることができ、ついっっかり、白馬のパウダースノーを浴びながらシュプールを描く姿が脳裏を横切りました。

私たちは肝心のキノコはほとんど収穫できませんでしたが、山本大先生の鋭い嗅覚のおかげで、ほんとにいい思い出になります。あの食感忘れられませんね！家では手土産のカニが大大好評でした！！家に到着するや否やサッと湯で茹でてそのままかぶりつきました。身が甘く美味しく、あまりにも好評で、来年も沢山買って帰って来いと指令が出たくらいです。

特に小さなセコガニがとても美味しかったです！また来年も参加させてください！

今度は美味しいキノコを自分も採れるように嗅覚を磨いておきます！

山本恵昭

土曜の朝4時頃、扇の山への林道を上がっていると、雨がみぞれに変わってきました。あんまり上まで上がって雪が積ると厄介なので、途中で車中泊。6時頃に目覚めると、しんしんと粉雪が降り積もり、辺り一面真白。すぐに林道を下り、雨の中、養魚場より下で皆さんをお待ちしていました。

結局、4駆スタッドレスの武田号と塩崎号で畑が平駐車場へ。先週チェックしたポイントは全て雪の下、膝上の積雪でした。森本さんチームは山頂へ、鈴木さんや安井さんの奥様も雪の中で健闘、私と谷くんは雪をかき分けキノコ探し。何とかナメコをおかず分探し当て、七釜温泉へ。

キャンプ場の炊事場が利用でき、雨の中大助かり。キノコ鍋と焼きカニに、「酒が足りんぞ」との声も。。

翌朝、塩崎さんのガッツで競市のカニを大量に仕入れ、大森さんの緻密な分配で、皆さんお土産を手解。

その後、大森さんと私は、某山某所にて3時頃までブナ林徘徊。ナメコ・ブナハリタケ少々、ヒラタケ2枚、チャナメツムタケ少し。「ムキタケ有ったよ」という大森さんの手にはツキヨタケが・・もちろん毒です。

今回の参加は、武田さん、鈴木さん、二谷さん、森本さん、塩崎さん、浪川さん、井上さん、現役森本君、谷君、神澤君。民宿泊で安井さんご夫妻、夜に大森さん。計14名。悪天の中、お疲れ様でした。

大森雅宏

遅れて神戸を出て、浜坂に着いたつもりが香住だったり、かきの値段付けに戸惑ったり、山嶽寮用の写真を撮り忘れたり、毒キノコを採ったり、まあ色々ありましたが、皆さんの笑顔もかきの味もすてきでした。

おかげで楽しいひと時でした。山本君、今年もお世話を有難うございました。

また集まるのを楽しみにしています。次はいよいよ雪のシーズンですね。

アンナプルナ・トレッキングに行ってきました 水渡清夫 '05/12/09 (金)

40 年卒の水渡清夫です。兵庫県山岳連盟主催の「アンナプルナ山群トレッキング」に夫婦で参加し、先日帰ってきました。簡単ですが報告いたします。

むかし、大関さんのお宅で開かれた「花見の会」でヒマラヤの話になったとき「行きたい」と呟いたら、飯田さんが「行くんやったら早いほうがええ」「そやけどお前、嵌るぞ・・(会社辞めることになるでエ)」みたいなことを言われたのを思い出します。

- ・日 程 10 月 29 日～11 月 18 日 (21 日間)
- ・コース アンナプルナ山群の東側をクディ→マナン→トロン・パス (峠) (5,416m)→ムクチナート→ジョムソン→ポカラ
- ・メンバー 14人 (平均年齢 66.6 才)

我々以外は全員ヒマラヤの経験者で足腰の強い元気な山好きの人達でした。

シェルパ、ポーター達が 40 人。総計 54 人の大人数でスタート。

・トレッキングの様子 快晴が続き山々の景色は素晴らしい。高度順応を図りながらの進行で、ユックリした日程が組まれていた。(今年のアンナプルナは例年になく雪が降り、ハイキャンプからトロン・パス、ムクチナートまで、かなりの雪だった)

・トロン・パス (峠) 午後になると吹く峠の強風を避ける為、午前 3 時半、暗闇のなか、凍てつく雪道を出発。クラスト交じりの急な雪面と氷点下の猛烈な風の中をアイゼン、ピッケルを持たない我々一行は緊張感をもって行動。

この峠越えは「トレッキング」というより「厳しい冬山」の様相となったが特段のトラブルも発生せず、無事通過。あとは散歩気分のトレッキングに戻ることが出来た。

・感謝

ヒマラヤに行けたのは柏君と彼の友人で関学 OB の小西さんからの情報と誘いがあったからでした。貴重なチャンスを戴いたお二人の親切に感謝しています。

また、このトレッキングに何度か参加された福田 (信三) さんには沢山のことをお酒を飲みながら (これが良かった！) 教えて戴きました。有難うございました。

kannroku

水渡さんご無沙汰。やっと掲示板にやってきましたね。待っていました。柏さんが楽しい便りと写真。塩路さんが時たまこれから一緒に山に行きましょう

アンナプルナトレッキングを奥様同伴とは驚きです。先日安さんも奥さん同伴で浜坂キノコ取りに。いいことです。アンナプルナ連峰見れたようで感激ひとしおだったのでは。

処女峰アンナプルナはもう古典になったようですがエルゾグ・ラシュナルの壮絶なる頂上からの帰還思い出されます。綺麗な写真楽しみにしておりますので。

福田信三

水渡君、ご無事で何より。大したアドバイスではなかったものの、期間中は気になっていました。

何より、ご夫婦で楽しまれたことが貴重だし、うらやましくもあります。どうぞ続けてください。連れ添うた意味があると思います。

そうですね、どんなところにも落とし穴があるけど、それをクリアした喜び、生涯の思い出となるでしょう。ドンドン行きまくってください。

縁があれば一緒できるかもしれません。

柏 敏明

水渡君のアンナプルナトレッキング、ご夫婦で行かれて羨ましい限りです。是非写真を見せてください。

ご無沙汰していましたが、お陰様で、小生もこの年末で完全フリーとなりました。早速ですが、飯田さん、1月の雪見会を、賀茶さん、2月の高遠スキー合宿を宜しくお願いいたします。目下、山本先生にスキー道具一式購入のアドバイスを受けています。

皆さん、山に、遡行に、スキー、釣りに、温泉、何でも声を掛けてください。サーやるぞ～。

ワハーン回廊

米山悦朗 '05/12/23 (金)

甲南山岳会の皆様へ

来年1月15日発売の山と溪谷2月号に残された秘境・ワハーン回廊という題で数ページを使って私の写真と記事がです。

一度本屋で立ち読みしてください、中身は去年の山岳寮の報告のダイジェストと写真ですが、写真はかなり迫力あると思います。

特にワハーン回廊の俯瞰写真は見開き二ページをつかったド迫力です。

また1月中旬から3週間ほどパキスタン地震とアフガン支援で現地に行ってきます。

福田信三

米山さん、伺っていますとパキスタン、アフガ

ン辺りに集中していらっやいますね。かなりの思いがおありなんでしょうね。小生のようにあちこちフラフラが好きなものにとって、すごいなあと思うばかりです。

私は今メルボルンにいます。寒い冬を脱出というより、オーストラリアが好きだからです。

別に何もしないのですが、持ってきた志ん生の落語を聞いたり、乱読したり、2時間ぐらい風呂に入ったり、めちゃくちゃしてます。

明日はクリスマスイブ、皆さま良いクリスマスをお迎えください。

戸倉峠スキー散歩

山本恵昭 '05/12/26 (月)

大森さんと、氷ノ山戸倉峠の林道でスキーハイクを楽しんできました。戸倉トンネル手前の駐車場に車を止めて、1時間半で戸倉峠、さらに北へ1時間半のラッセルトレニング。数日の大雪で、木々も真白。パウダー滑降を楽しめる斜面を探しましたが、植林ブッシュで諦め、快晴のもと林道をのんびり下ってきました。

虚空像山ハイキング

山本恵昭 '06/01/09 (月)

雪はたっぷり有るのにスキーにも行かず、だらだら連休を過ごしていましたが、今日思い立って嫁さんと三田の虚空像山へ行ってきました。車から、登り1時間、下り30分。雪が所々残っていましたが、展望抜群のお手軽登山でした。下山後、陶の郷でプレゼント用に立杭焼き湯呑みを購入。焼き物の良し悪しはよく分かりませんが、手にとって見ていると窯元によっていろいろ味があって面白いんですね。

あれやこれやら

廣瀬健三 '06/01/10 (火)

虚空像山、今年はこの辺の山も歩きたいと思っています。

去年は、念願の丹波の山に二回行き、其れなりに満足でした。(秋の向山連山縦走と冬の竜ヶ岳)

先の土曜日は播州・坂越(さこし)港後背の丘陵歩きを地酒忠臣蔵付きで楽しんで来ました。日向(ひな

た)日よりで、陽光に輝く瀬戸内を眼下に眺め乍らの
ハナビリ ハイキング。これも又良しです。

雪見会の代わりに神鍋へ

山本恵昭 '06/01/28 (土)

日曜日に会議があり雪見会に行けないので、嫁さんを誘って神鍋に行ってきました。いつもの林道に行こうと思ったら、雪で村の途中で通行止、駐車場所もない。あきらめて村岡トンネル手前の路肩におき、営業を止めてしまったアルペンローズスキー場に行ってきました。シールをつけて登り1時間、一番上の風下に雪でベンチをつくりコーヒー沸かしてランチ。下りは足首ほどの深雪をのんびり滑降。嫁さんは、初めてのシール登行でした。

我が家の車ノアはディーゼルのため、今回で引退です。いろいろな方といろいろな山行に利用し、車中泊も良くしました。あちこちボコボコになってしまいましたのご苦勞様。

次は、諸般の事情から経済的にお仕事車トヨタクシードです。ノアよりかなり狭くなりますが、また一緒にさせてください。

雪見会

塩崎將美 '06/02/01 (水)

飯田さんお世話になり有難うございました。

快晴無風の29日に山々を眺めながらのスキー、腕の悪さを忘れて最高に楽しかったです。

来年もよろしく。

小西啓右(関西学院大 AC)

飯田様

雪見会参加させて頂き有り難うございました。皆様大変お元気でスキーレベルの高いのに感心いたしました。浪川さんに初の山スキーに連れて行ってもらい良い経験をしました。ただ予想以上の難しさに少しショックを受けました。とにかく大変和氣満々とした雰囲気でも私も貴会員なみに楽しく過ごさせて頂いたこと感謝しております。今後ともよろしく願いいたします。



柏 敏明

7日から、関学OBの小西君と初めて雪見会に参加させて頂きました。

28日は梅池スキー場で、皆さんに手取り足を取られながらカービングスキーを教えて頂きました。出来の悪い生徒で済みません。

29日は雲一つない快晴。鹿島、五竜、白馬三山がバッチリ。ドン吉ガイドと天狗平まで山スキーに行く小西君を早大小屋まで見送る。(実際は技術未熟、体力不足のため付いていけず) 午後は、カービングの復習。

上級コースが滑れず、初級コースに逃げても誰かが必ず後を付いて来てくれ、集合点わからず、ウロウロしていると皆で探して頂きました。下手でお荷物の小生でも、スキーを楽しませてやろうという皆さんの気持ちが有り難かったです。腰の痛みも妙高のようにガツガツせず、余裕を持って滑ったので余り痛くなりませんでした。

ナイトウイスキーは、関学と甲南の交流会、来年の雪見会は合同でやろうと大いに盛り上がりました。

30日は岩岳スキー場に場所を移し、まだシュプールのついていない斜面をプライベートスキー場のように我々だけが滑り最高でした。その後、皆と別れて小西君と塩崎君の三人で八ヶ岳山麓三井の森にある関学山岳部OBの門脇ペンションにお邪魔しました。二百数十人しか資

格を持っていないという山岳ガイドの門脇さんから、最新の道具の使い方やロープワークを教えて貰い、勉強になったと共に隔世の感を実感しました。

31日は門脇ガイドとブラッシュ高山で最後のスキーを楽しんだあと帰途につきました。

飯田さんをはじめ参加の皆様、色々ご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした。でも、最高に楽しかったです。有難うございました。



塩崎将美

雪見会解散後、蓼科に走り三井の森にあるカドワキ・ペンション

<http://www.lcv.ne.jp/~pkado/index.htm>

に泊まりました。門脇君は関学山岳部OBで私と同学年です。40年ぶりに合う彼はプロの山岳ガイドの資格をとってました。彼の山の話、新しい山の技術/道具の話で大いに盛り上がり楽しい酒を飲みました。昨日は彼を交え関学二人、甲南二人でブラッシュタカヤマを滑り5日間のスキーツアーを終了しました。

バレンタインハイク

山本恵昭 '06/02/12 (日)

今日は、嫁さんと下の娘の3人で神戸市立森林植物園のバレンタインハイクに行ってきました。植物園の駐車場に車を止めて、チェックポイントの谷上駅へ下る。再び登ってくる途中、弓削牧場へ寄り道しホットチョコレートの無料サービス、ついでにケーキ。

植物園ではソフトクリームの無料サービス、コンパスつきナスカンの景品も。雪景色の植物園を散策して帰ってきました。寒かったですが、お得な一日でした。

新しい車、サクシードが届きました。前のノアよりかなり狭くなりましたが、経済性優先で…。シートをたたむと、なんとか2人が中で寝れます。4WDですが、まだスタッドレスもチェーンも用意できていません。近いうちに安いホイールを見つけて雪山バージョンに使用と思います。14インチ、5.5J、4穴、PCD100のいないホイールをお持ち方、おられますか？

ワンボックス用スキーキャリア、どなたか要りませんか？ノアで使っていました。窓の上に溝があるタイプの車ならセットできます。

タスマニアは雨でした

越田和男 '06/02/17 (金)

タスマニア島の中央高地を縦走するオーバーランド・トラックというのがあり、小屋泊まり5泊6日のトレッキングに参加して今朝帰ってきたところです。精進悪かったのか始めの4日間雨ばかり、最高峰のMt.Ossa(1617m)登頂も断念しました。

6人パーティにガイド2名プラス日本からの添乗員の一行9名(なんと小生以外8名が女性!!)で専用貸切小屋を使用するという贅沢な山歩きでしたので、それなりに楽しんで来ました。

標高1000m位に点在する湖沼、湿原、原生林、溪谷と滝、岩峰などの景観とワラビー、ウォンバット、針モグラ、それに恐ろしい毒蛇などの野生動物との出会いが売り物ですが、雪山がないのと、花の季節にちょっと遅かったのが残念でした。

スキー

飯田 進 '06/02/21 (火)

賀茶さん、皆さんお世話になりました。

野麦峠如何でした。こちらは富士見辺りに来て雨になりました。スキー場はガスって見えませんでした。

皆さんからお預かりした分、昨日お送りしておきました。内容は、フェリーニ、プロブレニューム、雪柳を会わせたもの、です。三月またお会いしましょう。

柏君 とりまとめ宜しく。

北ア眺望のすばらしい山

雨宮 宏光 '06/02/21 (火)

昨日、野麦峠スキー場で滑りました。松本市運営で立派な無料休憩所・更衣室完備で朝8時から使えるそうです。スキー場に鉢盛山(h2,446m)ツアーと案内あり、詳細知りませんが(多分スノウ・シュー使用)。以下参考まで

スキー場リフト終点h2,130m、あと尾根伝いに小鉢盛山(h2,374m)から鉢盛山まで。天気よければスキー、雪上散歩、景色と三点セットのお楽しみ。98年10月に波田町から黒川林道終点の六兵衛小屋で泊まり、鉢盛山に行きましたがこのとき天気悪く眺望なし。町営の六兵衛小屋はすばらしい小屋でした。鉢盛山頂上至近にも立派な避難小屋がありました。

スキーでハイキング

塩崎将美 '06/02/26 (日)

山本恵昭君の案内で神鍋の潰れたスキー場アルペンローズに行ってきました。快晴無風、スキーを履いたハイキングと言う感じでした。登り1時間ちょっと、汗はかきましたが私の体力でもなんなく頂上へ。



雪も丁度良い感じにやわらかく、ゲレンデと違いまったくな斜面にシュプールを描いて滑る、なんとも気持ちのいいものです。下りは数分。登りはこれくらいで下りがもう少し長ければと贅沢を言っていると山本君がもう一度上りますか。いやいや早く鍋を食べたいと車まで滑り下り先輩の権力で、帰りの運転頼むでと

言いながら飲んだビール、最高に上手かったです。大森/山本君、いつもお世話になり有難う、又連れて行ってください。

復 帰 ?

谷 '06/03/06 (月)

現役の谷です。ご無沙汰しております。

去年の怪我からの完全復帰とはまだいきませんが、3月4-5日、大山、弥山(みせん)尾根に行ってきました。以下その簡単な報告です。

麓の駐車場 07:00 出発、1h程で大神山神社に到着。登攀の無事を祈り一礼を済ませた後元谷小屋へ。09:00 間谷小屋に到着。小屋にはバリエーションに登りの来た登山客でいっぱい。

09:30 装備を身につけ弥山尾根取り付けに向けて元谷小屋を出発。トレースがあり容易に取り付きに到着。先行に1パーティー取り付いておりちょうどセカンドに登り始めたところ。

私たちもすぐに準備し 10:20 登攀開始。今回はまだ病み上がりと言うことで全ピッチセカンドで登らしてもらいました。

雪質は粗目の上層 40cm新雪。いかにも雪崩そうな感じがしました。案の定5P目登攀中に隣の滝沢で大きな雪崩が起こり、元谷小屋から取り付けまでのトレースが一瞬にして雪煙に飲み込まれていきました。次は別山沢が雪崩そうやな、と話しながら順調にザイルを伸ばして行きました。15:00 弥山(1,711m)山頂へ抜け、そこから夏道を下山して行きました。途中別山尾根パーティーの核心部の登攀を見ながらの下山でした。

この日は好天に恵まれ日本海を望みながらの快適な登攀が出来ました。

皆さん活発ですね

廣瀬健三 '06/03/12 (日)

スキーに 海外旅行に 花見会にと、KACの諸先輩/諸兄 御元気な様子を拝見してます。

報告する程の事は全くやってませんが、低山歩きや、青春18きっぷを利用しての、短期旅行を楽しんでいます。

1月 は 故郷;ふるさと とき の播州赤穂の地、坂

越の丘陵歩き、2月は仁川ーおたふく山ーロックガーデンー芦屋 までのハイキング。45 年振りに奥池に行き、其の変わりようにビックリ。

1月に、この切符ではじめて舞鶴へ行き、引き揚げ記念館、海軍記念館を尋ねたり。先日は尾道に行き、戦艦大和のロケセットを見て、鴨方にて一泊後、倉敷、福山、岡山に立ち寄って城巡りました。昨年来 テニスをやりおり、足腰は強くなった気がします。ともあれ、老人が青春切符を使って、安上がりの旅ができて、それなりに満足してます。来週は坂越一日生に行き、瀬戸内ぎわのウォーキングと活きのいい魚と地酒を味わいに行きます。

(家内からは、もう付き合いきれません。どうぞ一人で行ってくださいと言われてます。)

梅池合宿

柏 敏明 '06/03/21 (火)

梅池合宿に、東京、大阪、松本から、白鳥山経由や、車、電車、深夜バス等で総勢 16 名が集まりました。

関学OBの南井さん、夏山で一緒にする廣瀬さん、山本さん。それに川野君の次男、三男さんと 18 日の夜は、16 歳から 70 歳が一緒になっての大宴会、歌こそ出ませんでしたが、談論風発、大いに盛り上がりしました。40 年 50 年前のことを恐ろしいほど覚えている人もいますね。

翌日は、大渚山ツアーに行く者、小雪のなか、スキー技術錬成に励む者。天気の良い日は温泉だと保養に努める者、それぞれ楽しみました。

小生と同期の土手君の興味津々のスキーテクニックは、雪面からスキーが離れず、雪に馴染んだ滑り方をしていると雨さんが絶賛でした。

20日の期待のヘリスキーは、天気晴朗なれど、風強しでヘリが飛ばず、楽しみは来年となりましたが、正直ほっとしたと云った所です。

飯田さんをはじめ、皆さんに色々とお世話になり有難うございました。また、宜しくお願いします。それにしても、今もって小生より下手な人が参加しないのが残念です。皆さん、スキーは楽しいですよ...



川野幸彦

梅池では親子でお世話になりありがとうございました。しかし疲れしました。少し騒ぎ過ぎました。そんな風なので先程まで昼寝をしてました。息子はまだ寝ていますが...

大渚山ツアーはいかがでしたか？いつものことながら元気一杯の浪川さんには脱帽です。

また誘って下さい。

南井英弘 (在千葉県、関学山岳会)

KAC梅池スキーに参加の皆様

この度は厚かましくも仲間に入れていただき、お蔭様でスキー三昧の3日間を過ごす事ができ感謝しています。

武田会長はじめ御一緒させていただいた皆様のスキーレベルの高さに驚嘆し、和気藹々とした会の雰囲気を楽しみ思うと共に飲んでも崩れない紳士集団に敬意を表します。

毎日毎日個人レッスンをして下さった方々のお力添えで華麗なスキーを80歳まで楽しむべく自信を持ち努力し頑張ります。

これに懲りずに今後とも宜しくお願いいたします。

山本 薫 (大阪ぼっぽ会)

梅池合宿参加の皆様、ヒゲの山本です。

このたびは色々ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。又ツアーでも大変お世話に

なりありがとうございました。

先輩の方々の楽しい話と、すばらしいスキータクニックを拝見して、まだまだ精進せなあかんと思わされた3日間でした、今後もよろしくお願いいたします。

大森雅宏

週末山スキーに行ってきました。

土曜 18 日は親不知近くの白鳥山、良いお天気でした。メンバーは会計山本をリーダーに浪川さんと私。昼過ぎに麓に戻ってその足で梅池の皆さんに合流。楽しくはめをはずしたのも、翌日は荒天でチンデンと踏んだからですが・・

日曜 19 日、朝食後てっきり皆さんはゲレンデへ、私は二度寝と思っていたら、リーダー山本と竹中さんが何やら打合せ。大渚山へ行きましょか、ということで私も誘われました。メンバーは他にヒゲの山本さん(竹中さんのお知りあい)芦屋の沢登りもご一緒でした。

途中色々あったのですが、印象は「私以外はスキーがうまい・大変うまい」「私以外はみんな元気・大変元気」

低温・風雪でハナは垂れるワ、新雪にびびるワ、でいつもに増してさっぱりワヤでした。でも過ぎると楽しい思い出、竹中さん・ヒゲの山本さん・山本リーダー、有難うございました。

関学南井さんはじめ前田館にお集まりの皆さんも有難うございました。



山本 恵昭

前田館の集まり、お世話になり有難うございました。いろいろな方のお話を聞かせていただき楽しかったです。

18日は、浪川さん大森さんと白鳥山ツアー。上路村 6:40 発、正面尾根の下部はブッシュの多いやせ尾根、800m位からブッシュも少なくなり 1,000m付近からは広い快適な尾根となる。梅海新道に合流し山頂小屋へ 11:30~12:00。東に火打山・焼山・金山・天狗原山等ここ数年通っている頸城の山々、北は日本海、西から南にかけて真白な初雪山と険しい剣岳、などらかな朝日方面。360 度のパノラマは最高でした。下りは、大森さんと浪川さんは北西尾根上を。私は北西尾根沿いの誰も滑っていない北斜面を一滑り。緩んだザラメ雪で快適。1,000m程の所で斜滑降し尾根上に合流。高度を下げると、ブッシュも多くなり雪が腐って、最悪の状態。ヘロヘロになって、上路に 14:00。梅池へ車を走らせていると雨がパラパラと。

19日、早朝の雨は次第に雪に。ゲレンデのつもりが、急に大渚山へ行くことに。いろいろ有って、竹中さん、山本薫さん、大森さん、私の 4 人で栃の実亭 10 時頃発。大雪の中、林道をたどり、左へトラバースし山田旅館からの尾根に合流。鎌池付近のルートは視界が悪いので地形的に難しい。上部で再び林道へ出て、風雪厳しい湯峠までで終了 12 時頃。下りは積もった雪でほとんど林道歩きでしたが、3カ所ほどパウダーの林間滑降を楽しめました。13:30 頃栃の実亭着、すぐに山田旅館の温泉に浸かって暖まりました。

21 日ポイント稼ぎに、妻とハチ北スキー場へ行ってきました。もう充分と言うまで滑りまくり、湯村温泉へ。さらに浜坂のいつもの場所で車中宴会・車中泊、モサエビの刺身とワインで乾杯。朝、港の競り見学。残念ながらカニ漁は終わっており、ホタルイカやいろいろなエビが並んでいました。これでもう一回位スキーに行っても大丈夫かな！

銀杏峰2コース

山本恵昭 '06/03/25 (土)

金曜日、急に休みが取れたので、金土で銀杏峰に行ってきました。両日とも、好天に恵まれて、白山はもちろん、御岳、乗鞍、北アルプスがきれいでした。

24日、志目木谷の滑降。わらび峠小屋7:00発、志目木谷東尾根経由、銀杏峰 10:30。この時期には珍しく木々の枝は真白、クラストした上に新雪がうっすらと。とにかく風が強く寒い。山頂でデジカメのセルフタイマーをセットしていると電池が切れて、残念。志目木谷上部はカリカリクラストなので、少しでも雪の乗った谷状の所を選んですべる。850mの安全地帯まで降りて休憩、この辺りから谷割れ。ダムを一つ

超えて渡渉し林道へ。わらび峠小屋 12:00。

大野市へ出て、「あつ宝らんど」で入浴昼寝。夕食を買いに行つて、「焼き鯖寿司」というなんともミスマッチな物を見つけ思わず購入。意外と美味しかったです。宝慶寺いこいの森で車中泊。

25日、銀杏峰～部子山の周回コース。いこいの森 7:00 発、北尾根経由、銀杏峰 10:00。西へ続く尾根の小ピークを巻いてすべり、登り返して部子山 11:30。鳥居と電波塔の有るピークから北へ続く尾根上と東斜面を絡めて滑る。1087mのピークを経て、1050mから快適な谷を滑って林道へ。ダムの下から雪がなくなり、徒歩。村の手前で上の林道に上り返し、いこいの森 13:20。なかなか変化に富んだ良いコースでした。

ハインリッヒ・ハラー

ハインリッヒ・ハラー

越田和男 '06/01/09 (月)

今朝、ハインリッヒ・ハラーが死んだ、と新聞見ながら眩いたら、横にいた娘が、それ誰？という。Seven Years in Tibet と言ったら、映画観た、主演はブラピ、そのあと本も読んだと。

思えば「チベットの七年」とアイガーの「白い蜘蛛」はともに我々の山岳部時代の山の本のベスト・セラー。現役時代あまり本は読まなかったけれど、この2冊は別格でした。

アイガー北壁もナンガパルバットもチベット・ラサもこの眼で見ることが出来るようになるなど、想像もしなかったし、ハラーは別世界のヒーローでした。

彼がナチの信奉者であり親衛隊とも関係があったなどというのを聞き及んだのはずっと最近のこと。教科書には決して出ることのない歴史の一齣を歩んだ一登山家だったのでしょ。時代は変わり確実に20世紀は過去のものとなりつつあります。

10数年前、出張先のインスブルックで取引先の山好きが、当時リヒテンシュタインで余生を送っていたハラーに週末会う段取りをしようかと言ってくれたのを、忙しさにかまけて断ってしまったのが悔やまれる。

歴史に翻弄されたハインリッヒ・ハラー 雨宮宏光 '06/01/10 (火)

1912 年	オーストリアで生る
1938 年	アイガー北壁初登頂 ドイツの国威発揚となる
1939 年	ナンガパルバットに遠征 下山後イギリスの捕虜となる
1944 年	脱出しチベットのラサに
1951 年	ラサからインドに逃げる
1953 年	帰国 チベットの 7 年発刊
1958 年	白い蜘蛛 発刊
1997 年	アメリカ映画 チベットの 7 年封切り ドイツの雑誌にハラーがナチスの親衛隊員であったこと暴露される
1999 年	新編白い蜘蛛 発刊
2006 年	逝去 94 歳

オーストリアは 1938 年ナチス・ドイツに併合されてます。山狂いが禍してナチスの威信をかけたナンガの遠征隊員に選ばれた結果がまさか、インドに進出した英国の捕虜になるとは、以後辛酸を経ていたラサで再度中国の進出を受け、インドに逃げるとは。結果ハラーは 14 年間の国外生活を余儀なくされたのです。

1930 年代壊滅的混乱と不況のさなかオーストリアに台頭したナチに多くの若者が同調したのは仕方ありません。彼もその 1 人だったのでしょう。ドイツはゲルマン民族の身体能力の優秀性を誇示するため優れた登山者に最新の装備を与えたのです。

歴史の流れに翻弄されたハラーは気の毒でした。しかしアイガー北壁初登頂の記録は永遠に不滅です。

ハインリッヒ・ハラー 田邊 潤 '06/01/11 (水)

43 年前に小生がオーストリアのグラーツへ留学することが決まり、その時にコッシンから、ハインリッヒ・ハラーはグラーツの人だから是非あってこられたら良い、と言われておりながら小生のひとみしりの所為で何も無いままに帰ってきてしまいました。

小生の性格ですから別に合いたいとは思いませんでしたが、彼の本は読んで両方ともとても面白く興奮させられたものです。特にチベットの 7 年で、チベットに憧れました。

これも残したい書き込み

ロビンソン・クルーソーの話

越田和男 '05/09/17 (土)

チリ沖の孤島で「漂流記」のモデルといわれる A.セルカークの住居跡発見の記事が昨日各紙に掲載されていた。

なんとなくわくわくする気分で切り抜いていたところ、今朝は日経、朝日がそろってそれぞれ「春秋」と「天声人語」で取り上げていた。こんな記事にロマンを感じる人が両紙に居てホッとした。

詳細記事を掲載するナショナル・ジオグラフィックの来月号が楽しみです。

早起き

大森雅宏 '05/10/15 (土)

朝早くラジオを聞いていると、「新聞を読んで」という番組に南里さんの出演。先週一週間の新聞各紙を比較評論。読むのもまとめるのも時間内に収めるのも、なかなか大変な仕事でしょう。

ノーベル平和賞とパキスタンの大地震の二つを取り上げておられました。

聴かれた方おられますか。

大森さんへ

南里章二 '05/10/17 (月)

大森さん、土曜日早朝の放送を聴いていただき、ありがとうございました。朝、極端に早い時間帯ですので、皆様方には公表していなかったのですが、実は2年半前から、関西地区の12名の担当者の一人に選ばれて、ほぼ半年に一回位の割合で、ON AIR させていただいています。次回は来年の春頃になると思います。宜しければまたお聴きください。

岳友平井吉夫の訳書新刊

越田和男 '05/11/28 (月)

ヴォルフガング&ハイケ・ホールバイン著

平井吉夫訳

『メルヘンムーン』(原題 Maerchen Mond)

'05年10月 評論社 ¥1900

著者夫妻はドイツ語圏で売れっ子のSF・ファンタジー作家。本著は一大ベストセラーとなったデビュー作だそう。

なじみのない分野で、しかも450ページの大冊だったのでちょっとひるんだが、面白く通読出来た。

書店によっては児童書のところに並んでいたりするので目に付きにくいですが、SF・ファンタジーなどにご興味ある方は是非。

訳書書名がドイツ語と英語の重箱読みみたいで風格がないと平井に文句をつけたら、よく考えた末に決めたこと、自信をもってこれで良いのだとのこと。

映画「ココシリ」

越田和男 '05/12/31 (土)

雨さんから映画の話が出たので、来年封切り予定の映画を一編紹介しておきます。

英語題;Kekexili:Mountain Patrol

監督;中国期待の新人監督ルー・チューアン

チベット最後の秘境ココシリ(可可西里)の大自然の脅威にさらされながら、絶滅の危機に瀕するチベット
かもしかの密猟者を命がけで追い続ける男達の感動の実話。極寒のチベットで驚愕のロケ。

以上は宣伝チラシから拾ったもの。

どんな映画か知らないが、既にいくつかの賞をもらっているとのこと。

ココシリは我が先輩の雨さんとバブさんが一昨年目指した所です。やっぱり見ないわけにはいかない映
画です。封切決まったらまた掲示板に書きます。

皆さん良いお年を。

私の素顔が公表されました

平井吉夫 '06/01/27 (金)

早川書房『ミステリマガジン』3月号が2月26日に発売されました。創刊601号を記念した特大号で、倍
加した頁数に応じて定価もいつもの倍(2200円)になっていますが、375頁に私を紹介するコラムが載ってい
るので、書店でご購入のうえ、ご一読くだされば幸いです。

西宮から歩いて剣岳登頂

南井英弘 (関学山岳会) '06/03/25 (土)

雨宮宏光様

梅池合宿に参加させていただき、楽しく思い出に残るスキー三昧の日々を過ごす事ができ感謝していま
す。

前田館での雑談中に「関学山岳部員が西宮から歩いて剣岳に出かけた」と聞きましたが、本当でしょうか？い
つ頃の話でしょうか？」と話題がありました。

その場で戦前、ヒマラヤ登山の訓練だったらしいとお答えいたしました。

帰宅後、2000年1月1日付け発行のDAS EDELWEISS 17号 P37で以下のように記載されている事を確認
しました。この場をお借りして御報告いたします。尚、詳細は当時の部報かエーデルワイスに掲載されてい
ると思いますがJAC図書室に寄贈済みで手元になし。後日、調べてご連絡いたします。

「1941年(昭和16年)……5月の北鎌尾根は、吹雪に見舞われ3回のビバークを余儀なくされた。続く夏山は
剣岳、穂高岳、鹿島槍岳、東沢、南アへ分かれて行動した後、剣岳へ集合する計画が組まれたが、2隊が出
発した後、戦時体制による文部省の通達により、以後の計画は全て中止となった。既に出発した剣岳隊の計
画は、学院から剣岳頂上まで歩くというユニークなものでヒマラヤ登山のアプローチを想定して立案された。
井原はこの計画を達成した。」

今ではその気になればいつでもヒマラヤ登山に出かける事ができますが、戦争のため夢を果たすことが
できなかった先人たちの意欲的行動に感嘆し敬意を表するしかありませんね。

戦時秘話

雨宮宏光 '06/03/26 (日)

南井英弘様

西宮から歩いて剣岳に登頂した先人がいたという話を聞いたのはどなただったか忘れてしまいましたが、
早速にお調べいただき有難うございました。戦時体制下で、登山など非国民との誹りある中ヒマラヤへの憧

憬つり、担ぐ、歩く、がヒマラヤへの道と、文部省(軍部)の通達無視の行動となったのでしょう。日本各地から二日で剣岳登頂が可能な現在の人達が得る満足とは、較べようのない達成感を先人達は得られたと想像します。一切のパフォーマンスとは無縁なうちに、ただヒマラヤに行きたいという純粋な動機での行動であった事が素晴らしいのです。余談ですが 1943 年?ごろから軍部は国民の士気高揚のため剛脚訓練と称しての登山を奨励し、新雪の穂高岳に機関銃を担いで登攀させられた悲しいソーパーティがあった時、井原さんたちは幸福でした。

森本寛之君の世界放浪旅行記

ラサより

森本寛之 '06/06/10 (土)

山岳会のみなさま、ご無沙汰しております。現役 4 回生の森本寛之です。大阪から上海行きフェリーで始まったこのたびですが、昨夜、無事にチベットのラサに到着しました。雲南省昆明から陸路おんぼろバスのみでここまで約 2 週間の道のりでした。

ここラサは都会化が進み、チベタンの色は薄まりつつありますが、ここまでの道中、すばらしいチベタンの原始的な生活に触れることができ、今までにない深い感銘を受けました。また詳しくは私のブログに掲載しているので、よかったら見てみてください。

これから先、聖山カイラスを経て、シルクロードのカシュガルを目指します。

現時点では、とても健康で、問題なくカイラスを目指せそうです。ただ、カイラスまでヒッチハイクで 7 日以上かかると言われています。ひとまず、無事のお知らせです。それでは失礼します。

詳しくは森本寛之君のブログ 「神戸の学生の世界放浪旅行記」
<http://blog.livedoor.jp/ss361092/> をどうぞ。現地から随時更新されています。

'06 年(平成 18 年)9 月 3 日現在トルコからの書き込みがあります。

「掲示板書き込みダイジェスト」のルール(過年度分を紹介・本号なら '05 年度)から
行くと次号紹介になるのですが、リアルタイムでご覧ください。

編集

甲南山岳部のホームページをご覧になったことがありますか？

ホームページの「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

「アルバム」では会員の山行の様子や街での姿が見て取れます。懐かしい写真も寄せられます。

<http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/>

甲南山岳会会員名簿

2006/7/31 調

山岳会総会でお目にかかった越田さんから、「甲南の記録にはニックネームがよく出てくるが、最近の人達には解りにくいのではないかと思うので氏名との対比表を作った」と旧制高校から昭和40年代の名簿をいただきました。

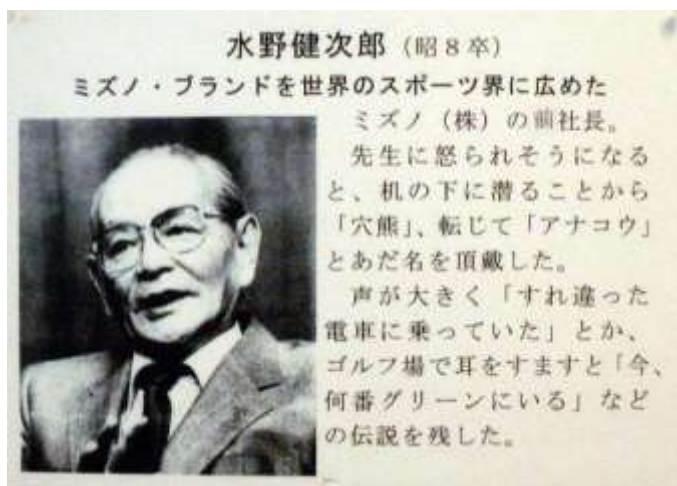
対比表は誌面の都合で「ニックネーム ほか」としましたが、原稿には「呼称・あだ名・兄弟関係・その他」となっています。昭和40年代半ば以降は編集ほかで追補しました。

旧制会員のニックネームの由来は「旧制甲南高校山岳部員の想出」(山嶽寮51号 故伊藤収二会員)をご覧ください。

時代が下がるにつれ「ひねり」のあるニックネームは少なくなって姓・名による愛称に変わる傾向があるような気がします。ご存知のニックネームやそれにまつわるエピソードがあればお知らせください。誌上でご紹介したいと思います。

編 集

昭8旧制理 故水野健次郎会員のニックネーム



2006.8.5 オール甲南 夏の集い 「旧制甲南高等学校展」展示から

編集後記

山嶽寮の手伝いを始めて5回目の作業です。はじめの年はドキドキで早くから準備、6月くらいには骨組みが出来ていたのですが、だんだん要領がつかめたのかあつかましくなったのか、今年は8月半ばから駆け込み、追い込み、滑り込みでした。ひょっとしたら秋の集会に間に合わないかと思ったくらいです。以前に編集後記にも書いたのですが、転勤で通勤時間が増えたこともあり、これまでほど編集に使う時間が取れなくなったことも原因のひとつです。50過ぎてあまりヒマな仕事と言うのも困ったものなので、まあ仕方がないことかと。

駆け込み・追い込みの中で越田さんにはいくつもアドバイスをいただきました。その他にも、ご自身でもご寄稿くださったり伊藤文三さんの原稿の受け渡しにお手間をかけてくださったり、平井先生のAACK人物抄や川見博美氏の書評の転載について交渉をしていただいたりと、大変お世話になりました。誌上を拝借して御礼申し上げます。

鷺尾さんからは、「手書きの原稿は時間がかかるだろうから」と5月の始めに山口雅也さんの追悼原稿をいただきました。印刷原稿は「今風」に表記していますが、もともとは旧字と歴史的仮名遣い、味わい深い原稿用紙の文字を辿ってパソコンに入力する作業は私の好きな時間でした。

作業の最終段階でネパールから西濱君の原稿メールが届きました。遅くなっても構わないから書いてほしい、とのリクエストに多忙のなか応えてくれました。その間のひとつひとつをご紹介しますと、目次と同じスペースを使うことになりますので省略しますが、大勢の会員諸兄から原稿をお寄せいただき有難いことと御礼申し上げます。

おかげさまで、本号もご覧の内容・ページ数でお届けできます。

山嶽寮の厚みが増えたのは、皆さんから直接お寄せいただいた原稿のほかにも、事務局井上さんが作ってくださる会員短信のページ、塩崎さんが管理してくださるホームページからの転載にもよります。お二人にも御礼申し上げます。

今年の編集後記は「御礼」ばかりを並べて締めくくります。有難うございました。

あ、もうひとつ。来年の原稿もどうぞよろしくお願いいたします。

原稿宛先 山嶽寮編集担当

電話／ファクシミリ

大森雅宏

Eメール

山 嶽 寮 第 61 号

発行 2006 年（平成 18 年）10 月

編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷

